内閣総理大臣賞

繋がる社会、人、未来

北区立明桜中学校３年
松﨑　潤

税が話題となる時、なぜ負担という面が強調されるのだろう。誰もが税の恩恵を受けているはずなのにと不思議に思っていた。僕が税を意識するのは消費税を払う時くらいだが、それでも通学路の整備や学校整備、教材や実験道具、部活の試合を行った体育館、幼い頃から通い続ける図書館など、身の回りには享受している物が多い事を実感している。これらは納税の仕組みが整っているからこそ活用できるが、人は税による恩恵をあまりにも当然のように受け入れ、その目的や役割よりも負担感に視点を向けるのではないか。

では、納税しなければ負担が減り楽なのだろうか、と興味を持ち調べてみると、そうではない実例を見つけた。一九八十年代、南半球の人口一万人程の小国は、リン鉱石で財をなし、無税のまま医療も教育も公共サービスも提供した。結果は資源の枯渇と共に約三十年で国の経済は崩壊、近隣先進国の援助に依存し現在も苦心している。僕は財政破綻は当然だが、人々から勤労意欲と納税意識、税に対する関心が消滅した事が怖いと思った。国や地域を衰退させた元凶だと感じたからだ。

税は財源があるからとやみくもに配分したり、後先考えず一時を謳歌する為に使うものではない。納税している人だけがサービスを受けるものでもない。それでも税を納めるのは将来社会を支える子供達の為、今後の社会をより良くし、誰もが安心して暮らせるようにと願うからだ。税は「社会と人を繋ぐ」「現在と未来を繋ぐ」大切な役割を担っている。子供の僕達も、少しでも教材や施設を大事に使う、ゴミの量を減らす、省エネを心掛け、自身の健康を保つなど貴重な税を大切に使う事に協力はできる。そして何よりも税は大人が考える事だと決めつけず、関心を持ち続けることが必要だと思う。

今後、少子高齢化が更に進み、税を納める人は減るのに福祉や医療に使う税金は増えるだろう。今、身近にある課題は将来の自分に関わると自覚を持ちつつ、税の目的や使い方を学びたい。僕が小学生で大怪我をした時もその後の通院も、また税について情報収集しに行った図書館も、誰かの尊い税が使われている。それならば、いずれ僕が働き手となった時、納税の意義や目的をきちんと理解していたい。そうする事できっと納税を「負担」ではなく「誇り」と思えるだろう。

僕達の暮らし一日にどれだけの税が活かされているのか今一度考えたい。社会基盤を支える税を無駄にしていないか。災害や疫病への備えは十分か。地域の課題は何か。情報やサービスを受け取れない人はいないか。税について大人も子供もオープンに意見を交わす事で学びを深め、発信力を高めれば「社会と人、現在と未来を繋ぐ税」というものをより身近に感じ、正しい在り方を見つける力になると思う。

総務大臣賞

山林と都市を税でつなぐ試み

山梨学院中学校３年
疋田　櫂

マウンテンバイクで櫛形山の山道を走り下りるのは、最高にスリリングな体験だ。スキーや登山とはまた違った、自然の中に自分を投げ込むような気分が味わえる。先輩たちと一緒にスコップで掘り、飛び跳ねて踏み固めたコースには、樹冠の枝葉の間から木漏れ陽が差し込み、吹き抜ける風に下生えのシダが揺れ、小鳥がさえずる。ここは夏でも涼しいエアコン要らずのスポーツフィールドだ。

けれども、私は見て知っている。山梨県内の多くの山林は、このように美しい景色からは程遠くなりつつあることを。かつて林業で栄えた地域でも、山林から出荷する材木の価格が落ち込み、伐採や植林にかかる費用と見合わなくなってきたため、儲かる見込みがなくなったと判断されてしまうと、間伐や枝打ちもされなくなる。結果、ひょろ長い木が密集した、異様に暗い森になり、下生えも育たず、木は病害虫に侵され、降った雨はしみ込まずに土砂とともに斜面を流れ下る。こんな山林では、何年後か何十年後かはわからないが、いずれ必ず、ふもとの市街地へ水害や土砂災害が襲い掛かることになるだろう。山林に囲まれた甲府盆地では、治山なくして平和に暮らし続けることはできないのに、みんな気づかない振りをしている。

この悪循環、地域の暗い未来を変えるために、新しい税金ができたと聞いた。その名は森林環境譲与税。来年から、全国でおとなほぼ一人当たり千円の森林環境税を集めて、六百億円の財源をつくる。そして間伐などを行う市町村やそれを支援する都道府県に配る、つまり譲与する。これは要するに、都市に住む多くの国民に、遠く離れた地域の林業を一緒に支えてもらおう、という試みだ。都会に住む人は、「そんな山林、自分には関係ない」「うちは木造じゃなくてコンクリートでできている」「こんな税金払いたくない」と感じるかもしれない。でも、そうではない。山林は、木材の供給源であるだけじゃない。水源であり、二酸化炭素の固定先であり、災害を防止する防災基地でもあるからだ。それどころか、「森は海の恋人」、つまり海の魚や貝や海藻ですら、山林からの恵みを、川を通じて受け取って育っていることがわかってきた。そもそも山と川と海は、大きな循環を担うひとつの生態系だと考えた方が、おかしな間違いを繰り返さなくて済む。

今、日本の山林には伐期つまり切りごろを迎えた木材がたくさんある。これをちゃんと切って使い、代わりの苗木を植林していくことで初めて日本は持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）を達成できる。森林環境譲与税は、都市と山林を税でつなぎ、山と川と海の絆を結び直す、壮大な試みだ。これが成功し、少しでも多くの山林が、あの櫛形山のトレイルのように美しく快適で健全な森林環境を取り戻すことを、私は願わずにはいられない。

財務大臣賞

税は社会を反映するバロメーター

熊本大学教育学部附属中学校２年
冨田　蒼渚

沖縄にとっての特色ある産業は、暖かい気候を生かしたサトウキビの生産ときれいな海を生かした観光産業である。今年の夏、私は家族と沖縄旅行に出かけた。離島まで足を運び、見渡す限りのサトウキビ畑の中をゆっくりと自転車で回り、きれいな海では優雅に泳ぐ野生のウミガメに出会うことができた。

政府もこの強みを生かした沖縄県の発展のための政策に力を入れている。その一つとして国内では珍しい租税特別措置等がとられている。いわゆる免税店のことである。私は那覇空港でこの存在を知った。調べてみると、これは沖縄型特定免税店制度と呼ばれるもので、沖縄から出発する旅行客が自己使用の目的で購入するものについて、空港内や決まった店舗で商品を購入する時に、税金の一部が免除されるという制度であることがわかった。

税収は医療や介護、教育などの私たちのくらしになくてはならない国の財源である。免税店は、税金を課さないため税収の意味では減少することになる。しかし、この制度のすばらしさはその先にあると感じた。それは次のような理由である。

同じ商品なら関税がかけられている商品とそうでない商品、安い方を選ぶのは人の心理として自然のことである。しかし、価格が安いとその分、消費量が上がり、店舗の売り上げが向上し、さらに、増加した来客対応のために新たな人材を雇うことで、雇用が生まれることになる。すると、店舗にかかる法人税や個人にかかる所得税、住民税などの税収につながることが考えられ、その結果、さらに地域が発展し、正の循環が生まれるからである。

世界に目を向けてみるとユニークな税制が設けられている。一つ目はイギリス。渋滞税と呼ばれるものである。首都ロンドンは特に日常的な渋滞がひどく、それを改善するために導入され、その結果、交通量が十五パーセント減少するなど、一定の効果が表れていると考えられている。二つ目はハンガリーのポテトチップス税。名称はポテトチップス税であるが、糖分や塩分などの割合が高い食品に課税され、国民の健康維持を目的として導入されたそうだ。

沖縄型特定免税店制度をはじめ、国家の税制について感じたことは、課税や免税の運用には工夫がなされていることやその根拠に時代や社会的な課題が反映されているということである。車や住宅など環境問題を考慮した税制もその一つである。そして、外国の例も含め、共通していることは、国民のくらしの質の向上を目指したものであることに他ならない。

税制は社会の課題を反映するバロメーターである。私は、国民の一人として、国の税制に関心を持ち、同時に社会に対する広い視野を持った人になりたいと思う。

文部科学大臣賞

税金が造る文化と歴史

大田原市立黒羽中学校３年
渡邉　千采

「お役人様、それを持っていかれたら、おらたち飢え死にしてしまうだ」昔話で出てくるこのやり取りが私の税金のイメージでした。権力者が農民から年貢を取り立てる、そんな印象でした。現在でも大人が、なぜか給料から引かれていて、それで公共施設や道路ができているとか、消費税が十パーセントになって、高いけど計算が楽だな、といった認識で私にとっては遠い物と感じていました。

学校で行われた税金教室の後、父とそのような話をしたら、「何言ってるんだ、うちは税金ととても近いところにあるんだよ」言われてしまいました。私の家は造り酒屋を営んでいます。言われてみれば、父は毎月末に酒税の申告書を作るのが大変だと言っていました。確かに、日本酒は飲み物なのに管轄が税務署であることを不思議に思っていました。

そこで色々と調べてみると、特に間接税に面白いものがありました。酒税、たばこ税、入湯税、ゴルフ税、航空燃料税、自動車重量税などです。主に嗜好品にかけられている税金で、あってもなくてもよい物にかけられているという雰囲気の記述でした。しかし、裏を返すと、あってもなくてもよい物、すなわち誰も保護しなくてよい物という解釈もできてしまいます。それでは嗜好物という文化が衰退してしまいます。そんな産業の保護のために税金は使われています。

酒税を例に挙げると、酒税は鎌倉時代以前に存在し、特に明治、大正時代は税収のトップで、日本の近代化に大きく貢献しました。税収の安定化の為、国立の研究所も造り、近代的な研究もされました。父も年に数回、酒類総合研究所や関東信越局の講習会に参加しています。今では、酒税により徴収された税金で日本の文化であるお酒造りの継承と普及にも税金は役立っています。最近では日本酒は海外で人気があり輸出量は伸びており、日本文化を代表する飲み物となっています。その普及活動にも税金は使われています。

その他でいえば、ゴルフ税は周辺の環境保護、青少年にゴルフの普及、入湯税は観光の促進や周辺設備の整備、航空燃料税は騒音対策や空港整備と、その活動を支えるために必要な公共事業もそれぞれの間接税が担っていることを知りました。

私は今まで、税金というと、公共事業や、公務員の給与といった、直接的で目に見える部分しか知りませんでした。しかし、歴史と税金は切り離せない物で、その時代の世相を反映し、文化の育成にも貢献してきたのだなと改めて感じさせられました。富の再分配という税金の大きな意義は素晴らしいものだと思います。しかし、それ以外にも税金により、伝統文化であったり、スポーツ文化、観光資源といった物の保護を育成し、後世につなげていく役割も税金はしてくれています。そして、それを将来担っていくのは私達の責任だと強く思いました。

税金に支えられて

藤女子中学校１年　　前田　海音

十三年前、全前置胎盤で管理入院していた母は大出血し、私は予定日より二ヶ月ほど早く緊急帝王切開で誕生した。早産児で低出生体重児の私はNICUにて人工呼吸器装着、中心動脈カテーテル留置などある意味フルコースの治療を受けた。また、その後の経過で指定難病と診断され、今に至る。毎月の通院、投薬治療、検査や入院は現在も続いている。両親は私に言う。「海音の命は、みんなに繋いでもらったものだよ。」と。私は今まで病院のスタッフさん達や、家族のことを「みんな」と称していると解釈していた。しかし私はこの夏、「みんな」は顔も知らないたくさんの人たちをも含んでいたことを知った。

先日私の「難病手帳」の更新手続きの書類を母が作成していた。この手帳を指定医療機関で提示することで、医療費の自己負担は二割相当額または自己負担上限額が定められた額になる。税金による補填で私の医療費負担は軽減されているのだと母が説明してくれた。母は続ける。「海音が生まれた時も、正直どれだけの請求が来るのかと思っていたの。私の入院費とダブルで支払いどうなるかって。でも、高額医療費制度の適用で拍子抜けするような金額でね。海音の病気とか、これからの不安は消えやしなかったけど、金銭的な負担がカバーされたことでどれだけ助けられたか。私達家族は名前も知らない、顔もみたこともない、たくさんの人の社会保険料や税金で助けてもらったんだよ。」と。衝撃だった。世の中の人がゆるやかに繋がり、支えあう手段として「税金」があるのだと初めて実感した。私が今まで、安心して必要な治療を受けることができていたのは、税金という後ろ盾があってのことだったのだ。

中学生の私にとって、税金の集め方や使い道というのは身近な話題とは言えない。しかし、身の回りに目を凝らすとあらゆる場面で「税金」が私達の暮らしを支えている事実が見えてきた。環境整備、教育の充実、公的サービスは税金なしでは成り立たない。しかし、少子高齢化が進む日本で例えば社会保障のコストは膨大になり、税金で賄いきれない現状を知り、私は危機感を覚えた。今こそ私達は税金について正しい知識を持ち、適切な納税をすることで社会に貢献しているという意識を持つ必要があると思う。

私の十三年間の人生は、税金によって生かされたと言ってもいいだろう。そしてこれからも社会保障の恩恵を享受するのならば、私は感謝を忘れず、修身の道を外れずに、今やるべきことに十分励みたい。そして成人したあかつきには、恩返しの気持ちを込めて納税したい。税金とは、よりよい未来へのパスポートだと私は考える。税金について学び、知識を少しづつ得ている今、納税という「支え、支えられる循環」の仕組みに自分も参画できる日が、待ち遠しく思えている。

『不測の事態を支える税金』

室蘭市立翔陽中学校２年　　鎌田　怜花

今年、新型コロナウイルスの流行に伴う行動制限がようやく解除された。思い返せば学校の臨時休校、店舗の営業自粛や医療のひっ迫など、私たちはもちろん、両親や祖父母の世代も経験したことが無いような事態が次々と起こり、感染者数も増減を繰り返し、いつ終わるかもわからない日々が続いた。

こうしたいわゆる「ウィズ・コロナ」の時代への対応として、私の両親も出勤抑制や在宅勤務の機会が増え、私たちの学校では一人一台のノート型パソコンの積極的な活用や自宅への持ち帰りが行われるようになり、そしてワクチン接種も始まるなど急速に社会の環境が変化していったわけだが、正直に言うと私は希望する国民全員がワクチン接種を受けられることについて、漠然と「そういうものなんだ。私も順番が来たら受けなければ。」程度の認識しかなかったのだ。

しかし、よく考えてみればワクチンそのものの費用はもちろん、ワクチンを低温状態で輸送や保管をして、接種会場を確保して、接種に当たる医師や看護師を確保して、接種記録を管理するなど多額の費用を要する事業を日本全国で展開し、しかもそれが一人につき何度も繰り返し接種が必要となったわけだから、その費用が莫大なものとなったのは当然であり、それを支える財源は私たちの税金であったわけだ。

コロナの対応はそれだけでは終わらず、営業自粛や外出抑制の影響で売り上げが低迷した企業等への緊急経済対策など、「アフター・コロナ」の経済の立て直しなど様々な施策により、早く以前のような生活に戻れるよう努力が続けられていることも、税について色々と調べる中で知ることが出来た。

不測の事態への対応は感染症の流行だけではなく、現在も続いている東日本大震災や私の曾祖母が住んでいた厚真町が大きな被害を受けた北海道胆振東部地震の復興作業なども同様に、税金のおかげで以前にも増して立派に復旧している様子も目の当たりにした。

私は、普段の私たちの生活に直結する、社会インフラや、教育、福祉などに継続的に充てられる税金はもちろん重要であるが、地震や感染症の流行といった不測の事態に迅速に対応していく税金の使われ方も重要であり、国民の税負担と国家の危機管理の在り方のバランスを深く議論して、不測の事態への対応について広く周知し、国民全員が認識を共有することが大切だと思う。

最後になるが、海外に目を向けると、ウクライナに対するロシアの軍事侵攻が続いており、そこでは防衛や攻撃のための兵器や施設の整備に膨大な費用がかかっていると思われ、それもその国の国民の税金が支えていると思う。不測の事態とはいえ、私たちがこうした惨禍に直面することなく、こうしたことに税金が使われる事態が将来にわたって起こらないことを心から願いたい。

税がつなぐ未来

須賀川市立西袋中学校２年　　小川　杏凛

「これが高齢者の世界なのか。」
私は強い衝撃を受けた。

今年度から参加しているジュニアボランティアの活動。夏休み中には、高齢者との交流及びサポートを行った。その活動の中で、「高齢者の世界」を体験する機会があった。レンズが曇ったゴーグル、大きなヘッドホン、重りが入ったベストを身に付けると、体に違和感を覚えた。濁った視界。かすかに聞こえる周りの音。動くことも難しい体の重さ。私はそこで初めて、高齢者の世界を目の当たりにした。

私の曽祖父は、今年で九十九歳になる。体はとても丈夫で、健康的な生活を送っているが、年齢に伴い、認知症が著しく進行している。家族の名前を思い出すことは難しく、食事をしたことも忘れてしまう。

記憶障害の悪化は、認知症の初期症状である。仕方がないことだとわかっていても、やはり少し心が痛んだ。

「今まで一生懸命に頑張ってきたから、もう頭を休めて、徐々に忘れてもいいんだよ。」と母が教えてくれた。今までたくさんの思い出を詰め込んだ分、忘れてしまうのは当たり前。曽祖父が忘れてしまった思い出は、私たちが覚えていればそれでよいのだ。そう考えると、私の心は軽くなった。

しかし、歳を重ねるにつれて認知症は進行し、曽祖父は週に一回のデイサービスを利用することにした。介護をしている祖母の負担が減り、曽祖父は多くの人たちとふれあうことで気分転換になっている。

また、一部のサービスには介護保険が適用され、医療費控除の対象になるそうだ。

私は曽祖父の介護を通じて、私たちの健康や生活を守るために欠かせない社会保障制度を知った。それは、医療、介護、年金、子育てなどにかかる費用の負担をみんなで分かち合い、支え合う制度だ。つまり、誰かが誰かを支え合う、お互い様の制度なのだ。

現在日本では、急速に少子高齢化が進んでおり、それに伴い社会保障費用は、急激に増加している。そのため、日本の社会保障は老人福祉を中心とする社会福祉、介護などに重点が移ってきた。時代によって、どこに相対的な重要度をおくかは必然だと思う。

しかし、いつの時代であっても、国民一人一人が正しく税金を納めることが必要不可欠であり、さまざまな場面で税の恩恵に助けられていることを忘れてはいけない。

曽祖父がつないでくれたこの命を、この社会を次は私がつなぐ番だ。そのために私は、将来を考え、自ら進んで行動できる大人になりたい。これからの未来も明るいと信じて。

人々の毎日をつくる

横手市立横手明峰中学校３年　　山下　心夢

新型コロナウイルス感染症の猛威は、ようやく徐々に、影を薄くしています。

身の回りの人たちが、日本中の人たちが、そして世界中たくさんの人たちが苦しめられました。感染してしまった方々やその家族の苦しみ。経済的に打撃を受け、生活が成り立たなくなってしまった方々の苦しみ。直接、間接を問わず、多くの被害者を出しました。私の学校生活も、それまで当たり前だったものが、次々と無くなっていきました。みんなマスクを付け、声も小さく、無表情でした。

「この状態はいつまで続くのだろう。いつまで我慢したらいいのだろう。」

いつもなら、聞けばすぐに答えてくれる周りの大人たちも、「分からない」としか答えてくれず、恐怖心がますます高まりました。

そんな苦しい日々の中で聞こえてきたのが「ワクチン」という言葉でした。

新型コロナワクチンがついに開発され、一筋の希望の光が差しました。しかも、国民全員が無料で受けられるそうです。全国にワクチン接種がどんどん広がっていきました。二回目、三回目と継続していきます。私はこのワクチンのおかげで、今の状況までの回復があるのだと思います。ワクチンに救われた人が、いったいどれほどいることでしょう。

私はそこでふと考えました。一億人以上が暮らすこの国で、なぜワクチンの無料接種ができるのだろう。それも定期的に何度も。

それは「税」のおかげでした。普段、税率が上がった時などの不平の声はよく聞こえてくるものの、税に感謝する言葉はあまり聞こえてきません。でも私は改めて、税の制度が機能しているありがたみを感じました。コロナウイルスに苦しめられて初めて、その恩恵の大きさ、ありがたさを実感しました、今回のコロナ禍で税の価値や意義を再認識した人は私だけではないはずです。もしワクチンが有料だったら、ここまで沈静化させることはできなかったのではないでしょうか。

コンビニで何かを買う度に払っている税金、働いてお金を稼いでも、所得税や住民税として給料から差し引かれる税金。日頃は厄介者にされがちな税金。でも、コロナ禍を機に、その大切さを自分事として理解しました。

また、私が住む秋田県横手市には福祉医療費制度があります。十八歳までの高校生、六十五歳以上の高齢身体障害者の方などが対象となっています。この制度のおかげで、対象者は保険適用医療費の自己負担分を支払わなくて済みます。我が家もこれまで、何度助けられたか分かりません。私が風邪を引くたび、ケガをするたび、お世話になってきました。

苦しい人、辛い人を助けるのが税です。自分が納める税金が、今も知らない誰かの命を、生活を助けてるかもしれません。失ったものの多いコロナ禍でした。しかし、今までは無機的な印象だった税が、私の中で「優しさに満ちた税」に変わった機会でもありました。

誰かを支える大人に

雫石町立雫石中学校３年　　横手　光華

もし税金がなくなったら道路は穴だらけ、ゴミも回収されず散乱し、警察や消防を呼ぶ時さえお金がかかります。学校に通うには多くのお金が必要で、通えない子供も出てきます。租税教室で見た動画の中の日本は、想像すると恐ろしく、今でも鮮明に思い出せます。

私は母子家庭で祖父母と暮らしています。母は会社員、祖父はシルバー人材センターの会員、祖母はパートをしています。私は「母子家庭なのになぜやりたいことが不自由なくできるのだろう。」と不思議に思っていました。私は租税教室の後、税に関係があるか母が話していたことを思い出しました。私の暮らす雫石町では社会保障が手厚く、母子家庭は高校生まで医療費が母子ともに無料、制服などの学用品、修学旅行でかかるお金も援助されます。限られた人にしか使われないけれど、全ての子供達が健康で、誰もが平等に同じ教育を受けられるように税金が使われていて、与えられている機会を大切に一生懸命学ぼうと思いました。また、私の祖父が会員として働いているシルバー人材センターは、「定年で仕事を辞めたけれどまだ働きたい。」、「ずっと一人なのは寂しい。」という高齢者が今までの経験や能力を生かして働くことができる事業団です。祖父は仕事がある日はいつもより早起きをし楽しそうに働きに行きます。また、新しく入ったチームの仲間について話しをして生き生きとしています。全国の市町村にあるシルバー人材センターは公益法人として国や都道府県から援助を受けていて、歳出されていることを知りました。私は、高齢者が働くことで生きがいを得て元気に生活できる人が増えることで高齢者施設の負担も減り、更に高齢者の力が地域社会の活性化につながる素晴らしい取り組みだと思ったし、少子高齢化が進む日本に必要な取り組みに税金が使われていることに、うれしくなりました。そして、私の世代の人達に、税金は日本の未来を支える取り組みにも使われていることを伝えたいと胸が熱くなりました。

私は税金について知っていくほど、人のつながりと誰かを支え、誰かに支えられていることの幸せを感じました。税金があるおかげで、町営の陸上競技場は作られ練習ができるし、学校で仲間と一緒に学ぶこともできます。また、母子家庭でも家族と一緒に過ごす時間があります。たくさんの人が関わって誰かを支え合っている税金の仕組みは、自分の幸せだけでなく他者に幸せを分けてあげる、人の思いやりで作られていると感じました。

私はあと十年もしないうちに働いて消費税だけでなく、所得税も納めるようになります。「税金のせいで生活が苦しくなる」という考え方ではなく、「自分も誰かを支え、社会の役に立っている」と誇りに思い、誰かに支えられている安心感から誰かを支えている責任を持った大人になりたいです。

税金がつなぐみんなの笑顔

つくば市立竹園東中学校９年　　八田　暁美

母は言った。「あなたは、たくさんの人達に助けられながら生きてきたのだ。」と。私は先天性難聴だ。静かに目を閉じて思い起こしてみると、これまでお世話になったたくさんの人達の笑顔が頭にうかんできた。生後数日の頃から診察でお世話になっている耳鼻科の先生、補聴器調整担当の言語聴覚士さん、聴覚支援学校の先生、そして小・中学校の支援学級の先生や支援員さん。しかし税について考えた今、私ははっとした。これまでに私を助けてきてくれたのはもっともっと多くの人達、それも名前も知らないまだ出会ったことのない人達も含まれるのだ、ということに。

私は生後一か月の頃から補聴器を使用しており、これまでに三回買い換えた。実はこの補聴器、眼鏡とは異なり、かなり高額でかつ汗や水に濡れると壊れてしまう精密機械だ。私にとって補聴器は、片時も離せない大事なパートナーであり、体の一部だと言っても過言ではない。私が小学生の頃に障害者手帳を持たない軽・中等度難聴児補聴器購入補助制度がつくば市でも開始され、母が安堵していたことを覚えている。想像してみた。もし補助制度がなかったら、たった十五年間で難聴という面だけに関してどれほどの費用がかかったのだろうか。病院での定期検査や手術、生後三か月から小学校入学まで通った支援学校、そして小・中学校の支援学級で受けた支援員さんによるパソコンテイクなどのサポート。税制度がなければ、とてもではないがすべてを満足になど受けられなかったと思う。税制度が根本にあり、その上で先生方がより添いながら力を注いでくださったおかげで、大きな不自由なく楽しく過ごすことができた。当たり前に感じていたこの日常は、実は税の恩恵によるものだったのだ。この支援があったからこそ、今私は税に対する感謝の気持ちを誰よりもかみしめられているのだと思う。

当たり前の幸せな日常は、税制度があるからこそのもの。これは、私に限った話ではない。この日本に生きる誰しもが「税」に助けられながら生きているのだ。誰かが納めた税が、誰かの生活を豊かにし、誰かの心の幸せにつながる。税を納めることで幸せの連鎖が生み出され、多くの人の笑顔につながるのだ。税制度は心の余裕を生み出してくれるもの。心に余裕が生まれることで人は笑顔になれる。それが、税制度の根源なのではないだろうか。

生まれながらにして難聴を抱えながら人生をスタートした。たまに、「大変だね。」と言われることがあるが、そのことに私は違和感を持つ。なぜならば、数多くの人に支えられ様々な経験をしてくることができ実は誰よりも豊かな人生を送ることができているのではないかと感じるからだ。税制度がもたらしてくれるこの環境に感謝し、今度はその感謝を更に大きなものにして、皆に返していけるような人間になりたい。まだ出会ったことのない、未来の誰かの笑顔につなげるために。

税金と幸福度

下野市立南河内小中学校９年　　野尻　恭佑

日本には、現在約五〇種類の税金があります。その中で、僕が一番意識するのは消費税です。値札に記載された税抜き価格を目にすると思わずため息が出てしまいます。国の財源である税金を国民が負担することは、頭では理解できても税金の無駄遣いのニュースを耳にする度、僕の感情が税に対するマイナスイメージを払拭できずにいました。

先日、僕は街づくりゲームを買いました。このゲームは、自分が市長になって街を築いていくもので、行政システムや社会現象が忠実に再現される本格的なゲームです。まず僕が目指したのは、生活環境が整った市民の幸福度が高い街です。しかし、僕が思い描いた理想の街づくりは上手くいかず、苦戦を強いられた結果、財政破綻を招きゲームオーバーになってしまいました。僕の街の一体何がいけなかったのだろうか。

僕は、最初に資金不足に陥った原因を考えました。街をつくるためには、インフラの建設だけでなく警察や消防、教育などの公共サービスも市民に提供しなければいけません。しかし、僕はぜい沢ができる生活の方が市民は幸せだろうと考え、税金を極力低く設定し、積極的な税金の徴収を行いませんでした。個人の豊かな生活に配慮したつもりが、結果的には資金不足から財政破綻を招きまさに本末転倒でした。そこで、僕はゲーム内の出来事が現実世界で起きたらどうなるか想像してみました。税金の徴収が無ければ、市民の一時的な喜びは得られるでしょう。しかし、財源が無ければ公共サービスは市民に提供できなくなります。警察のいない世界では犯罪が多発し、消防が機能しなければ火事は延焼してしまう。ごみを収集する人がいなければ街は不衛生になる一方だし、学校が無ければ僕たちの学びの場が失われてしまう。従って、公共サービスは僕たちの生活環境の維持や治安を守るためにも必要不可欠なのです。僕は、税率を上げてゲームに再チャレンジしました。すると、市民の負担は増えましたが財政は安定し、公共サービスも維持できるようになりました。税金は、一見すると不満対象になりやすいかもしれません。しかし、僕は目先の幸せより長期的な幸せを考えるべきだと思いました。そして、税金の流れや役割をみんなが正しく理解することが何よりも大切だと思いました。

二〇二三年世界幸福度ランキングの一位は、六年連続でフィンランドでした。一方、日本は四七位でした。標準消費税は、フィンランドが二四％で日本より高いにも関わらず、国民の幸福度が得られるのは、社会保障制度が充実しているからだと思います。また、国民が税金の役割を理解し、納得できているからだと思います。今後、日本も少子高齢化の未来に向けて社会保障制度の充実を図ることが必須です。僕は、税金をきちんと納め日本の未来を支えられる大人になりたいと思います。

小さな納税者

太田市立宝泉中学校３年　　阪口　絵麻

「税金」ってなんだか見えにくい？

先日、母と一緒に歯医者の定期検診へ行った。検診が終わって受付へ行くと「エマさんの分のお支払いはありません。」と。母は自分の分の支払いを済ませた。日本では医療費を税金で一部負担してくれているのだという。さらに私の住む太田市では十八歳までの子供の医療費を助成してくれている。つまり、十八歳までは病院を受診しても無料なのだ。

「小さい頃は病院に行く機会も多いし、無償で病院を受診できるってすごく大きいよね。大人だって一部負担してもらえるのありがたいし。」母が言う。実は最近まで私は自分の医療費が無償だということを知らなかった。それくらい当たり前のように私は産まれてからずっと税金の恩恵を受けていたのだ。

昔読んだ本に世界の通学路の様子を書いたものがあった。世界では学校に行くために河を渡ったり、険しい山道を登ったり、まさに道なき道を行く様が描かれていた。一方、私は舗装された道路を歩き、信号機に安全を守られて学校へ行く。学校には当たり前のように机や椅子があり、教科書をもらう。私はそれを「普通」として受け入れていた。けれど、この「普通」を作り出していたのは税金だったのだ。

税金ってなんだか見えにくい。いや、意識しないと見えない。けれど、その見えにくさこそが私達が平等に税金の恩恵を受け取っている証なのではないだろうか。誰も特別ではなく、皆が受け取る権利がある。だから意識して見た時、いかに自分達がたくさん税金に支えられていたかが分かるのだ。

では、その税金を支えているのは誰なんだろう？それは納税者だ。日本には約五十種類の税金があり、それを納めている人や会社がある。そして、私も小さな納税者だ。間接的ではあるけれど、消費税を払っている。私が支える税金は微々たるものだろう。日本は所得が多い人からたくさん税金を受け取るようにできているからだ。しかし、微々たる税金でも集まれば誰かの役に立つ。一人の力ではできないことを、たくさんの力を集めて可能にする。税金は「支え合い」なのだ。今はまだ私は子供で、直接税金を納めることはほぼない。いわば「支えられる側」だ。けれど、いつかは社会に出て働き出し、給料をもらうようになる。その時は「支える側」になる。日本の税金はこの支え合いのローテーションで回っているのだ。

今作っている橋や道路は未来へ残る。新しい病院や図書館も同じだ。今、受け取っているもの、未来へ繋ぐもの、形は違うけれど守っていくためには税金が必要だ。中学生の私達にできることは支え合いのローテーションのバトンをしっかりと受け取ることだ。

どうすれば幸せな社会になるのか

さいたま市立大砂土中学校３年　　土門　美琴

「投票よろしくお願いします」
中学三年の夏休み、猛暑のとある一日。選挙カーからこんなアナウンスが聞こえた。埼玉県知事、二期目を目指す現職に新人二人が挑む構図で選挙戦が繰り広げられていた。

昨年の「税についての作文」のおかげで、私は県知事をより身近に感じていた。そのためか、今年の県知事選はとても興味が湧いていた。

八月六日、私は今回の選挙も親と共に歩いて投票所に向かった。投票のとき、両親は私を必ず連れて行く。自宅から投票所に向かうまでの道で何度か選挙ポスターを見た。投票所は投票しに来た人できっといっぱいになっているだろうと思っていた。しかし、投票所は、はっきり言ってガラガラだった。その様子を見て、期日前投票に行った人が多かったのかな、と私は安易に考えていた。

八月七日、「県知事選挙の投票率二十三．七六パーセント、全国知事選投票率ワースト」というニュースが流れてきた。多額の税をかけて選挙をするのにと、私はそれを見た瞬間、驚くとともに少しの怒りを感じた。社会の授業で先人が選挙権獲得のために尽力したと学んだ。そして現在、選挙権を持つ年齢が引き下げられ、さらに多くの国民が選挙に行けるようになったのに。私だったら必ず投票する。

もし、私が当選した知事の立場だったら、残りの約七十六パーセントの人はどう思っているのか、不安で仕方が無い。知事の主な仕事は、予算案をまとめ、条例案を策定して議会に提出したり、スムーズに行政を行えるように地方税や地方交付金の用途を決めたりすることだ。自分の生活を豊かにする税の使い道を選ぶために、選挙権のある全員が投票することが大事だ。

コロナ禍で不安な毎日を過ごす中、公共のサービスのおかげで多くの人達が助けられた。

これからも、手厚い公共サービスを求める未来が予想できる。高齢化や少子化にともなう社会保障、自然災害から身を守るための公共事業など、税は様々な場面で使われる。そして、税の歳出は国内問題に限らず、海外の動向にも左右される。ウクライナとロシアの戦争が続く不安定な世界情勢の中、防衛費も多額になっている。

だからこそ、自分が投票し、税の使い方をどうするのか、他人事にせず自分事で行動できるようになりたい。たとえ出来レースに思える選挙でも、私が一票を投じることでその後の政治にも関心を持つことができると思う。政治と税は切り離せない。それならば、税のことを考えることで政治にも興味がもてるはずだから。

三年後、私は成人する。選挙権を持ち、アルバイトを始め納税者になる。私は税を通して「どうすれば幸せな社会になるのか」考え行動できる大人になりたい。未来は明るいはず。百歳の私が笑顔でいられるように。

社会のために使いたい力

川口市立戸塚中学校３年　　戎　来美子

私は父が日本人で母がフィリピン人のハーフだ。小学生の頃は二年に一度、家族と一緒にフィリピンに行っていた。いとこ達とプールで遊んだり、ご近所さん達も交えて誕生日を祝ったりと、たくさんの思い出が懐かしく感じる。当時の私はフィリピンの文化や生活、日本とは全く違う街中の空気が好きだった。

昔から母はよくフィリピンについて話してくれる。学校の話の中で「フィリピンの学校は、授業料は無料だけど、教科書は学校のを借りて使うんだよ。」と聞いた時は、とても衝撃的だったことを今でも覚えている。その瞬間に思い出したのは、母方のいとこ達が持っていたボロボロの教科書。母方のいとこはみんなフィリピンの学校に通っている。とても勉強熱心で、将来は医者や教師になって家族に恩返しをしたり、誰かを助けたい、と言っている姿がとても印象的だった。フィリピンの学校に通う生徒は、学校から教科書を借りるが、生徒数が多くて教科書の数が足りず、近くの席の子同士で教科書の周りに集まり、授業を受けるときもあるらしい。日本の小中学校では一人一人に教科書が無償で渡され、教科書を囲むことはほとんどない。いとこ達はどんな環境であっても、夢を叶えるために一生懸命勉強をしている。そんないとこ達を私は心の底から尊敬している。

近年の日本では、税金に対して不満を示す人が増えている。その中でも税金はなくなればいい、と言う人に私は問いたい。それでいいのだろうか、と。自分の納めた税金の細かい用途までを知らず、日本の充実したサービスを当たり前だと認知しているのであれば、少し視野を広げてほしい。義務教育を受ける今の小中学生のみならず、現代の日本社会で働く大人たちは、顔も知らない誰かの納めた税金によって義務教育を受けて育ち、様々な公的サービスのおかげで今の自分があるという事に有難みを感じるべきではないだろうか。また税制ができた歴史、社会的・政治的な背景を理解し、過去の人々が作り上げた現代の税制に対する印象や考えを改め、今後の税の在り方について考えるべきではないだろうか。

日本の舗装された道を歩く度に感じる事としては、税金は人々を平等にするため、支えるためにあるという事だ。日本に住んでいると、忘れてしまう事がたくさんある。私の当たり前は、他の誰かにとっては特別であるということを。

税金は社会だけでなく、一人の人間の生きる世界を変える一つの手段であり、これから先の教育や医療、福祉など様々な面での発展を助けるものになる。私は一人でも多くの人が税について考え、より良い日本の社会を築いてほしい。私は大人になったら、無償の教科書によって得た知識や、培われた思考力を日本のみならず、世界のために使いたいと思う。

税金が地球を救う

新潟大学附属長岡中学校３年　　後藤　苺瑚

「明日も猛暑日となる見込みです」

ニュースで毎日のように耳にするこの言葉。今年も７月中旬ごろから暑さの厳しい日が続いている。このような暑さの原因は、やはり地球温暖化なのだろう。人間のせいで地球の環境は変わり、地球は死にかけているのだ。地球を救うために、私たちは何をすることができるだろう。

二〇一五年十二月、フランスのパリで開催された国連気候変動枠組条約締約国会議で、温室効果ガス排出削減のための国際枠組みとしてパリ協定が採択された。それを受けて、日本は脱炭素社会を目指し、二〇五〇年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロにすることを目標として定めた。

そこで導入されたのが、環境税の一つである「地球温暖化対策のための税」だ。平成二十四年から施行されたこの税制は、石油・天然ガス・石炭などすべての化石燃料に対し、環境負荷（CO^2排出量）に応じて負担を求めるものだという。この税金によって、CO^2の排出削減や人々の温暖化対策への意識向上が期待できるほか、税収の省エネルギー対策や再生可能エネルギー普及などに活用することで、将来的により高いCO^2削減効果も見込まれるらしい。私達が納めた税金が、地球規模の環境問題の解決につながるのだ。

今までの私にとって税金は、私たち教育費や医療費など、生活に直結するところで使われる身近なものだった。しかし調べてみると、税金は私たち人間によって壊された地球の環境を取り戻すという、大きな役割をもっていることに気付いた。今、私たちがほんの少しの税金を払うことによって、未来の地球や、そこに生きる人々や生物の命を救うことができるのだ。

現代社会では、税金に対してマイナスのイメージを持つ人が多い。余計に払わされている、家計の負担になる…。なぜ税金を払わなければいけないのか、払った税金が何に使われるのか。それを理解することができれば、税金に対してマイナスの感情を抱く人も減るのではないだろうか。「地球温暖化対策のための税」が導入されたとき、「また税金が増えるのか」と不満に思った人も少なからずいただろう。それは、この税金が何のために導入されたのかを理解していないからこそ言えることなのだと、私は思う。

今、地球は壊れかけている。それは、人間の勝手な行動によって引き起こされた人災なのだ。責任は人間にある。ならば、私たち人間の手で止めなければならない。そのためにできることが、身近にあるのだから。

さあ、はじめの一歩を踏み出そう、未来の地球と、そこに生きるすべての命を守るために。

私を支えてくれた税金

信州大学教育学部附属長野中学校１年　　森岡　真由

二分の一成人式―――。小学四年の一月、両親への感謝の気持ちを伝える行事が学校でありました。その時私は原稿を書くために、自分が幼かった時のころについて母にインタビューをしました。

私は、生まれつき心臓の病気を患っていたそうです。生まれて間もなく、母はその事実を医者に告げられたとき、大変なショックを受け、奈落の底に落ちたような気持ちになったそうです。「心室中隔欠損症」という心臓の心室の真ん中を隔てる壁に穴が開いている病気です。私は０歳の時から経過観察のため、月に一回大きな病院に通っていました。また、「シナジス注射」という、基礎疾患があり感染に対する抵抗力の弱い一歳未満の子供が受ける注射も受けていました。普通の人なら、何かのウイルスに感染しても自分の力で治すことができるのですが、私のような免えき力の弱い人は、ちょっとした感染でも重症化し、命を落とす危険があったからです。

そしてさらに私の父は、仕事の関係で引っ越しをくり返していました。そのため、引っ越すたびに病院を転院することは不可能だったため、祖父母が住んでいた長野県の病院に通っていました。当時は大阪府に住んでいたので、大阪府から月に一回長野県まで通っていたそうです。長野県に行くたびに祖母は、夜行バスで迎えに来て、翌朝、私たちと一緒に病院へ行っていましたが、いつも寄りそってくれていました。そして、祖母だけでなく、祖父も必ず最寄りの駅まで車で迎えに来てくれていました。当時の私は、家族みんなに支えられていたと思います。

月一回の通院は、かなりの費用がかかっていたのですが、乳幼児医療費助成制度というものがあり、ずいぶん助かっていたことを母は教えてくれました。それは、乳幼児が医療機関で受診した医療費のうち、三割を税金から助成する制度です。そのため、精神的、身体的には大きな負担をかけていましたが、金銭的には、そこまで大きな負担をかけることなく、病気と向き合うことができました。税金は私の知らなかったところで家族と私を支えてくれていたのです。

幸いなことに、私は小学校へ入学する六歳のときに、開いていた穴が自然閉鎖し、完治することができました。今、中学生となった私もいずれは大人になり、社会貢献する日がやってきます。そして、それと同時に、様々な税金を払わなければならなくなります。ですが、その税金が幼かったころの私のような子供を助け、家族を笑顔にさせるのであれば、税金を払うことで誰かを支えているのだという気持ちになれると思います。税金によって助けられている人が、またその次の世代へと輪のようにつながっていけば、よりよい社会が実現できるのだと私は確信しています。

未来を繋ぐ

船橋市立行田中学校２年　　富田　梨花

私は、小学校六年生の頃から県の少年少女オーケストラに所属しています。ここに所属している団員は、全員十歳から二十歳までの千葉県内在住または、通学者の子供達だけで結成しています。このオーケストラは、「良い音で、良い演奏」をモットーにしており、団員は、自分の楽器を持っていなくても無償で良い楽器を借りて練習に参加できます。そして、プロの先生の指導の中とても広い会場で練習をするという素晴らしい環境の下で活動しています。

教えに来てくださるプロの先生の中には、たくさんの卒団生がいます。このように、県のオーケストラで育ち、プロになって私達を教えに戻ってきてくれている方がいるのです。さらに、世界で活躍して色々なところで素敵な音色を届けている方もいれば、私の小学校の頃の部活の顧問のように、教育の場で音楽を広めている卒団生もいます。

そんな県のオーケストラに入って、私が税金を深く知る機会が二つありました。一つ目は、練習中の音楽監督の言葉です。「あなたたちは、県の税金をたくさん使って活動しています。ですから、挨拶はもちろん身だしなみもしっかりしてください。」私はこの言葉で、練習会場費、楽器購入費、講師の先生、演奏会でお世話になる一流のソリストや、世界的に有名な指揮者の先生への謝礼などが全て税金で賄われていることに気がつきました。二つ目は、プロの指揮者の先生から受けた言葉です。「これが未来を担うオーケストラメンバーです。」この言葉は、誰が聞いても未来を背負っていく子達への活躍を願っている明るい言葉だと思います。しかし、私の胸の中には嬉しさだけではなく、不安を覚えました。なぜなら私は、たくさんの人からの税金に対し、恩返しをしたり、未来で活躍できるのでしょうか。

この二つの言葉から、今まで払う義務だと認識していた税金について考え直してみました。今学生の私は、税金を払うよりも、たくさんの人の税金で私の学びが支えられています。では、私は今後どのように恩返しをしたら良いのでしょうか。まず、税金で学ばせてもらった知識、経験を活かし、世界で活躍したり、多くの卒団生のように未来の子供達へ音楽の楽しさを伝えること。また、税金を支払い、未来の子供達の学びの場を作って行くことで日本を豊かにすること。この二つではないのでしょうか？

つまり、税金とは「未来の日本をつくるバトン」だと考えます。税金は、一人一人の夢や希望を叶える手段であり、叶った夢や希望はさらに、人や社会を育てます。一人の納税では変えることが難しい物も、国民一人ずつの納税を集めれば変えることができるでしょう。そこで私は、今学べることをたくさん吸収し、この社会の一員として税金というバトンを引き継いでいきます。

税で支え合う国民の絆

千葉市立新宿中学校３年　　近藤　央椛

去る六月二十四日は、私の両親の結婚記念日だった。いつもより華やかな夕食の席で、二人の馴れ初めなどを聞いていたら、母の口から衝撃の事実が飛び出した。

「そういえば結婚式の数日後に、私たちの働いてた会社の廃業を告げられたんだよ。結婚直後に二人とも無職なんてねえ。」

それを聞いて、私は耳を疑った。両親は元々同じ会社で働いていたが、収入がなくなってしまっては、生活がままならない。

会社からは退職金が支給されたそうだが、次の仕事を見つけるまでどうやって生活していたのか。

すると父が、「国から基本手当をもらっていて、首の皮一枚繋がったのだ。」と教えてくれた。「基本手当」という言葉自体は知っていたが、実際どのようなシステムで支給されるのか、その額や目的に興味を持ち、調べてみることにした。

「基本手当」は公的保険制度の一種で、失業した人が安定した生活を送りつつ、一日でも早く再就職するための支援として給付される。自ら退職した人よりも、会社の都合や出産・育児、心身の障害などの特定の理由で失業した人の方が手当を受給できる期間が長くなっている。またその期間は、当人の年齢や働いていた年数などにも応じて変化する。

私の父はその会社に長い間勤め、年齢も高かったので、次の職に就くまで手当を受け取ることができたのだ。そのおかげで今の自分がいる、といっても過言ではない。

日本には失業した時以外にも、働けなくなったり収入が得られなくなったりした時などにお金を受け取れる制度があるそうだ。例えば老後の年金や家族が亡くなった時の遺族年金など。この保障を国民に提供するには、私たち国民自身が払う税金が必要不可欠なのだ。

両親の経験をきっかけに社会保障と税金について調べてみて、漠然としていたこれらに対するイメージが大きく変わった。

私は買い物の度に十％の消費税に嫌な気持ちを抱いていた。しかし税金が私の家族のみならず日本にいる沢山の苦しい人々を支えていると知り、その“十％”の重要性を感じた。同じ国に住む人の「健康で文化的な最低限度の生活」を、皆の小さな積み立てで、守ることができるのだから。

税という使われ方が目に見えにくいものに価値を見い出せるかは、人それぞれだと私は思う。重なる出費の増加に頭を抱える人もいるし、「税なんてなければ楽なのに。」とため息をつく人もいるだろう。

その中で、社会の動向を自分事として捉え、それを権利によって政治に反映していくこと。これが今の日本に足りない“国民意識”ではないか。私はこれからの公民の学習で日本と税について学びつつ、国民として自分がどう生きていくべきか、模索していこうと思う。

酒と税と国民

豊島区立西巣鴨中学校３年　　冨塚　優里

ある日、塾からの帰り道、偶然鉢合わせた父と歩いていると、自家醸造ビールを提供している店の前を通りかかった。昼間から繁盛している店を横目で見ながら、父は私に突然こんな質問をした。

「酒を個人で勝手に作ってはいけないという法律があるのは知ってるな。酒を作るには特別な免許が必要なんだが、どこで取れると思う。」

「国民の健康に関係すると思うから、厚生労働省あたりかな。」

「実はね、国税庁なんだよ。酒には酒税がかかるだろう。酒税は国の大事な財源の一つだから。缶ビールの値段の半分弱は酒税なんだよね。」

俺はビールを飲むことで国に貢献しているんだ、と父は笑って話を締めた。父が普段飲んでいるビールにそんなに税金がかかっていたと思うと私はすっかり驚いてしまって笑えなかった。酒税とはどんな税金なのだろうか。

酒税とは、アルコール分が一％以上の飲料にかかる税金である。様々な種類の酒を製造方法や性質から分類し、それぞれ製造場から出した酒の量一㕝あたり一定の額の税を課している。いくつかの品目で製品一本あたりの小売価格とかかる酒税額から税込価格に占める酒税額の割合を算出してみた。ビール三八・四％、発泡酒二八・〇％、焼酎二九・八％か二四・〇％、リキュール二三・六％、日本酒、ワインなど醸造酒二三・六、ウイスキー一四・六％だ。いずれも消費税より高く、その中でもビールの酒税率が一際高いことが分かる。酒税が全体的に高額なのは何故か。また、何故ビールだけ際立って高いのか。

酒税が高額な理由は主に二つだ。一つは、昔から国の重要な財源だったからだ。酒税は鎌倉、室町時代に誕生、室町時代には最も重要な財源と位置づけられ、江戸時代になると追加で酒蔵に営業税がかけられるようになった。そして明治時代になると軍事費を増強すべく大幅に増税された。今でこそ緩和されているがその名残か比較的高額になっている。もう一つは、酒は嗜好品だからだ。生活必需品とは違い、生活する上で必ずしも必要になる品ではない。そのため、買って消費するならその分お金に余裕があると見なされ、割高に課税されている。このように高い担税力を持つものがより重い負担をすべきという考え方は垂直的公平の原則と言われ、税金負担の考え方の一つである。ビールへの課税額が高いのも、その考え方に理由がある。ビールは今でこそ安価な大衆向けの酒だが、かつては舶来からの高級酒だった。その名残だろう。

酒税のことを調べてみたら、そこには税の負担がなるべく皆に平等にかかるようにするための工夫があった。この調べ学習を通して、酒税という税金について深く学べたとともに、国民が豊かに暮らしていくための政府の働きを感じ取れたように思う。

驚きと発見を求めて

国立音楽大学附属中学校３年　　阿保　唯花

「ちょっとあなた、ここは喫煙禁止区域ですよ。」
いつものように学校へ向かう途中、穏やかなはずの町から騒がしい声が聞こえてきた。どうやら町の人達が喧嘩をしているらしい。喫煙禁止区域を表したマークを前に、清掃ボランティアの人の話を無視して時々反論しながら堂々とたばこを吸うおじさんを見て、少し気分が悪くなった。私は最近、保健でたばこの危険性についての授業を受けたばかりだった。たばこを吸う、という行為は思っていた以上に様々な健康被害に繋がることを知り、喫煙についてもっと色々な知識を身に付けたいと思っていた矢先の、町の小さな事件。でも、最近は昔より喫煙者が減ったように思える。なぜだろう。私は気になって調べてみる事にした。

調べてみると、様々な喫煙対策を政府が行っている事がわかった。受動喫煙の対策のため、屋内では喫煙室でないとたばこを吸う事ができなかったりする。また、たばこの広告や包装の表示に規制をかけていたりもする。なるほど。私は趣味で、父が若い頃にビデオテープに録画していたドラマを観たりするのだが、ドラマの間のＣＭには必ずと言って良いほどたばこの商品がある。それに、ドラマの中の登場人物がたばこを吸っているシーンもよく観る。最近のドラマにはほとんど喫煙シーンがないから、それも喫煙対策による社会の移り変わりが現れているのだなと思った。

色々調べているうちに、「たばこ税」という税金があることを知った。たばこを購入する事で発生した税金は、様々な用途で私達の生活に役立てられているようだ。じゃあ、もしたばこに税金がないと、たばこ一箱はどれくらいの値段になるのだろう？私は思わず気になってしまった。すると、たばこ一箱・二〇本入りが五八〇円の場合、その税額は、定価の約六一・七％占めていることがわかった。という事は、たばこに税金がなかったら、一箱二二〇円ほどで手に入る事になる。約二〇〇円でたばこを買う事ができる世界……私はなんだか恐ろしくなった。たばこ税は、ただの財源ではない。値段を上げる事でたばこの消費を抑制し、私達の健康を守るという役割があるのだ。

私にとっての税金のイメージは、集めたお金を使って社会に役立てる、というものだった。社会が良くなるために、値段が上がるのは嫌だけど仕方なく払う。私はそうやって欲しい物を買う時に、消費税を払っていた。しかし、たばこ税のように、値段が上がる事そのものが良い結果に繋がる場合がある事を知った。集めたお金を使うだけではなく、物の値段をコントロールする事で直接私達の生活を守る役割がある事を。今日もまた一つ、驚きと発見があった。私はもっとお金の仕組みが知りたくなってきた。また明日調べてみよう。驚きと発見を求めて。

感謝のバトン

中央区立日本橋中学校３年　　加藤　小侑

近所に住む祖母は、食べることが大好きでデパ地下でいつも美味しい物を買ってきてくれる。そんな祖母に異変があったのが、今年の一月だった。八十歳で持病もなく、元気な祖母の脚に青アザができていた。マッサージ機で内出血したのかな？と、近所の病院で診てもらった。ついでに血液検査もしてもらうことにした。その二日後、母の携帯に病院から電話があり、すぐに病院に来るように言われた。白血病の可能性が高いため、大きな病院で詳しく検査するように勧められた。

大病院で告げられた検査結果は「骨髄性白血病」だった。そこからの祖母の生活は一変した。先生からは、入院して抗がん剤治療を勧められたが、祖母は入院を断固拒否した。飼っている猫二匹と共に暮らし続けたいと。このまま治療をしなければ余命三週間、だが、抗がん剤治療をしたとしても、完治は難しいと言われた。そこで年齢も考慮し、入院を嫌がる祖母の意思を尊重した。訪問診療で、採血、輸血を、毎週してもらうことになった。あんなに元気だった祖母の闘病生活が始まってしまった。

毎週、採血、輸血の繰り返しだった。始めのうちは、祖母はそんなに変わらない様にも見えたが、血液の数値の変化と共に徐々に弱っていった。食欲も体力もなくなり、外出もしなくなっていった。ふくよかだった祖母の体はみるみる痩せこけていき、寝たきりの生活になってしまった。

在宅介護にはケアマネージャーさんという頼りになる存在がいる。介護ベッドを導入し、仕事をしながら介護をする母を気遣い、看護師さんとヘルパーさんで、朝から夕方までローテーションを組んで看てくれるようにもしてくれた。これだけの人の手を借りての介護、母は相当な金額の請求になることを覚悟していた。しかし、実際には思っていた金額ではなかったのだ。それは税金で医療も介護サービスも、大部分をカバーしてくれるからだ。「高額療養費制度」といい、国が医療費の一部を負担してくれる。母は安心してお願いすることができた。看護師さんとヘルパーさんとチームとして祖母の看護にあたった。それからの母は、一人きりではないと、精神的にもずいぶんと助けてもらったそうだ。

八月半ば、祖母は闘病の末、旅立って逝った。余命三週間と言われていた祖母だったが少しだけ長く一緒にいてくれた。今でも祖母がいないのが寂しくてたまらない。でも、この経験でたくさんの人にお世話になり、知らない世界を見せてもらった。税金が病気の人をこんなにも支えていることを知った。助けてくれた方々に感謝の気持ちでいっぱいだ。

私が大人になり、働いて税金を納める時、この感謝の気持ちを恩返ししたい。税金を納め、社会に貢献し、多くの人を支えられるようになりたい。

世界の広さを知ったから

学校法人向上学園自修館中等教育学校３年　　徳原　さらら

私は中学二年生の頃、縁あってカンボジアについて詳しくなる機会があった。その時に、生まれた境遇によって生き方を選べない子供が多くいることを教えてもらい、世界の広さを思い知らされた。時が経ち三年生になった頃、社会科の先生に、「世界で何が起こっていたのか、知らないまま大人になってはいけない」と教えていただいた。私はこのとき、ずっと分からなかった歴史を学ぶ意味を知り、同時に学ばなければならないと思うようになった。どこかの国について詳しくなろう、過去に何があったのか知り、歴史から今へ繋げなければならない。そう思い選んだ国が、かつて少し詳しくなったカンボジアだった。一九七〇年代に起こった、クメール・ルージュによる大量虐殺。カンボジアについて調べると、必ず出てくる重大な出来事だ。都市部の発展は目覚ましいカンボジアだが、内戦が続いたことが影響して、農村部では貧困に苦しみ、学校に行けず、まともな医療も受けられていない人もたくさんいる。

日本もカンボジアも、九年間の義務教育が憲法で課されており、公立学校は授業料は無償だ。しかし、日本の中学就学率はほぼ一〇〇％なのに対し、カンボジアは約十七％と極端に低い。さらに、日本では無償である教科書もカンボジアではそうではない。ぼろぼろになってしまったものを使い回すのだ。書きこみや落書きも、もちろんできない。なぜこんなにも日本は恵まれているのだろうか。それは、税金が少なからず影響しているだろう。学校だけではない。病気になっても高度な医療を受けられ、その後も莫大なお金がかからないのも税（社会保険）のおかげであり、日本の治安がいいのも税金のおかげだ。

最近、「税金の無駄」「税金泥棒」という言葉を耳にするようになった。政治家に向けた発言や、警察官などの公務員の人に向けて発された、心無い言葉の数々だ。本当に無駄になった税金も中にはあると思うが、私はこれらの言葉が嫌いだ。知ったふりをして、間違った正義を振りかざしているようにしか見えないからだ。私はそのような人間になりたくない。

私の将来の夢は医師だ。医療にも、税金が関わってくることがある。そして何より、色々な人と関わることができるため、また違う世界に出会えるだろう。違う世界を知れば、常識も変わる。今の常識、すなわち今の日常があるのは、日本の税金制度のおかげであると言える。このことを当たり前だと思ってはいけない。今はまだ子供で、消費税くらいしか払ったおぼえはないが、将来納税の義務をしっかりと果たし、私は立派な大人になる。そしていつか必ず、カンボジアを訪れたい。世界の広さを知ったから、今私ができる決意表明だ。

「効果的な税金」という考え方

神奈川県立相模原中等教育学校２年　　青木　祐弥

あなたは日常で、どのような税金を払っているだろうか。ものを買えば消費税、お金を稼げば所得税。何をするのにも税金がかかる。昔から税金について様々な議論が繰り広げられているが、私は「効果的な税金」という考え方を取り入れるべきだと考える。

私はクラスで、独自の通貨「Ｅ」を使った経済圏を去年から運営している。経済圏には最初、税金がなかった。教室に高速道路をつくるわけにもいかないからだ。しかし、消費を促進するために給付金を導入すると、問題が起きた。資金不足だ。それを解決するため、「お金を刷ればいい」という甘い考えのもとたくさんお金を刷った。するとＥの価値は下がり、柄のついた紙くずとなってしまった。社会は税金なしでは成り立たないのだ。

学んだ私は、いわゆる「成長と分配の好循環」を生み出すべく、富裕層に税金をかけ、定額給付金を導入しようとした。

経済圏ではそのころ賭け事が大流行。たった一度のじゃんけんで大富豪になるか大貧民になるかが決まってしまう、恐ろしい社会だった。そこで「貯蓄税」というものを導入した。保有現金資産に課税するのだ。これで所得税ではしづらい消費の促進を実現し、最高の税金ができた、と思った。しかし、賭け事への依存が加速し、貯蓄がある程度必要な企業の活動が停滞、経済圏はギャンブル国家となってしまった。

ここで私に「効果的な税金」という言葉が舞い降りてきた。企業の活動を活発にするために、事業で稼いだ分の貯蓄税を免除することにしたのだ。すると、狙い通り企業の活動が活発になり、賭け事に頼らない経済を作ることができた。経済は税金によって操作できるのだ。

しかし、事業に税金をかけなかったため、事業で成功した者に富がどんどん集まっていった。焦った私は、富裕層への税金を千％にするなどしたが、効果は出ず。ついに「三万統一令」を出してしまった。格差是正の大義名分のもと、資産が三万Ｅ以上の者の資産を三万Ｅに統一した。財政はウハウハ、富豪はシクシク。傾きかけていた経済は崩壊し、クラス一の富豪だったＳさんは激怒した。私はそこで始めて自らの過ちに気付いた。行き過ぎた税金は、停滞と混乱を招くのだ。

私は反省し、税金を経済の状態に合わせて作ることにした。伸ばしたい分野を減税、過熱しすぎた分野を増税するようにしたのだ。

では、今の日本との共通点は何だろうか。それは格差の拡大、消費の縮小、財政難である。これらを解決しようとして、無闇に増税すると「三万統一令」のようなことが起こる。

つまり、最強の税金などないのだ。場面に応じて必要な税金を制定し、経済をよい方向に動かさなければならない。それが「効果的な税金」の考え方だ。今こそ「効果的な税金」で持続可能な経済をつくっていこう。

見る

越前市立武生第二中学校２年　　川本　一翠

「小児弱視用治療用眼鏡等の療養費支給」漢文みたいだと言って笑った私に、母は、「救ってもらったんだよ。」といった。

対象年齢は、九歳未満で小児の弱視、斜視および先天白内障術後の屈折矯正の治療用として用いる眼鏡の作成費用が、健康保険の適用となる制度。私は、この制度で初めての眼鏡を作った。

一枚の写真がある。顔のほとんどが目でできているような眼鏡をかけて笑っている三歳の私。眼鏡をかけても〇．三ほどの視力だった私。その横には、「初めてのメガネの日。保育園の前で固まって動けなくなってしまった姿は本当に辛かった。」と添えてある。妊娠中の行動が何らかの影響を与えていたのではないか、なぜもっと早く気が付いてやれなかったのかと自分を責め続けた母は、その制度にとても救われたのだと言った。「あなただけではないですよ。一緒にがんばりましょう。」そう言われた気がしたのだと。大切そうに心から言った。この制度にも税金が使われていることを、パンフレットで読んだ。税金は、「とられる」というマイナスのイメージを大きく感じていた私は、改めて、「与えられる」という視点からとらえることができた。援助を必要とするところに、必要な金額が使われる仕組みが存在する。理想だと思った。一人ではどうにもできない人に一人ではないという「想い」を届けることができる。そう考えたら明るいイメージが浮かんだ。

この間、戦争地区の病院設立のクラウドファンディングに私の母が参加していた。自分の金銭を、自分が本当に助けたいと思うところに届ける。こんな使い方があるんだと初めて知って、そしてその制度が身近なこととして、私事として感じた出来事だった。そして、私の眼鏡のことにつながった。今この税制度が、国全体のクラウドファンディングだと思ったら、とても未来が明るく思えた。自分たちの納めた税金がより大切に、必要な場所に必要な人に、必要な時に届けられる制度として存在してほしい。納めるだけではなく、その使い方をしっかりと考え、無駄のない方法を選択する必要性を強く感じた。自分自身が理想とする社会にする必要性を強く感じた。

私は、中学生になり、新しい眼鏡を買ってもらった。その眼鏡は、私の視力をよりよくしてくれ、今までよりも違う視野を与えてくれた。よく見えるようになった私。一人だけでは今の自分はないことを改めて知った私。あと数年で、自分自身が政治にも参加する権利を持つことになる。税を納める義務を負うことになる。眼鏡だけでなく、新しい自分として、「これから」をしっかりと見ていきたいと強く思った。どこに支援を必要とする方がいるのか。税を自分が納めることとなる未来。学ぶことを忘れず、この制度が有益に使われるようしっかり見ていきたい、いや、見ていかねばならない。そう、強く思った。

「お父さん」と税金

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校３年　　中村　嶺治

「お父さんがいるってどんな気持ち？」

これは私が小学生の時に母にした質問である。私は「お父さん」という存在を小学校入学まで知らなかった。入学式の時に周りの友達には父親や母親がいるのにも関わらず、私には「お父さん」がいなかったので初めて不思議に思った。私の質問に対し母は

「お父さんがいたら、ほっとして温かい気持ちになるよ。」

と答えた。その時の私には、母の言っていることの意味がよく分からなかった。

私の父は、私が一歳、兄が四歳の時に心不全で急死した。当時、母は働いていなかったため、子供が二人いる状態で突然世帯収入が無くなった。また、その一年後、兄が病気を発症し、手術が必要になった。ひとり親家庭等医療助成制度という制度があったおかげで、収入がなかった当時でも兄は適切に手術を受けることが出来た。もし、この制度がなかったら、兄と一緒に生活をした思い出も存在しなかったかもしれない。ひとり親家庭等医療助成制度にて扱われる助成金の財源は主に税金である。税金は私たちの生活だけでなく、兄の命も助けてくれた。

母はよく、

「お父さんが働いている時にきちんと税金や年金を納めていてくれたから、今のあなた達は勉強や習い事をしたり、楽しく生活することができているのだよ。」

と言っている。真面目な父は税金や年金をきちんと納めてくれていた。父のように、責任を果たすことは未来の人達へ繋がるのだと感じた。今回、父と税金の関係について調べていくうちに、私たち家族は遺族年金という遺族のための年金を受け取っていることを知った。そして遺族年金は非課税の年金であることも知った。税金は基本的に国民全員が納めなければならないものであるが、このように困っている人に寄り添った制度もあるのだとわかった。

日本に住む人たちや、生前に父がきちんと税金や年金を納めてくれたからこそ、私たち家族は救われ、今の自分がいるのだと思う。私には父の記憶はないが、今回税金について色々と調べたことをきっかけに、父の存在を身近に感じた。小学生の時の私には父がいたらどんな気持ちになれるのか分からなかったが、「お父さん」がいたから安心して生活することができたという温かい気持ちを知ることができた。税金はひとり親世帯だけを支えているわけではなく、日本に住む全員の今と未来をも保証してくれている。だからこそ、税金を納めることは自分や他人の生活を支えるだけでなく、未来の生活までも保証される、とても大切なことであると感じた。私が今までに受けた恩恵の恩返しのためにも、今後も一生懸命勉強し、社会に出た時は生前の父のように納税し、社会全体を支えられる大人になりたい。

未来につなぐ「優しさ」

聖マリア女学院中学校３年　　渡邊　絵理香

八月六日は広島平和記念日だ。私の曽祖父は広島出身で、被爆者だ。戦後すぐ生まれた被爆二世の祖父は、幼少期のことを語らない。

私は、最近修学旅行で広島を訪れた。原爆資料館の見学があり、悲惨な現実を知った。目をそむけたくなるような写真がたくさんあった。それを生で経験したのが曽祖父だ。そして悲惨な広島で逞しく幼少期を過ごしたのが祖父だった。一生懸命勉強をして、働いてここまで日本を立て直してくれたのだと思う。

現在の税制度の大枠は、戦後まもなく創設された。日本国憲法に「教育・勤労」に並び、「納税の義務」が定められた。まさに現在の税制度と共に祖父の世代は歩んだ。

広島は美しかった。原爆が投下された直後は、「七十五年は草木も生えぬ」と言われたそうだ。しかし、その広島がこんなに美しく復興出来たのは、「広島平和記念都市建設法（昭和二十四年度制定）」に基づいて、国から多くの税金の補助があったからである。その税金は、曽祖父や祖父の世代の方が、汗水流して働いて納め続けたものだろう。

最近、大きな災害が多い。地震が起き、想定を超える津波も押し寄せた。また、この夏も異常気象や台風で甚大な被害が出た。

税金は、こういう時に大きな力を発揮するのだと思う。東日本大震災の後には「復興特別所得税」が創設され、復興を助けたと聞く。

一人一人の力は小さくとも、それが集まれば大きな力になる。人間一人では生きていけない。だからこそ、その支えあいが「税金制度」なのだ。税金は「優しさの塊」のようだ。

今、私は何不自由なく暮らしている。曽祖父や祖父と同様に、父も精一杯働いてくれているからだ。父は、役場の「税務課」に勤めている。「確定申告」の時期は一年で一番忙しい。昼間は申告の相談を受け、夕方から通常業務をする。必然的に忙しくなる。父は家族が安定した生活が出来るよう努力している。

父の通常業務は「固定資産税」についてだ。家や土地に関わる税金なので金額は大きい。そこで納められた税金が、他の人へつながる。税金は「優しさのリレーだ」と父は言う。

赤い原爆手帳と共に生きた曽祖父。日本を立て直すために必死に働いて納税をした祖父。広島は「優しさの塊」の税金で美しく復興した。また、税務課で働き「優しさのリレー」の一端を担っている父。この家族のお陰で、私は生きている。「我が家の歴史」は確かに、「税金という優しさ」と共にあった。

「この優しさを未来につなげたい」

次は、私の出番だ。現代は深刻な「少子高齢化社会」なので、しっかり働いて納税しないと日本は傾いてしまうかもしれない。より一層税金について関心を持ち、理解を深め、将来私が働いて納税することで、困った人を助けられるような大人になりたい。

八月六日。原爆のことを思う。そして平和で「優しい」日本の未来を、心から私は願う。

納得できる未来にむかって

静岡市立清水第七中学校２年　　菅原　佳奈

昨年の秋、私の住む地域に台風十五号が直撃し、今まで普通と思っていた生活が一変した。学区内では、二日間降り続いた雨の影響で多くの家が浸水し、学校も休校になった。豪雨被害は、私たちの生活に大きな影響を及ぼした。そして、ついに水道をひねっても水が出なくなった。それは河川が氾濫し、土砂や流木などが流入した影響で、取水口が壊れて街全体が断水したからだ。その日から飲水、トイレ、お風呂や洗濯ができなくなった。いつも水が出る生活が当たり前だと思っていた私は、水が使用できない不便さに毎日を過ごすことが本当に憂鬱になった。

その生活を救ってくれたのが税金だ。税金の使い道と言えば、私たちが受けている教育やごみの処分などの公共サービスといった身近に感じているところに使用される印象がある。しかし、今回のようないつ起きるかわからない災害にも税金は使用され、多くの人々を助けてくれることがわかった。まず、取水口にある障害物の撤去作業に市から依頼された民間業者や自衛隊が出動し、最短で復旧ができるよう作業をしてくださった。そして、復旧作業の状況を市のホームページで市民に案内することで、河川まで離れていても安心して状況を知ることができた。また、初めは少なかった給水所もすぐに市外や県外から給水車が応援にきてくださった。お年寄りでも行ける範囲に給水所が増設され、次第に人々から笑顔があふれた。私たちの街は、税金によるたくさんの支援があったおかげで十三日間という短い期間で断水の完全復旧までたどり着けたのである。この時、私たちは税金という制度のありがたさに、感謝の気持ちでいっぱいになった。みんなでとても喜んだ記憶を今でも鮮明に覚えている。

税金は、国の収入の六割にあたる大きな収入源のひとつだ。それは、たくさんの納税者によって、国民の安心安全な暮らしがあることに繋がっている。しかし、私たちはこれから少子高齢化が進み、国の税金収入が減少する時期が迫ってくることを自覚しなければならない。それは、人々の不安と直結する。

北欧のフィンランドは、税金の仕組みが日本と似ている。また、多くの国民が納税することに納得をして生活をしているので、日本よりはるかに税金が高くても国民の満足度は高い。なぜなら手厚い社会保障が国民に還元されているからだ。このように税金について国民が理解し、納得をすることがとても重要だと感じた。

未来の納税者になる私たちは、税金について関心を持って学び、知ることが必要だと考える。そして、時代の変化に対応した正しい税金の使い道に意思を持ち、納得ができる大人に成長していきたい。それが、笑顔あふれる未来の明るい日本につながるのだから。

曾祖母のお墓参りで誓うこと

学校法人滝学園滝中学校２年　　卯田　彩乃

お盆が近くなると、一昨年に亡くなったひいおばあちゃんのことを思い出す。ひいおじいちゃんが立ち上げた会社を、自分自身は「縁の下の力持ち」だったと言って、一緒になって働き、税金もたくさん払ったんだと、よく武勇伝のように語っていた。その時私はまだ小学生だったが、少し税については勉強したので、税の仕組みや、税を納めなければいけない理由もなんとなくは分かっているつもりだった。でも、お母さんと一緒に買い物に行くようになった頃、消費税 10%の税込表示の商品を購入する度に、なぜか税金を取られているような感覚を覚えていたのも事実だ。

母が仕事の時には一緒にお留守番もしてくれていた曾祖母だったが、四年前に急に倒れてしまう。救急車で運ばれてから約二年間はほぼ寝たきりの状態になり、自宅には帰ってこれず介護施設にお世話になることになった。私も都合がつけば母とお見舞いに行ったりしたが、家族が順番でも毎日お世話に行くのは難しく、常に誰かがいてくれる介護サービスの存在にありがたみを感じた。この時、曾祖母の入院費用はどうしているんだろうと気になった私に、祖父は

「税金がうまく使われているんだよ。」

と教えてくれた。調べてみると、税金の歳出のトップ項目は、私たちの健康や生活を守るための社会保障関係費だった。すると母が、

「おばあちゃんの今の生活は、税金で助けてもらっているってことだよね。働き者だったおばあちゃんの話はよく聞いていたけど、なんだか昔納めていた税金が、こうして自分に返ってきているみたいだね。」

と何気なく言った一言にはっとした。

国や都道府県・市町村は、私たちが豊かで安心した暮らしができるように、いろいろな公共サービスを行っている。そしてこれらの公共サービスを受けたりできるのは、税があってこそだ。税を自分もみんなも同じように負担するからこそ、意味がある。私にとって一番身近なのは消費税だが、税は取られるだけのものだと感じてしまっていた矛盾に気付き、とても恥ずかしくなった。税金を払うことは自分以外の人が安心して生きることにつながる。その昔、曾祖母が納めた税金はその時代の社会のために使われていたのだろう。そして、今、私の両親が納める税金は、今の社会のために使われている。曾祖母の介護サービスがきっかけで、頭では分かっていたはずの税の仕組みについて、改めて考え直すことができた。

今の私は、教科書が無償で支給されたり税によって支えられる側にいるが、社会人になったらしっかりと働き、税金を納め、日本の社会に貢献できる大人になりたいと願う。その時、私が納めた税金で、今度は私の祖父母の力になれるように。お盆の曾祖母の墓参りでは、心の中でそう報告したいと思う。

命を守るために

朝日町立朝日中学校３年　　下村　百花

私の住んでいる朝日町は、朝明川と員弁川に挟まれた所に位置する。そのため町外へ出かける時は、どちらかの川の橋を通っている。橋からの見慣れた景色の中で、いつからか大きな重機や何台ものトラックを目にするようになった。両方の川で、同じような工事をしている。「川の工事が多いけれど、何をしているのかな。」橋の上を運転中の父に聞いてみた。「川辺を削っているみたいだから、洪水対策しているんだね。」と教えてくれた。そして私は、数年前に豪雨で員弁川の支流が氾濫したとニュースでみたことを思い出した。その氾濫があった次の日に員弁川の橋を通ったのだが、川の水位がとても高くて、茶色く濁った水が勢いよく流れているのを見て、とても恐ろしかった記憶がある。いつもの穏やかな川の姿とは全くの別物だった。

家へ帰り、川の工事のことが気になったので「三重県」のＷＥＢサイトを調べ、「河川整備計画」を閲覧した。朝明川・員弁川を含む県内の二級河川は三重県が管理している。それぞれの河川の過去の被害状況、危険区域の特定、工事概要、生態系の保全等について書かれていた。やはり、私が見た工事は氾濫をできるだけ防ぐためのものだった。改めて状況を知って私はとても安心したし、生物の保全も考えられていることに驚いた。そして河川工事が私の住んでいる地域だけでなく県内全体に広がっていることに嬉しく思った。同時に、とても大規模な工事をいくつも行う費用は相当な額だろうとも思った。

中学校の社会の授業で、「ハロー・タックス」という資料をもらった。三重県の財政のページを開いた。歳出の内訳をみると、全体の約十％は土木費に充てられていた。土木費とは、道路・橋・河川や公園を整備するための費用と載っているため、ここに河川工事も含まれるのが分かる。そしてその財源はどこから来るのか。歳入の内訳をみると、県税、地方消費税清算金、国からの交付金が約八十％を占めていた。国や県へ納められた大切な税金を使って河川工事が行われていることが分かった。地域の人が安心して生活ができるため、命を守るために税金が使われていて、素晴らしいと思った。

線状降水帯や台風の影響による川の氾濫が、全国のどこかで毎年のようにおきていて、人命にかかわる大きな被害をもたらしている。家屋が倒壊したり農作物が収穫できなくなったりして、本当に悲しく被害に遭われた方のこと思うと胸が痛い。国民（県民）が今後このような被害を受けないように、命を守れるように、全国で河川の調査や工事を進める必要がある。そのため納税による資金の確保が必須だ。納税の大切さ、重要性を改めて考えることができた。私が納税する立場になった時、そのことを認識して納税の責任を果たしていきたい。

教科書のあの言葉

近江八幡市立八幡西中学校３年　　東山　愛

二〇〇八年、私が生まれたこの年の消費税は五％だった。五％、八％、十％、十五年間の間に二倍にも消費税が上がったということである。十五％になる日も近いのではないか、そんなことを考えて、私は悲しい気持ちになる。両親が所得税や固定資産税を払っているのはもちろん知っている。だが、それらの税は私とは関係がないように感じていた。そんな中、消費税だけは小さい頃からずっと払ってきたし、身近な存在だった。お小遣いをたくさんもらえるわけではない。そんな大切なお金を消費税のために払わなくてはいけない。しかも、その消費税がどんどん上がっていく。ルールで決まっているから払う、仕方ないから払う。消費税に対して私はそんなマイナスなイメージを持っていた。

二〇二一年の衆議院議員選挙の時、たくさんの政党が消費税を減税するという公約を出していた。コロナ禍で経済停滞が続いていたこともあり、消費税が下がることはとてもいいことなのではないかと考えていた。だが、結局消費税を下げるという公約を出していなかった自民党が多くの議席を獲得し、消費税は変わらなかった。みんなは消費税が下がってほしいと思っていないのか不思議に思ったので、お母さんに尋ねると、

「税金は悪いことばかりじゃないんだよ。」

と言われた。疑問に思った私は、私たちが納めた税は何に使われているのか調べてみた。一番多いのは社会保障費で、二番目は国債費、三番目は地方交付税交付金だった。そして、私が注目したのは、文教及び科学振興という欄だ。全体でいうと六番目、割合的には歳出総額の約五％、決して多いわけではない、しかし確かにそこに刻まれていた。一人の中学生あたりの公費負担教育費は約百十二万二千円だそうだ。いわば大人の人には関係ないお金だ。しかし、たくさんの人が私たちのためにお金を払ってくれている、そのことを痛感した。税があるからこそ私は学校に通い、勉強することができている。税のありがたさを実感した。私が払うのは消費税だけで、決して多いわけではない。しかし、私が払うその消費税もきっと誰かの役に立っているのだろう。「税は悪いことばかりじゃない。」その言葉の意味が理解できた。

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」私の教科書に書かれているこの言葉の意味が今ではしっかりとわかる。

「勉強がんばってね。」

そんなたくさんの人からのメッセージを心に刻み、日々勉学に励んでいきたい。いつか自分もたくさんの税を払えるようになり、その税によって多くの人の笑顔がつくれるように。税は、助け合いのバトンなのだ。

幸せのバトン

八幡市立男山東中学校３年　　増永　瑠奈

生後六か月、その症状が出た。アナフィラキシーショックだ。私は初めて救急車に乗った。離乳食でうどんを一口食べた後、私の顔は腫れ、呼吸が乱れて全身に蕁麻疹が出た。食物アレルギーは本来、体に害がない食べ物を異物と勘違いし免疫反応が過敏に働く現象だ。その結果、蕁麻疹、咳、呼吸の乱れ、血圧低下、重度の場合は命の危険になる。私は小麦に異常反応し、小麦以外にも卵、大豆、りんご、ナッツ等多くのアレルギーがあった。一体何が食べれるのか、母は悩んだと言う。三歳から食物経口免疫療法を始めた。これは摂取しても安全な量を継続して摂取し、体をその食べ物に慣れさせて徐々に食べれる様にする方法だ。卵から始めたが、卵を食べれる様になるまで二年もかかった。

これだけの治療を受けても治療費は一ヶ月二百円と母に聞き驚いた。中学三年生までは市が負担してくれるから二百円で良い。母はこの子育て支援医療費制度がないと高額になり治療は続けられないだろうと言った。私は医療費制度の有難さを実感した。この子育て支援医療費制度が気になり市役所に問い合わせた。財政課の方が令和四年の子育て支援医療費に二億二百七十八万円かかっていると教えてくれた。驚いた。更に資料を見ると医療費や救急車だけではなく、当たり前に使っている学校の机や教科書、図書館の本、道路や公園や下水道の維持費等、私達の生活を税金が支えていた。最近、家の前の公園の遊具が新しくなった。もちろんこれも税金が使われていた。更に学校の廊下も綺麗になった。これにはなんと、七百万円もかかっていた。新しい廊下は綺麗で嬉しくなる。誰かの納めた税金のおかげで快適な学校生活が送れていると知り、心を込めて掃除し大切に使おうと思った。税金は知らず知らずのうちに私達の生活を支えている。税金が無いと今の生活は送れないだろう。今の私に出来る事は少ないが税金への関心、意識を変える事は出来る。

私はまだアレルギーの治療中だ。治療のおかげで食べれる物が増えた。みんなのお弁当に入ってる憧れの卵焼きは美味しかった。一口だが食べれる様になった小麦のパンはふわふわで米粉のパンとは比べ物にならない。世の中には美味しい物が沢山あると感動した。みんなと一緒に食べたかった給食は小学三年生で除去食だが食べ始めて嬉しかった。こんな感動を味わえたのも治療が出来たおかげで、その治療は医療費、税金のおかげだ。誰かが納めた税金で私は助けられている。人は一人では生きられない。みんなで助け合って生きている。今まで税金のイメージはあまり良いものではなかった。しかし直接助けられなくても税を通じて誰かを助ける事が出来る。税金は人と人を繋げ、時には命を救う大切なものだ。だからみんなの大切な税金は正しく使って欲しいし、私もいつか誰かを助ける為にしっかり税金を納められる大人になりたい。

助けられた証

大阪市立新豊崎中学校３年　　澤田　紗那

十五年前の朝、出産予定日よりも二日早く、私は自宅のリビングで産まれた。

母が自宅出産を希望していたわけではない。実は、病院に間に合わず、私が母のお腹の中から出てきてしまったのだ。私の母子手帳には「自宅にて出産、救急車にて入院」と書かれている。そして、産まれた時間は正確に分からないため、父が１１９番に携帯電話でかけ、履歴に残った「午前九時八分」になっている。それは私が生まれ、社会の一員となり、初めて税によって助けられた証でもある。

父が出勤するときに、陣痛が始まった母は、不安に思いながらも、父を送り出した。病院に電話をし、状態を説明すると、ゆっくり来るように言われた。しかし、その電話を切った後、母は突然動けなくなった。救急車を呼ぶことを躊躇した母は、とりあえず父に電話をした。父は急いで戻り、車で病院に行こうとしたが、もう頭が出てきていて、母は諦めて、その場で私を産んだ。私がすぐに泣かず、やっと泣いても小さい声で、とても心配したそうだ。父は私を受け止めて、１１９番にかけた。「赤ちゃんが家で産まれてしまいました！」数分で救急車が到着し、救急隊員の人はへその緒を切った。私は救急隊員の人に抱かれて、母は担架で運ばれ、救急車に乗って病院に入院した。私は低体温症になっただけで、大事には至らなかった。もし、母がもっと早く救急車を呼んでいれば、救急車の中で無事に産まれていたかもしれない。反対に、救急車がすぐに来られない状況にあったら、私の命にも関わっていたかもしれない。

日本で救急車が無料なのは行政サービスの一環で、その費用は税金で賄われている。ちなみに救急車は一回の出動で約四万五千円かかる。外国からの旅行者でも誰でも無料で利用できる。救急車が無料の国は珍しく、海外では有料の国がほとんどである。日本は大変恵まれていると思う。それにより年々救急車の出動件数が増え、救急車が到着するまでの時間が長くなっていることが、今問題になっている。皆が適正に利用するだけで一千億円以上の税金の節約になるらしい。本当に必要な人が使えるように、もっと利用者の一人一人が問題意識を持つべきだと思う。

この税の仕組みがあるからこそ、私たちの生活が成り立っている。これから先の未来、誰もが公平に暮らせる社会を維持していくためにも、正しく税を使う必要がある。少子高齢化など日本の抱える課題も多く、将来を担う私たちの世代が、税のあり方を真剣に考え、対策していかなければならない。

私は将来弁護士になり、目の前の人々の役に立ちたい。そして、納税することで見えない誰かを支えたい。憲法で定められているように、納税は国民の義務である。租税負担にばかりに目がいくが、受益を守るためにも、改めて税金の使い道に関心を持ち、今一度その大切さを認識する必要があると私は思う。

税を納める未来

堺市立南八下中学校３年　　岡本　ゆずか

もう一度ここに来たいな。宮島はそう思わせてくれる場所だった。

今年、Ｇ７広島サミットが行われたあと、六月初旬に私たちは修学旅行でその広島を訪れた。Ｇ７が行われたあとだったためか、それともコロナが五類移行になったためか、観光客は私たち修学旅行生以外にもたくさんいて、コロナ禍の影響はもうないように思われた。当日は原爆ドームの他、日本三景で世界遺産の宮島も訪問した。厳島神社大鳥居の改修工事が七十年ぶりに行われ、綺麗になった大鳥居を眺めることができた。そのときは「世界遺産の維持も大変だな。観光客も増えて、費用もかかるだろうし。」とぼんやり思っていたが、調べてみると、宮島訪問税という新たな税が徴収されることになると知った。

宮島訪問税は、船舶により宮島町の区域への訪問をする訪問者（住民や通勤・通学者、修学旅行生などを除く。）が訪問するごとに一人一回百円を支払うというものだ。宮島へ多くの観光客等の来訪によって発生し、又は増幅する行政需要に対応するため、原因者である訪問者にその費用の一部について負担を求めるという「原因者課税」の考え方に基づいた法定外普通税というらしい。行政サービスの量や種類を増大させている特定の人々がいるのだから、原因者の人々に、その経費増の一部を税として負担してもらうというのは、非常に分かりやすいと思った。特に宮島は過疎化が進み、観光客が島民の三千倍近くとなっていることからも、その原因が観光客であることは想像しやすい。今回宮島を訪れ、島の文化や自然に触れて、この美しい原風景を未来へ残さなければいけないと強く思った。そのためには、マナーを守り、ゴミは持ち帰るなど責任ある行動を取るとともに、このような税の負担もしなければならないと思う。

長く続いたコロナ禍が節目を迎え、かつてのにぎわいが戻ってきている。観光地に人が集まり過ぎて渋滞が起きたり、街にゴミが散乱するなどマナー違反が相次いだりと、観光が地域の生活に負の影響を及ぼすオーバーツーリズムの現象をテレビなどでもよく見るようになった。私が訪れた宮島だけでなく、京都や富士山などの人気観光地ではどこもこのような問題を抱えている。過疎化の問題も深刻だ。これからは、同じような税が他の観光地でも増えていくだろう。美しい観光地を未来への財産として引き継ぐために、納税は私たちができる方法の一つだと思う。もう一度宮島を訪れたら、持続可能な観光地域へ参画するために、宮島の未来を思いながら宮島訪問税を払おうと思う。

未来への投資である税

加西市立泉中学校３年　　小篠　誌織

数年前から消費税が十パーセントに引き上げられた。昔は消費税も無かったと聞く。私はなぜ消費税がつくのか不思議に思いながら物を買っていた。

「森林環境税、二〇二四年導入」。ある日、何気なくニュースを眺めていると、そんな記事が目に入った。私は、また増税か、と思いながら記事を読んだ。森林環境税は一人年間千円の納税で、それらは全て森林保護などに使われるようだ。

私が住むのは山間の集落だ。昔は林業が盛んで、私の祖父も林業をしていたそうだ。しかし今では林業をする人は居らず、残った山も個人で管理するのは難しく、山を売る人もいる。そうして売られた山では木々が切り倒され、太陽光パネルが置かれていたりするのを見た。森林が減って地球温暖化が進んでいるとも聞いた。

私には森林環境税はとてもいい話に思えた。森林環境税によって、林業従事者も増え、同時に環境が守られて地球温暖化対策にも繋がる。しかし調べていくと、批判的な意見も多いことが分かった。私がこの税に賛成できたのは、身近に山があり、身近に森林にある問題を感じることができるからだ。この税を納めることでどのような利益がもたらされるのかが安易に理解できた。一方で、山が身近にない人からすれば、森林にある問題も理解しにくく、その上この税は直接的な利益があるわけでもない。結果、意味のない税という解釈となり、反対されるのではないだろうか。

自分の身近にない税だと、直接的な利益があるわけでもなく、その税がどのように使われているのかも分からず、税を納めることにも気が進まない。そうならないためにも、どのような問題があって、それを解決させるために税がどのように使われているのかを知り、税を身近に感じる必要がある。そうすることで、自然と税に対しても貢献的になってくるものだと思う。直接的な利益がなくとも必ず社会のどこかで使われて、自分を含めた社会全体の利益となる。

私は森林環境税を知ったのをきっかけに税の身近さを感じ、自分が納める税である消費税などの使われ方を調べ、税の必要性などを理解できた。私も成人すれば、多くの税を自分自身で納めることになる。そのときも、一つ一つの税がそれぞれどのように使われているのかを知って税を身近に感じることで、税の良さと大切さをより深く感じることができるのだと思う。

税の負担は大きいもの。しかし、今の社会を維持し、豊かにしていくためには無くてはならないものだ。森林環境税など、すぐに私達に還元されないものもある。しかし、未来の私達や子孫が豊かな生活を送るために必要なものだ。税金は私達の生活を豊かにする。同時に、その豊かさを繋げ発展させるための未来への投資でもあるのだ。

ふるさと納税制度はこのままでよいのか

学校法人神戸女学院神戸女学院中学部３年　　内田　絢那

先日、私の家にふるさと納税の返礼品として、家族みんなが大好きなたくさんのお米が届きました。初めてふるさと納税制度の仕組みについて知った時、自分達の希望する地域を支援することが出来る上に、税金が控除され、更に地域の名産品等のお礼の品を頂けるふるさと納税は、なんて魅力的な制度なのだと思いました。しかし、そんなふるさと納税制度も様々な物議を醸していると聞き、どのような点が問題なのか、そしてどのような対策をとっていくべきなのかを調べ、考えてみました。

そもそも、ふるさと納税制度とは本来、過疎等の影響により、税収が減少している地域と都市部との地域間格差が生じるのを防ぐ為に作られた制度であり、他にも納税者が寄附先を選択出来るからこそ税金の使われ方を考えるきっかけとなる、お世話になった地域や故郷の力になることが出来る、色んな地域の取組を知り、改めて地域のあり方を考えるきっかけとなる、といった大きな意義を持っています。ですが、現在のふるさと納税制度は果たしてこれらの趣旨に沿うことが出来ていると言えるのでしょうか。冒頭で述べたように私は、ふるさと納税制度について魅力的だなと思ったのと同時に、お得な制度だなとも思いました。何故なら、少なくとも私は、将来納税者になったら、返礼品目当てで寄附してしまうなと思ったからです。実際に返礼品目当てで寄附している納税者は多いそうです。そのような状態になると生じてしまうのが、地域間による返礼品競争です。地域を支援するという本来趣旨が希薄となっているほか、一部地域に寄附が集中してしまい、他の地域では税収の減少に苦しんでいるという事態にまでなってしまっているそうです。ふるさと納税制度により、税収の地域間格差をなくしていくはずが、むしろ格差を拡大させてしまっているところもあるのです。

実際に、これらの問題点に対する様々な対策の一つとして、返礼品をなしにしている地域が徐々に増えてきているそうです。返礼品をなしにすることで、見返りを求めずに支援することが出来るという点で、本来のふるさと納税の趣旨に沿っていてとてもよい対策だなと思いました。

ただ、返礼品のことを意識してしまっている人が、納税者のほとんどであるというのが現状です。返礼品の価値や内容を重視して寄附先を選び、様々な取組について考えずに、寄附するという行動が問題点に大きく影響しているのではないかと個人的に思います。

返礼品の価値や内容だけでなく、自治体の取組等に対しても理解を深め、重視しながら寄附先を選んだり、寄附先の地域を支援するという心持ちを持ったりすることが大事だと思います。将来自分が納税者になった時、これらのことを心掛け、ふるさと納税制度を利用出来たらいいなと思います。

命を守る医療と税

学校法人智辯学園智辯学園奈良カレッジ中学部３年　　辻本　大晟

僕は一歳の頃に一型糖尿病になった。一型糖尿病は一般的によく知られている二型糖尿病と違い、僕の様に小児の頃に発症する事が多く日本の小児では十万人に一人か二人の発症率と言われている。二型糖尿病と違い生活習慣が糖尿病発症には無関係な為、原因も不明な事が多く、膵臓からインスリンを分泌する事が十分にできない為、僕の場合は一歳で発症した時から食事の度に、ポンプまたはインスリン注射をしている。生涯にわたってインスリンを補充しなければならないので、生きていく限りは医療費負担がかかり、日本ＩＤＤＭネットワークの試算では約六十年間に支払う医療費は一千万円以上になるとされている。僕の両親はまだ赤ちゃんである一歳の僕が一型糖尿病になって今の医学ではまだ治らないと知った時、とても受け入れ難く、精神的には辛かったが、小児慢性特定疾患医療費助成制度のおかげで、金銭的には困らず安心して医療が受けられた事に感謝していると言っていた。税の支出で総額トップの社会保障である公的サービスの医療は僕の命を守ってくれている。

この夏に学校から、東京大学のキャンパスと研究室を見学させていただく機会に恵まれた。先輩方を見て、僕も将来は日本に貢献する研究をしたいと強く思った。僕が見学させてもらった大学の研究費や設備費も国の税の支出で、文教及び科学振興費として教育や科学技術の発展の為に税が活かされている。

僕はｉＰＳ細胞の研究者である山中伸弥氏を尊敬している。二〇一二年にノーベル医学生理学賞を受賞し、再生医療の研究をされている。僕は今はまだ治らない病気なら自分の力で治したいという気持ちがあり、この再生医療の研究にはとても興味がある。再生医療や幹細胞治療では患者自身の細胞の修復力を使って行う治療の為、副作用が少なく手術の必要もない。身体の負担は少なく高い効果が期待できるのだ。近い将来、この再生医療の研究で糖尿病が根治する日が来たらどうだろうか。毎日の食事の度のインスリン注射から解放され、低血糖や高血糖に悩まされず、大人になっても合併症に怯える事もない。僕と同じ気持ちの糖尿病患者だけでなく、脳梗塞、心筋梗塞、認知症、パーキンソン病など、世の中にあるたくさんの血管系疾患や神経系疾患の根治が期待できるのだ。その研究資金にも税は活かされている。

僕は一歳で一型糖尿病になったけれど、その事で人の病気の痛みもわかるようになった。病気で苦しむ人の助けや、希望につながる税の大切さも知った。国の税からこれまでの医学研究や医療保障によって僕は生かされている。今度は僕が医療や国に貢献できる研究や仕事をしたい。そして納税をすることで次の誰かの命を守ることにつながっていけたらいいと思う。

税金でつなぐ命のリレー

有田川町立吉備中学校３年　　梅谷　彩花

二〇二三年七月現在、日本全国四十七都道府県に、ドクターヘリは五十六機配備されています。私が住んでいる和歌山県でも二〇〇三年一月から、和歌山県立医学科大学院を基地として運用が開始されています。今回私が税の作文を書くきっかけをくれたのは、弟の存在でした。私の自宅の窓からは、ドクターヘリのヘリポートがよく見えます。弟は、そのヘリポートに到着するドクターヘリが大好きで、毎回身をのり出して到着から離陸までを見守っています。そんな時、弟から「ドクターヘリはどこから来るの？」と聞かれました。その質問に答えるために調べた内容は、驚きと発見だらけでした。

ドクターヘリは、「ドクターヘリ特別措置法」という法律に基づいて、運用されています。それにかかる管理・運航費用は、年間約二億五千万円と言われ、この費用は、国やドクターヘリを導入する都道府県が負担しています。つまり、ドクターヘリの配置から運航・管理費用において、私たち国民が納めた税金を使用し運用されているという事です。そう考えると、自分も誰かの命を助ける手助けが出来ているようで嬉しく感じました。

ドクターヘリの一回の往復には、大体約五十～百万円の費用がかかります。日本の場合その費用は、救急車同様に患者への費用負担はありません。それに比べ海外では、ドクターヘリ一回の利用で五百万円以上を請求された例も聞いたことがあります。ドクターヘリの年間出動回数は二千件以上と言われています。年間に二千人もの人がドクターヘリを利用しているということです。ドクターヘリは救急車に比べて、大幅に治療時間を短縮することができ、今まで助けることが出来なかった多くの人の命を助けることができます。そんなドクターヘリの運航に、自分達も納税という形で協力することができる。それは、命をつなぐリレーの一員として認めてもらえているようで、とても自分自身を誇らしく感じます。今まで税に対して疑問やマイナスのイメージしかなかった自分の考えに意味を持たせてくれたように感じました。だから私は、弟の問いかけに対して「ドクターヘリは山の向こうの病院からやってくるけど、そのヘリコプターをとばしているのはみんなの力なんだよ」と教えてあげたいです。

税金は、全国民が色々な形で納めています。自分達が通っている学校の机や教科書も、税金の一部が使用されています。私たちの毎日は、みんなが納めてくれる税金の上に成り立っていること、その税金によって支えられていることを忘れてはいけません。そして、私も将来、自分の支払った税金が誰かの役に立つことを誇りに思える立派な納税者になりたいです。

「おいしいね」が響きあう

鳥取大学附属中学校３年　　川内　凜々

今年の夏休み、子ども食堂へ行ってきた。学校の授業で習ったＳＤＧｓの取り組みに参加しようと考えたからだ。子ども食堂は、ＳＤＧｓの「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」「すべての人に健康と福祉を」を推進する取り組みにあたる。

市のホームページを見ると、すぐに子ども食堂の一覧が出てきた。へえ、こんなにあるんだ。その中で、対象が「赤ちゃんから高齢者まで」と書かれている食堂へ行くことにした。多くの人が集まる子ども食堂ってどんなところだろう。

食堂は昼に開かれているので、夏休みを利用し行ってみた。確かに、赤ちゃんからお母さん、地域の人まで大勢集まっている。大人は四百円だが、高校生までなら無料で食べられる。中学生の私は無料。いただきます！カレーにサラダ。デザートまでついている。

でも、どのようにして成り立っているのだろう。気になって子ども食堂を調べると、助成金制度を利用し運営されていた。助成金とは、国や地方公共団体が事業者などに支給する原則返済不要の支援金のこと。申請をして条件に当てはまれば支給されるそうだ。

今や日本の子どもの七人に一人が貧困状態といわれる。子ども食堂を支える助成金は、まさに命の源。物価高騰などによる家計の圧迫で子どもを取り巻く環境が厳しさを増す中、子ども食堂の存続は必須だ。

授業で習った。みんなの暮らしを支えるために税金が使われていると。助成金もその一つ。みんなの善意が、この食堂に詰まっている。誰一人取り残さない。ＳＤＧｓの理念。そして一人ひとりの笑顔のために。

子育ての話で盛り上がるお母さん、お父さんの横で、多くの人に見守られ笑う赤ちゃん。その光景をにこやかに見つめるご年配の方々。「おいしいね」のハーモニーが部屋全体に響き渡っていた。

子ども食堂のスタッフさんへ「ごちそうさまでした！」お礼を言うと、「きれいに食べてくれてありがとう」やさしい笑顔の女性が答えてくれた。「私も子どものころ、辛い時期があったから。悲しい思いをする人がいない地域にしたいと願って」その笑顔もまた、食堂全体を包み込んでいた。

税金の使い道が、こんなにも温もりであふれていたなんて。税金を納めることが誇らしかった。みんなの税金が、知らない誰かを助けている。税金を納めてくれる方へ感謝の気持ちがわいてきた。

子ども食堂へ行ってみたら、そこは思いやりの気持ちで満たされていた。助成金で多くの人が救われる。尊い税金の使われ方だ。

みんなに豊かな食卓を。多くの人に温かい食事が届きますように。

今日も子ども食堂には、「おいしいね」が響きあう。

『税』の意義

福山市立鷹取中学校３年　　浜　日奈乃

私は児童養護施設に入った経験がある。施設に入ることは急に決まったことだったからその当時、身に付けていたものと教科書類しか持っていない状況だった。そんな中、施設からは服や下着、靴下など生活する上で必要不可欠なものは全てそろえて貰っていた。他にも塾や華道を習ったり、栄養バランスのよいご飯を毎日三食食べていたりもした。普通の生活と変わらない、いや下手したらそれより良い生活をさせて貰っている事に幼いながら疑問に思ったものだ。そこから数年経ち、学校の授業をきっかけに児童養護施設は税金によって運営されているということを知った。

そこで私は、昔疑問に思ったことを踏まえ、児童養護施設ではどのようなところに税金が使われているのか調べることにした。習い事の費用や人件費、食費や洋服代など…。他にも 18 歳を迎え退所する子の新生活の準備に使われているということを知った。施設で暮らしている子は税金によって生活できているということが分かった。その子たちは税金のお陰で生きているといっても過言ではないということだ。しかし世間では「かわいそうな子達」「税金を使っているくせに感謝をしない」「最低限の生活をしろ」などと言われている。実際、私もかわいそうとかつて言われたことがある。もちろん苦労したこと、悲しかったことは沢山ある。それでも私は私のことをかわいそうな子と思ったことは一度もない。感謝をしていないみたいなことも言われているが私はあの時なに不自由なく生活させて貰えていた事に本当に感謝しているし税金があって良かったなっと心の底から思えた。

皆、一度はこう思ったことがあるんじゃないだろうか。「税金がなくなればいいのに」と。私も昔思ったことがある。服を買ったとき、レシートを見て消費税がなかったらもっと安く済んだしキリよくお会計ができて小銭が多くならずに済んだのにと。でもその税のお陰で生活できている子が沢山いるのも事実だ。税は施設だけではなく道路や橋の整備、犯罪防止や交通安全の確保などに務める警察、学校の建設などにも使われてる。こう聞くと、税の力を借りずに生活している人間はいないはずだ。自分は税によって助けられているのにそんな自分は税を払わないのは無責任な話だ。だからこそ皆は税を払う義務がある。私たちはまだ子供だから払う税は消費税しかない。けど私たちが大人になって払う税が増えたとき、改めて『税』の大切さが分かるだろう。

ありがとうの循環

赤磐市立高陽中学校３年　　小林　未菜歩

中学生の私達にとって、一番身近な「税金」といえば「消費税」ではないだろうか。中学三年生の私は、五月に修学旅行で沖縄へ行った。日頃は、買い物へ親と行くことが多く、自分でお金を支払う機会は限られていた。だが、七百円分と決められた事前のおやつ購入は自分で行った。また、旅行中は決められたお小遣いの中で、家族や知り合いなど複数の人にお土産を購入したり、沖縄の名物を買って食べるなどした。お店では「本体価格」と「税込価格」が表示されていて、税込になるとグッと値段が高くなるような気がした。税抜きならもっと沢山買い物が出来るのにと思う経験をした。そこで、私も払っている消費税などについて私なりに調べてみた。

現在、日本の歳入（税収部分）で一番大きな割合を占めるようになったのが「消費税」である。消費税は景気に左右されず、安定的に得ることが可能なのである。中学生の私でも教師でも国会議員でも同じ税率を払うことになる。金額が明記され、その額を自分の財布から直接出す（＝財布の中のお金が目に見えて減る）ことで、負担感ばかりを意識しやすい気がする。しかし、本当に大事なのはその税金がきちんと使われているかどうかに目を向けることではないだろうか。

国の予算や地域の自治体の予算をしっかり確認することが大切である。私達の代わりに税金の使い道を考えてくれているのは、国や自治体の議員の方々。どんなお金の使い道に賛成・反対するのか、私達の投票次第で税金の使い道が変わることになる。だから、三年後には十八歳となり選挙権を得る私も今から関心を向ける必要があると思う。

国の歳出の中には、医療・福祉・教育関連のものもある。私達中学生が教育を受けるために年間一人あたり百万以上の税金が使われているそうである。一人一台のタブレットも導入され環境が整った中で学習出来るのも税金のお陰だと意識することはほとんどない。支払うお金には敏感だが、受けている恩恵には鈍感なことを反省しなければならない。

私は高校への進学を目指していて、現在、複数の高校のオープンスクールに参加するなどして情報収集している。令和二年四月から私立高校に通う高校生への国の就学支援金の上限が引き上げられた。これにより学費の面だけで私立高校に進学出来なかった受験生の選択肢が広がり私立高校もより身近になっている。学費を気にすることなく自分の夢や目標に向けて高校を選択出来るのは、元を正せば税金のおかげということになる。

今回の税金の学習にあたり新井和宏著『あたらしいお金の教科書（ありがとうをはこぶお金・やさしさがめぐる社会)』を読んだ。この中で「ありがとうの循環」という言葉が心に残った。税金を負担することは、回り回って自分も含めみんなの生活をより快適により豊かにすることにつながっていると感じた。

よりよい日本のために

徳島市応神中学校３年　　齋藤　美心

「虫歯と詰物の治療二本で、合計九万四五〇〇円?!」

これは芸能人のたむらけんじさんが、アメリカで支払った歯の治療費だ。私はこのニュースを見てとても驚いた。母親に日本だとどのくらいかかるのか聞いてみた。「治療内容にもよるけど、だいたい五〇〇〇円くらいかな」と言っていた。アメリカと日本とでは、どうしてこんなにも違うのかと疑問に感じ、調べてみることにした。

日本には、アメリカにはない国民健康保険制度というのがあり、日本国民は国民健康保険税を支払う義務があることを知った。私の家の場合、一年間の収入や家族構成などに応じて、市町村で決められた算定方法で国民健康保険税の金額が決められる。そして、その金額の税金を納めることにより、国民健康保険に加入したことになり、三割の自己負担で医療を受けられ、残りの七割分は保険でまかなわれるということだ。だから同じ歯の治療でも、アメリカと日本とではこんなにも大きな差が発生することがわかった。

私の家は農家だ。毎年七月頃市役所から国民健康保険納税通知書が送られてくる。それを確認する父は、毎年その金額に驚き、そして落胆している。その姿を見る私は子どもなりに「どうして毎年そんなお金を支払わないといけないんだろう」と疑問に思っていた。しかし、たむらけんじさんの一件で、父が毎年納めている税金がどのように使われて、そしてその恩恵を私自身も身近に受けていることを知り、納税の大切さを実感した。

コロナが流行してから、私は二度コロナになった。その時の検査や薬の処方、支援物質の提供も全て税金により無償で行われたことにとても感謝している。同じ頃、アメリカでは毎日大勢の人がコロナで亡くなっているとニュースで報じられているのを見た。そこには、こうした健康保険の有無が大きく関わっていると思う。日本では、電話ひとつで救急車が無償で出動してくれる。有料のアメリカでは、救急車を呼ぶのを諦めた人がいたかもしれない。高額の治療費のために診てもらえない人がいたかもしれない。そう思うと、日本は本当に恵まれていると思う。

私の日々の生活の中で、税金による恩恵をたくさん受けていることを改めて知った。通学途中、自転車をこぐ足に当たって痛い道路脇の草はきれいに刈り取られている。教室に設置されたエアコンのおかげで、猛暑の中でも快適に授業が受けられる。私はまだ中学生なので、消費税くらいしか納められないが、自分が納めた税金が誰かの生活に役立てられていると思うとうれしくなる。「なんで払わなくてはいけないの」とは、もう考えなくなった。

私の住む日本がよりよい国であるために、しっかり納税していこうと思う。

税の大切さ

宇田津町立宇多津中学校１年　　岩﨑　由希子

私は小学五年生の時に宇多津町に引っ越してきました。引っ越してきて宇多津町の小学校や図書館がきれいで、町内に公園がたくさんあることに驚きました。そして、この二年間で体育館にエアコンが付き、公園のトイレがきれいになり、今も役場の近くの公園が整備されています。私が気付いただけでもいろいろな場所にお金が使われています。私はこの夏休み、宇多津町の財政と税金について詳しく調べてみることにしました。

初めに、宇多津町の広報に載っている予算を調べてみました。歳入の項目を見ると町税、地方贈与税、地方交付税など、いろいろな税があります。私は今まで消費税くらいしか意識したことがなかったので、その他の税について詳しく知りたいと思いました。そこで、税や町の財政に詳しい宇多津町役場の総務課長さんと税務課長さんにお話を聞きに行きました。どのような税があるのか、それがどのように使われているのかという私の質問にとても詳しく丁寧に答えてくださいました。わかりやすいところでは宇多津町が管理している道路、公園、役場、図書館、学校などの施設の管理に使われていること。その他にも、町に住んでいる人たちが安心して暮らせるように使われているお金。例えば私たちの学校生活に必要な事に使われるものや健康に過ごせるように健康診断などにも使われること。私が意識していないところでもたくさんの税金が使われていることがわかりました。

私は中学校で吹奏楽部に入っています。吹奏楽部にはたくさんの種類の楽器があり、私も毎日学校にあるクラリネットを借りて練習しています。総務課長さんは町の予算で吹奏楽部のハープを購入した時のことを話してくださいました。それまではよその学校からハープを借りて使っていたけれど、あまり練習ができないからということで購入することになったそうです。ハープはとても高額で、その上入れ物もとても高い。でも、頑張っている中学生のために購入したんだと教えてくださいました。毎日当たり前のように使っている楽器も、みんなが納めた税金で購入されているのだということを知りました。私もこれまで以上に大切に、感謝の気持ちを込めながら演奏したいと強く思いました。

「必要なものでも予算が足りなくて諦めてしまうことはありますか。」との質問に課長さんは、いろんなところでできる限りの節約をしながら本当に必要なところに使うようにしているのだと教えてくださいました。私たちも公共の物を無駄に使わず、大切にしていかなくてはいけないと改めて思いました。そして、私も大人になったらしっかりと税金を納めて、世の中を支える一人になりたい。その税金がいろんな人たちの役に立つ日が楽しみです。

福岡市の夜間収集

福岡教育大学附属福岡中学校３年　　田中　はる

「ねえ、大変なことになってるよ。」
ある夏の夕方、母にそう言われて表に出た。たくさんのカラスの鳴き声が聞こえた。近くの道路に、荒らされたゴミ袋があり、中身があふれ出ているのが見えた。その近くにはゴミを漁っているカラス、電線にも普段見ないほど多くのカラスがいた。

福岡市は政令指定都市で唯一、ゴミの夜間収集を実施している都市だ。ゴミは夜に出すきまりなのに、誰かが明るいうちに出したようだ。どうしたらよいかと唖然とした。そのあと、母と一緒にしぶしぶ片付けて夜の収集を待った。これをきっかけにこれまでの収集のありがたみを知った。そして夜間、どういう仕組みで収集されているのだろうと興味がわいた。

インターネットで調べると夜間に収集するとコスト面での負担が大きいらしい。深夜に働く人には深夜料金という給与がプラスされ、その分人件費が膨らむ。それが多くの市で夜間収集が実施されない原因の一つのようだ。また、作業で発生する騒音問題も懸念される。しかし、私は夜、収集車の音で目を覚ますなんてことは一度もなく、迷惑だと思ったこともない。この作業音は、車の誘導の声が小さくても運転手に聞こえるようにしたり、運転時の音を小さくしたりするなどの対策のおかげだと知った。福岡の収集法には工夫がたくさんあると分かった。

ではゴミ収集にかかるお金はどこから来るのか。調べてみると、地方交付税交付金が使われていると知った。これは国に集まった税の一部が各自治体に支給されるもので用途は自治体に任される。ゴミ収集は私たちの生活に欠くことのできない公的サービスの一つである。福岡市は夜間収集を市の都市開発の一つとして、都市美観に貢献すること、交通渋滞を回避すること、鳥獣被害を減らすこと、防犯・防災につなげることを目的として始まったと知った。

夜間収集は、ゴミを収集するだけでなく、福岡の街並みを守るために色々な面において役立っていると知った。そんな活動の裏には税金がある。税金は思っていたより生活に密着しており、私たちが生活するのに欠かせない存在だと気付かされた。また、日本全国から集められた税が、福岡の独特な取り組みを支えてくれていると分かった。夜間収集はお金がかかるとしても、それを上回るほどのメリットがあると感じているし、すごく市民のことを考えてくれている取り組みだと思う。こうやって税金が使い道を試行錯誤して、大切に使われていると知ると、これまでよりもっと気持ち良く納税できるはずだ。

自分の街を住みやすくしてくれる税金。他の街の活動にも間接的に協力できる税金。税金は莫大なお金だからこそ、どう使われるかが大切だと思う。これからも日本が豊かになるように、税金が活用され続けてほしい。

未来への投資、そして誓い

福岡教育大学附属福岡中学校３年　　畑瀬　由衣

サンフランシスコ空港から、飛行機の機体は空高く上がった。一週間の思い出が脳内を駆け巡る。窓の外に広がる三月の青空とカリフォルニアの景色に向かって「絶対ここに戻ってくる」と、心の中で宣言した。

初めての海外、アメリカでの一週間は、私の人生史上最も価値のある一週間だった。単なる旅行ではなく、私の住む飯塚市のグローバル人材育成研修事業で行かせていただいたものだ。この事業では、研修に参加する中高生二十人に対して、一人当たりの総経費約五十万円の内、三十五万円、つまり七十パーセントもの金額を市が負担してくれる。もちろんこの負担額は、市民からの税金で成り立つ。

そのような税金に支えられた今回の研修に、私は人一倍強い思いがあった。理由は私の将来の夢にある。それはチャイルド・ライフ・スペシャリストという、医療環境にある子どもに、心理社会的支援を提供する専門職に就くこと。その資格は北米の大学でしか取得出来ないため、高校卒業後にアメリカの大学に進学することが私の目標だ。そのようなアメリカはいつも私の胸の中で憧れの場所として輝いていたが、その地を自分の目で見たことはまだ無かった。それがとうとう、税金という支援を受けて今回実現したのだ。

シリコンバレーの企業やスタンフォード大学の見学、現地の中学校への登校など研修中の貴重な経験の数々。現地の学生と言葉の壁を越えて笑い合えた時の喜び。本物の家族のような愛をくれたホストファミリーとの出会い。これほど中身が濃く、一瞬一瞬が一生の思い出になるような経験は他になかったのではないか。研修中の何もかもが最高だった。そして、現地の生の英語に触れたことで、大学進学までに対等にコミュニケーションを取れる英語力を習得するという目標も生まれた。

だが、どうして市は税金を使って私たち中高生に、ここまで支援をしてくれたのだろうか。私は『未来への投資』だと思う。これからの国や市を担っていく中高生の夢への、期待と応援を込めて。税金を納める一人一人の市民が夢への後押しをしてくれているのだ。

税金の必要性やその負担の大きさについて批判的な声をよく耳にする。しかし、そんな人々に知ってほしい、あなたの納める税金が、一人の中学生の人生に大きく影響する未来への投資になったということを。税金は、決して無駄ではないということを。

四年後、アメリカの大学へ、この地へと戻ってこよう。未来の私への投資で得た全ての経験は、生涯忘れることはないだろう。これから一生懸命勉強して、市や国を支えられる人になることで、間接的にでも、私をアメリカに行かせてくれた全ての人に、恩返しができたらいいなと思う。

そしてこの「未来への投資」に恥じぬ人間になることを、私は全ての納税者へと誓う。

税の役割と大切さ

福岡市立姪浜中学校３年　　山本　英怜

佐賀県に住む祖父は、数年前から認知症を患っている。先日、その祖父が行方不明になった。ちょっと出かけてくると言って家を出たきり数時間経っても戻ってこないと、心配した祖母から母に電話があったのだ。すぐに私達家族は、祖父に持たせていた携帯電話のＧＰＳ機能を使って、祖父を探し回った。結局、佐賀の自宅から五十キロメートルも離れた糸島の農道で祖父を見つけることが出来たのだが、混乱して話がかみ合わない祖父は、なかなか車には乗ってくれなかった。そうこうしているうちに、佐賀の警察署から連絡を受けて捜索を手伝ってくださっていた糸島警察署の方も駆けつけ、一緒に説得してくださった。そうしてようやく、祖父は車に乗ってくれたのだった。炎天下の中、捜索を手伝い、祖父を説得して下さった警察官の方には、感謝の気持ちでいっぱいだ。

祖父を祖母のもとへ送り届けた後、私はふと、あんなに離れた場所にいた祖父をなぜこんなにスムーズに保護できたのだろうと疑問に思った。もちろん、祖父が携帯電話を持って出ていたことも大きかったのだが、祖父が行方不明になってから保護するまでの段取りが実にスムーズだったのだ。母にそのことについて尋ねると、祖母が祖父の徘徊について事前に役所に相談し、市の提供する「あんしん登録（行方不明時のスムーズな捜索・保護を目的とした事前登録事業）」に登録を済ませていたことを教えてくれた。つまり、祖父が行方不明になる前から、大勢の方々が協力し、見守ってくれていたのだ。

私はこれまで、行政サービスについて授業で聞いたことはあっても、自分事として考えたことはなかった。しかし、今回の件で、見守りが必要な人を家族に持つ人達にとって、相談したり、支援を受けたりできる環境があるということが、本当にありがたく、心強いことなのだと実感した。そして、これらの行政サービスを支える税金が、私達が安心・安全に暮らしていく上で必要不可欠なものなのだということに、改めて気づかされた。

普段意識していないと忘れてしまいがちだが、私達の生活は、多くの場面で税によって支えられている。私達中学生にとって身近なところでは、学校だ。校舎はもちろん、机や椅子などのあらゆる設備や、無料で配布される教科書も全て税によって賄われている。他にも、普段何気なく利用している公園、無料で本を借りられる図書館、病院を受診した際の診療費や薬代の助成費用、ごみの処理費用なども、税によって賄われている。

税について考える時、税を負担する側の立場にだけ立つのではなく、その役割りと大切さにもしっかりと目を向ける必要がある。そうすれば、みんなが納得し、より暮らしやすい社会が実現できるのではないだろうか。

「この国に生まれて」

学校法人東福岡学園東福岡自彊館中学校３年　　清武　琳

ここにうまれてよかった。初めてそう感じたのは、小学二年生の時だった。翌朝に手術を控え、病棟のベッドで恐怖に震え泣いていた僕はふと、学校の青少年赤十字加盟式で聞いた話を思い出した。世界には飢餓に苦しみ、教育や医療も満足に受けられない子どもたちが大勢いる、そんな内容だった。だからといって涙が止まるわけではなかったが、漠然と、もし外国に生まれて手術を受けられなかったら、もっと大変なことになるだろう、と思うと、少しだけ気持ちが前向きになった。

僕は先天性の脊柱側弯症と肋骨欠損で、五歳のときから今までに十八回手術を受けた。手術は怖いし、術後数日は激しい痛みとの闘いだ。でも、手術のおかげで、Ｓ字に曲がっていた僕の背骨は、服の上からならあまり目立たないくらいに矯正された。僕が受けている手術法の一つは僕が生まれる一ヵ月前に認可されたばかりで、もし数年早く生まれていたら、海外でしか受けられない手術だった。幸運が重なり、僕は通院している病院で、全ての治療を受けることができた。とはいえ、毎回全身麻酔で数時間の手術と一週間程度の入院。一回目の手術の後は、数日間集中治療室にも入った。今までにかかった医療費の総額が三千万円を超えている。しかも、手術は今後も続く。もしも全額負担となればとても払える金額ではない。

けれどありがたいことに、僕は「自立支援医療（育成医療）」という制度を利用できるため、自己負担はわずかな額ですむ。そのおかげで、支払いの心配をせずに最適な治療を受けられるのだ。小学二年生の僕は、ただなんとなく、手術は嫌だけど、手術ができないと困るんだろうな、と思っていた。でも今ははっきりとわかる。事故や病気で高額な医療が必要になっても安心して治療を受けられるのは、保険制度や医療制度があるからだ。そしてそれは、世界的には決して当たり前のことではないのだ。いつ誰が病気になるかはわからない。突然自分や家族が病気になったら、できる限りの治療を、と願うだろう。誰でも病院に行ける、治療を受けられる、というのは実はとても幸せなことなのだと思う。

こんな体で生まれてよかったと思ったことなど一度もない。でもこんな体で生まれたから、できた経験がある。出会った人がいる。みんなに支えられ、受け入れてもらえるおかげで、毎日の学校生活を楽しむことができている。「自立支援」のために高額な税金を使って、最高の治療を受けさせてもらっている。

あと数年で最後の手術を終える。体の成長が止まったら手術も卒業だ。経済的にも精神的にも自立した大人になることが、僕にできる社会への恩返しなのだと思う。これまで僕を支えてくれた全ての人への感謝の気持ちをこめて、今、大きな声で言える。

「この国に生まれてよかった。」

と。

未来を創る一員として～温泉宿に生まれて～

竹田市立竹田中学校３年　　渕　心音

雄大な自然が広がる阿蘇くじゅう国立公園。その一角をなす大船・久住・黒岳の三山が鎮座する麓の小さな町に私の自宅はある。今から三十五年程前、温泉が大好きだった曾祖父が、「家の風呂を温泉にしたい。」その一心で、源泉を掘り当てた。湧き上がった温泉を見た瞬間の曾祖父の表情はまさに、喜色満面だったそうだ。ほどなく、そこに民宿を営むようになったが、夏は合宿、春秋は登山、冬は湯治客を中心に賑わいを見せる。私もお皿洗いの他、お風呂掃除を手伝っているが、お客さんから「お湯、気持ちよかったよ～。」と言われると、最高の気分になって、家業が温泉宿で本当によかったなと感じる時だ。

さて、税について学ぶと、我家が皆さんから消費税や入湯税といった大切な税金を預かっているのだと強く意識するようになった。そこで、入湯税について調べてみた。入湯税の歴史は案外古く、江戸時代から既に幕府が民衆に対して課していたことを知った。また本市では昨年およそ十一万もの入湯者があり、千七百万円程の税収と、それが、観光案内板の設置や観光の広告料といった観光客誘致事業全般、山桜植林事業等に使用されたそうだ。市の税収割合としては僅か一％程度だそうだが、来訪者の税が、次の旅人のために活用されていること、基幹産業が農業と観光業である故郷にあっては、その発展に役立てられているのだと分かった。父は「入湯税という特別な税を納めさせて頂いているが、それで社会参画できている気がしてとても嬉しい。」そう私に話してくれた。その言葉を聞いて、何だか私まで嬉しい気持ちになった。

さて、私は二年前に体調不良を起こし、その原因が「小児がん」だと判明した。長期入院し、不安な毎日を過ごした。抗癌剤投与や放射線治療を受けたのだが、その影響で、吐気や腹痛に襲われることもしばしばだった。この治療には、月だけでも数百万円はかかる高額なものだったが、税のお陰で先進医療が受けられ、今では随分と元気を取り戻せた。治療はこれからも続けねばならないが、身をもって税の有難みを感じる経験だった。

遠く風土記にも記録されている郷土の温泉。つまり温泉が、古より誰分け隔てなく万人の心と体に癒しや温かさを与え続けてきたということだ。入湯税は、町の活性に繋がり、旅人から次の旅人のために使われる。そして、税は人の命をも救う。温泉と税を照らし合せてみると、両者はとても似ていると私は思う。何人にも平等に還元され、安らぎや癒しをもたらす温かな存在であるからだ。故郷の雄大な自然とその恵みに感謝しながら、これからも一生懸命お風呂を磨こう。入湯税を預かる家庭に生まれた一員として、家業への誇りを抱きながら。そして、名も知らぬ世の中の困っている誰かを笑顔にできるよう、立派な納税者になろう。私の命も助けてもらったのだから。未来の社会を創る一員として。

税で助け合える社会に

指宿市立南指宿中学校３年　　東　蘭太郎

今年の六月、母が病気になった。

病気とは縁がなく、元気な母から病名を告げられたときには驚いた。誰もが耳にしたことのあるその病名は、僕を一瞬にして凍らせた。母は詳しい検査のため、鹿児島市内の病院へ行くことが増えた。病院から帰ってきた母には、長時間の検査の疲労に加え、悩んでいるような様子が見られた。僕が、

「お母さん、大丈夫。」

と声をかけると、

「これからまだたくさんの検査をしないといけないし、治療費がかかるから心配だな。」という返事だった。ただでさえ、病気にかかっている人は、不安な毎日を過ごしているのに、安心して治療に専念できるような保障はないのだろうかと思った。しばらくして、母の表情が明るくなっていた。理由を聞くと、「限度額適応認定証」という医療保障を取得できたそうだ。「限度額適応認定証」とは、医療機関の窓口で保険証と一緒に提示することにより、医療機関ごとの窓口で支払うひと月の金額を、自己負担上限額までに軽減できる認定証だそうだ。「限度額適応認定証」を取得した母は、治療に前向きになっており、

「払うときは大変な税金だけれど、こうして生活を保障してもらえるのはありがたいな。これからもしっかりと税金を納めていこう。」

と笑顔で言っていた。父母や大人が納めている税金が、多くの人を助け、その中の一人である母も助けられていることを実感した。

しかし、数日後、一つの疑問が湧いた。母は、治療によって脱毛が始まっており、前準備としてウィッグを購入していた。ウィッグは、長さや毛の質、髪型など様々であり、金額も低額なものから高額なものがあるようで母は悩んだ末、今までと違和感を無くすためある程度の金額を選んだそうだ。そして、購入する際、ウィッグへの助成金があるか調べたそうだ。すると、鹿児島県では、三十五の市町村では実施されていたが、私たちの住んでいる指宿市では実施されていなかったそうだ。母は、

「病気にならないと気付かなかった。いろいろなところで困っている人がいる。税金を納めているのは、どこの市町村も同じなのに、助成金に違いがあるのは残念。」

と肩を下ろして言った。病と闘っている母の言葉は、とても重いと感じた。義務である税金納入。しかし、何のための、誰のための納入であるだろうか。助けられている人、助けられていない人、偏りがあってはいけないと思う。病と闘っている母は強い。苦しそうな様子も見られるが、今までと変わらず笑顔でいることが多い。母のように病を抱えている人が、懸命に病と闘い、乗り越えられる世の中であってほしい。そのため、希望、助けとなる助成金はとても大切である。全ての人が希望を持ち、生き生きと生きられる社会になってほしいと願う。

税金で格差のない平等な社会の実現を

石垣市立石垣第二中学校３年　　加原　駿輝

私の家の近くには市民が誰でも使用できる運動公園がある。ボールを蹴りに行ったりジョキングをしたり、体を動かす事が好きな私にとってその公園は、必要不可欠なものである。公園だけではない。学校や道路、図書館等、市民の健康や娯楽を守る様々な施設が税金でできている。「税」について考えてみた時、私たちの日々の生活に潤いを与えてくれるのが税なのだと改めて実感できる。

私は以前、なぜ商品を購入するのに十パーセントもの消費税を払わなければいけないのか疑問に思っていた。世界情勢や自然災害等でただでさえ物価が高騰していて、「買いたいもの」ではなく、「買えるもの」へと買い物の仕方が変化しているというのに、その上に消費税も払うなんて、と考えていた。

しかし、税の使い道について調べてみて、目の前の事しか考えていなかった事に気づいた。例えば医療費は、診察や治療にかかる費用のうち八割または七割を国が負担してくれるため、私たちは安心して病院へ行くことができる。もし、全額負担だったら高額になる医療費を支払う事ができない人が出てくるのではないか。入院費用が全額負担で二十万円だとすると、二割負担では四万円の支払いで済む。こんなにも違いがあるのだ。税金で提供される福祉は、誰でも受ける事ができる。この事は経済格差をなくし、国民の誰もが幸せに生きる事につながると思う。

私たちが生きるこれからの社会は、「超少子高齢化」になる事が予想される。それは若者が減り、高齢者が多い社会である。今まで以上に介護や施設の支援として税金が必要になる。それだけではなく、ごみ処理、教育関係、年金、警察、消防、防衛等の仕事にも使われている。一人一人が納めた大事な税金が私達の日常生活に結びついており、形を変えて還元されているのだ。一人の力ではできない事も、一人一人の力が大きな「税」という力になる事で色々な事ができる。それは、格差のない平等な社会の実現であり、豊かな社会に生きる国民の幸せにつながる。

「一人はみんなのために、みんなは一人のために」

まさに、ゆいまーるの精神である。平和を願い、力を合わせて地上戦を戦った沖縄の方言ゆいまーるには、「どんな時も助け合って、支え合って生きてゆこう」という意味があり、沖縄に生まれた私の大好きな言葉の一つである。

皆で助け合い、協力し合って一人一人の豊かな生活を創っていこうというものが税金制度であり、だからこそ国民の義務の一つになっているのだと改めて思った。

私も将来、納税者の一人となる。誰かの生活を支える一人、誰かの税金によって支えられている一人だという事を心に留めていきたい。

「税」は私のスーパーヒーロー

浦添市立港川中学校３年　　南湖　日菜華

私は絵が好きだ。アニメも好きでヒーロー系をよく見る。イラストレーターになることが夢だ。勉強で「税」について学んだ時ふと気がついたことがある。そのアニメと「税」が似ているのではないかと。

税金は多くの種類がある。財務省のホームページを見ると、国の税金としてだけで二十種類もあった。聞き覚えのある消費税について調べてみると、一九八九年に導入されて以降、法改正がされながら、現在は買い物をする時八％又は十％を代金に足して払っているそうだ。私は画材をよく購入するので、中学生も納税するんだと驚いた。消費税分のお金を「負担している」点では、国民から大事なお金を搾取しているようで悪者に思えた。

だが本当にそうだろうか。私の住む浦添市の埋立地や、通っている学校・教育を始め、犯罪から守ってくれる警察や病院で利用する医療サービスも税金が使われている。世界的に見ても珍しい、蛇口から水が直接飲めるのも、上下水道が整備されているおかげだ。各自では努力してもとても実現できない。これが私の住む地域だけではなく日本中で整備されている。

助けてもらえるのが当たり前とヒーローに文句を言い放つキャラクターがアニメに出ることがある。ヒーローが陰で血の滲む努力をしていることを知りもせず、権利ばかり主張する「嫌な奴」だ。税の知識がなく、納税を「お金を取られた」などと思っていた私は、まさに「嫌な奴」に成り下がっていたのではないだろうか。

犯罪者を取り締まる警察、火事から助けてくれる消防士、災害時の自衛隊派遣などはもはや映画の世界だ。私の払った消費税も少額だが税の財源の一部になれている。某アニメではここ一番のピンチになった時、元気を分けてもらい敵を倒す技がある。一人ひとりは小さな力でも、集まるとすごい効果を発揮する。ヒーローだって一人じゃ戦えない。私達が支える必要がある。私はまだ中学生で、税金の恩恵を受けるばかりなので、実際に納税してくれている大人を尊敬する。

消費税は、令和五年十月から「インボイス制度」という適格請求者の発行又は保存により消費税の仕入控除を受けるための制度が始まる。利用するには税務署に書類を提出する必要があるそうだ。正直まだ頭の中は空っぽだが、税の知識と将来の夢を詰めこんで大人になろう。去年もコロナという病気が大流行した。台風で大きな被害も発生した。今はインターネットで世界中の出来事を知ることもできる。助けが必要な国民がいることを認知して、将来は誰かの笑顔を支えている税金をしっかり納めたい。

私は納税で特大の元気をヒーローに分けてあげられるイラストレーターになるのだ。

税金が守る未来

富良野市立富良野東中学校３年　　児玉　理桜

最近、街を歩いているとよく、首にネッククーラーをつけている人、ハンディファン（携帯扇風機）を持っている人が目に付く。地球温暖化の進行で近年、日本の夏は猛暑が続いている。私が住んでいる北海道でさえも、毎日のように三十度を超える厳しい暑さである。これに加え今年は、台風の影響も大きい。気候変動が激しくなっているのが目に見えてわかる。

このような地球温暖化を防止するため、二〇二四年度から新たに国税が追加されることを知っているだろうか。「森林環境税」だ。これは、「パリ協定」の枠組みのもと、温室効果ガスの排出削減目標や災害の防止などを達成するための国税で、二〇二四年度からは国内に住所がある人から一人千円、住民税に上乗せする形で徴収されるという。日本は国土面積の約七割を森林が占めている。しかし、少子高齢化の進行による人手不足や後継者不足、木材価格の低迷などなど、たくさんの課題をかかえている。この新たな税について国は、「森林を守ることは国土の保全や水源の保護など国民に広く恩恵を与えるものだ」と説明している。一人当たり千円の負担は大きいなと私は感じたが、こうした課題や私たちへの恩恵をふまえると妥当なのかもしれない。税金を払うことは「未来への投資」と聞いたことがあるけれど、本当にそうだと思う。私たち国民が今、未来へと税を貯めていくことで、未来の環境が保全され、後世へとつながっていくのだ。

そうは言っても、全ての国民が快く税を払うことは困難である。その大きな要因としてあげられるのは、税のありがたみを身近で感じにくいこと。そもそも税についてよく知らない人も多いと思う。私自身も、この「森林環境税」について、これを書くまで一度も耳にしたことが無かった。母に、この税が来年度から始まることを伝えてみても「知らなかった」と驚いていた。したがって税の意義や役割など、情報をもっと発信し、広めるべきだと考える。そして、私たちも、税金は必ずどこかで払って、使っていて、重要なものだから、理解を深め、正しい情報を吸収していくことが大切だと思う。

以上のことから私は、「森林環境税」によって自然や環境が保全されていくことを望む。また、私自身、改めて税金に感謝し、これからの学校生活や日常生活をより大切に、充実させていこうと思った。

平等か公平か

札幌市立前田中学校３年　　坂田　美緒

私が友達と買い物をしているとき、ふと考えたことがありました。税金は必要なのか。友達に話してみると、意外な答えが返ってきました。友達は、必要なのは前提としてそれが平等か公平かの方が気になると言うのです。私も普段からあるサービスの除雪や公共施設などは大切なので税金は必要だろうなとうすうす気付いてはいたのですが、税金が平等か公平かは考えたことがなく、興味が湧きました。

家に帰ってから平等と公平の意味を調べてみました。平等は、元の状態に関係なく全てのものに等しくすることで、公平は、元の状態に合わせて全てのものを等しくすることだと分かりました。これと税金を重ねて考えてみると、もし税金が平等ならば年収や家庭の環境など関係なく、全員から同じ額の税金を取ることになり、もし税金が公平なら年収や家庭の環境に合わせた額の税金を取ることになります。これだけで考えると、年収が多い人は給料から税金を多く取られるので税金は公平と言えるでしょう。しかし普段の買い物はどうでしょうか。どんなに貧しくても裕福でも、物を買う時の値段は変わりません。これは全員が同じ額を払うので平等と言えます。これらから考えてもまだ税金は平等なのか公平なのか分かりませんでした。

そこで私は、別の視点から考えてみることにしました。今までは、同じ商品を買ったときに払う税金に着目していたけれど、年収が多くて裕福な人と年収が少ない人とでは買う物も違うはずです。つまり、高額のものを購入した人には高い税がつき、低額だと低い税で大丈夫ということです。これを言い換えると、元の値段に合わせて税の割合を等しくする。つまり公平と言えるのではないでしょうか。収入につく税も公平、支出につく税も公平。これらの事実から、税金は公平であると理解することができました。後日友達に伝えると、なるほどねと納得してくれました。

今までは、収入が違うのに物価は同じで不公平だと考えていたけれど、友達の一言からこんな新発見ができて、今までの不満のようなものが解決されたので、日常の中で思ったことをそのままにせず、深く考えて根拠のある自分なりの答えを出すのは成長につながるなと思いました。これからも日常の色々なことに興味をもち、大人になるまでに、なってからも、知識をためこみ、役に立てていきたいです。

「あたりまえ」をつくる税金

秋田大学教育文化学部附属中学校３年　　長尾　美佑

道路がある、学校がある、きれいな水が使える……。日本では「あたりまえ」のことだろう。そのような「あたりまえ」のことには税金が使われている。税金は私たちの暮らしに「あたりまえ」をつくり、私たちの生活を豊かにしてくれるのだ。しかし、世界には日本でいう「あたりまえ」が当たり前でない国が多く存在する。開発途上国である。

私は学校の総合学習で開発途上国の様子が分かる動画を見たことがある。そこで登場する十三歳の女の子は家の近くに水がなく、一日かけて遠くにある水を得ていた。それは日本の「あたりまえ」から大きくかけ離れた生活だった。動画を見て、とても胸が痛んだ。世界には、その動画で登場する女の子のように充実した生活ができない人がたくさんいる。このままではいけないと思った。

そこで日本はどういった援助を行っているのか調べた。すると、日本の税金が開発途上国の援助に使われていることが分かった。税金は日本でしか使われていないと思っていたので、とても驚いた。その開発途上国の援助のための税金を「経済協力費」というそうだ。「経済協力費」は「ＯＤＡ（政府開発援助）」と呼ばれる活動に使われている。ＯＤＡでは開発途上国が発展するために無償で必要な施設を建てたり、資源を調達したりしている。具体的な取り組みとして、給水施設の整備や技術指導、道路や橋などの整備、ビジネス環境の整備などがある。税金はこれらの活動に関わっている。つまり税金は世界のたくさんの人を助けているのだ。

調べる上でもう一つ驚いたことがある。東日本大震災のときにＯＤＡで援助していた国々から、支援があったということだ。ＯＤＡでの活動が善因善果となったのだ。このことを知ったとき、私は改めて世界は助け合っているのだと感じた。この助け合いがあったのはＯＤＡのおかげであり、さらに元をたどると、税金のおかげでもある。私はこの事実にとても感動した。

以前の私は正直、税に対してあまりいいイメージを持っていなかった。しかし、税金が世界規模で役に立っていることを知って、プラスのイメージに変わった。社会に出るようになったら、社会・国・世界の在り方を主体的に考えて納税していきたい。

そして、いつか税の力で世界共通の「あたりまえ」ができたらいいと心から思う。

祖母に教わる介護と税金

仙台市立五橋中学校１年　　宮本　瑚舶

私には祖母がいる。いつも明るくて優しくて、元気な祖母だ。新型コロナウイルスが流行する前は、一人で暮らす祖母の家によく遊びに行っていた。最近はそんな機会もめっきり無くなってしまい、寂しく感じていた、そんなある日のことだった。母が珍しく真面目な顔でこういった。

「あのね、急な話なんだけど、おばあちゃん施設に入ることになったから。」

「なんで？あんなに元気だったのに。」

「しょうがないのよ。認知症、ひどくなっちゃったんだから。」

母の話によれば祖母は一昨年から年々物忘れがひどくなってきていたが、最近になって一人では生活できないほど症状が進行したという。

「病院の先生が、もう家族が面倒を見られる状態じゃないって。夜中も徘徊するから、ちゃんとしたところで管理してもらわないとダメなんだって。仕方なく介護老人保健施設っていう所にお願いすることにしたの。」

介護老人保健施設。あまり聞きなじみのない言葉だったが、残念ながら祖母が一人で暮らせないということはわかった。だがその施設というところは、どれだけの費用が必要なのか、急に心配になった。介護にはお金がかかると聞いたことがある。ちらりと覗いた施設のパンフレットには結構な金額が載っていた。だから、「ねぇ、お金大丈夫なの？施設って高いところなんじゃないの。」母に率直に訊いてみた。しかし答えは意外なものだった。

介護保険、とよく耳にしても、実際にどんなものかわからなかったが、区役所に介護保険の申請をすると、支払いの限度額が収入に応じて設定され、必要以上の請求は求められないらしい。祖母の場合、月に十万円もあればお釣りがくるという。更に高額介護サービス費といって、利用者負担額の半分が、申請により本人に返金されるというおまけつきだ。その他、身の回りの品々を自分で買い揃えたり補充しても、祖母の年金で十分やりくりできるとわかった。そして更に調べてみれば、介護保険とは、全額が保険加入者の保険料ではなく、半分は国や自治体からの補助、つまり税金が使われているということだった。

私はこれまで税金というと、ニュースで悪者のように言われる消費税や所得税の印象が強かった。しかしよく考えてみれば税金は、私たちの最も身近なものすべてに使われている。少し思いつくだけでも、道路、警察に消防署、学校や教科書、昨日病院にかかった治療費も税金だ。それらはみんながしっかり働いて、自分たちの生活のために少しずつ納めたお金から成り立っている。税金がなければ私たちは道路一つだって作れない。祖母も私たちみんなも、お互いに助け合って暮らしていることを忘れないでいよう。そして大人になったら、今度は自分が社会に恩返しの意味で、しっかり納税しようと思う。

「どこかの誰かの為にだけでなく」

亘理町立吉田中学校３年　　丸子　ひかり

私の住んでいる地域には、「防災公園」とよばれる場所があります。普段は誰でも利用することができる憩いの場として利用されている公園ですが、「避難丘」という人工的に造られた丘があり、地震や津波による災害時には、地域住民が避難できる高台の役割も果たします。私も家族と犬の散歩で丘に上がったり、友達と自転車で訪れてベンチで休憩したりして、お気に入りの場所として何時も利用しています。

この防災公園は、震災によって住むことができなくなってしまった地域の土地を再活用して造られた場所です。津波の甚大な被害にあった沿岸の地域には、点々とピラミッドのような形をした丘が見え、そこが避難の目印になっています。これらは、「震災後に国民の税金で造られたものだ」と、家族から聞かされました。私はこの公園を利用していないまたは、公園の存在を知らない人たちの税金を含めて整備されていたことを不図考えると私はなぜだか申し訳ない気持ちになりました。その理由は、自分のような利用者や地域住民の力だけで整備しようと思ってもできるわけではないからです。ましてや復興・復旧を最優先にお金が使われ、また、防災や減災などの日々のくらし安定のために整備を進めるには、多くの予算や労力がかかります。亘理町は津波の被害を受け、いつしか十三年以上が経ちましたが、立ち入りが制限されて使えなくなってしまった土地に、もう一度人々が集い、そして災害の時には命を守る場所が再整備されたことは、この地域にくらす私たちにとって、豊かで、とても価値のあることだと思います。

今回は、私が住む地域が税金の恩恵をうけましたが、災害はどこで発生するかは分かりませんし、困っている人たちがいれば、速やかに助けが必要になります。自助・共助で補える部分もありますが、適切に税が使われる「公助」が必要ではないかと思います。私たちの納税は、単なる義務ではなく、間接的に人の命を守ることにつながることに気付かされました。

日本は災害大国であり、今年も台風や豪雨で多くの被害や犠牲が出たのは記憶に新しいと思います。そんな時、日本中で今困っている人たちに対して、あるいは、今後予想される災害に対して、本当に苦しんでいる人たちのために、あらゆる税の仕組みが備わっていることを知りました。しっかりと税を納める義務を果たすことで、助けを必要としている人たちを救うことができます。また、その人たちが納税をしたおかげで、私たちの生活が保障されていることにもなります。税の仕組みによって、国民一人一人が互いに支えられていることに感謝をしつつ、私たちの生活をより豊かにしてくれるものであることを信じて私はこれからも「防災公園」を利用しようをと思います。

持続可能な社会の実現のための税金

茨城県立並木中等教育学校１年　　野末　有紗

皆さんは、霞ヶ浦の水質保全活動をご存じでしょうか。私は、夏休みに霞ヶ浦で開かれたダンスイベントに参加した。その時に見た霞ヶ浦はとても広大で綺麗だと思った。しかし、私が教科書で見た霞ヶ浦はアオコが湖上に浮いていて、とても綺麗とは言えるものではなかった。私は、なぜあれだけ汚れていた霞ヶ浦が綺麗になっているのか疑問に思った。調べてみると、霞ヶ浦の環境改善のために森林湖沼環境税等の税金が使われている事が分かった。私は、環境対策に税金が利用されていることにとても驚いた。

そこで、環境税について調べてみた。この税金は、湖沼の他に森林の保全や環境破壊対策、太陽光・風力発電等の再生可能エネルギーの推進等に使われている。更に、二〇二四年には住民税に上乗せする形で森林環境税が創設されるそうだ。この税金は森林環境の保全に関する事を目的とした税で、税金の個人負担が増えるため話題となっている。私は、森林再生は環境負荷の軽減に繋がるため、必要な負担だと考えた。

また、以前、桜植樹のボランティア活動に参加した事を思い出した。その日、私達は、約五〇本の桜の木を植えた。活動を終えた後に、活動の代表者が、

「一年間で木一本が取り込む CO_2 は約十四 kg で、人間一人が呼吸で排出する CO_2 は約三二〇kg。だから、人間は、一年で木、二十三本分の呼吸をしている。今日、木を植えたことで、地球温暖化の抑制に貢献することができた。」とおっしゃっていた。私は、改めて木を再生する大切さに気付き、植樹活動に参加する事で、自分自身が我が国の環境を守る一翼を担っていることを実感した。この様な植樹ボランティア活動にも税金による支援がなされている。今後、森林環境税の導入により、我が国の地球温暖化対策の第一歩が始まる。

しかし一方で、森林再生には課題がある。それは、林業に従事する人材の高齢化と不足である。この課題が原因で放置された森林が増加している。課題解決のために今後、次世代の森林作りを担う人材の確保・育成や、スマート林業に税金を投入するのは良い方策だと考える。スマート林業とは ICT やロボット等の技術を活用する林業の事だ。これにより、森林管理や林業の省力化、経営の効率化等が図られる。そして、少ない従事者での運営が可能になり、安全面やコスト面等、様々な側面の効率化に大きな期待が寄せられている。

では、私達にできることとは何だろう。スマート林業を進めるには、技術革新が不可欠だ。また、この技術革新を担う若者達が林業や環境の問題について知り、興味を持つ事が大切だ。そのために、この問題をより多くの人に知ってもらえるよう、ボランティア等に積極的に参加し、啓蒙活動を行っていきたい。また、将来、納税を通じて、持続可能な社会の実現を担う人材となりたい。

税金によって家族になれる

矢板市立片岡中学校３年　　松岡　芽愛

今回経験したことは、私の税金のイメージをマイナスからプラスに変える出来事でした。

「今度、妹が来るよ‼」そう言われたのは一月の下旬でした。親は里親をやっていますが、実際に里子が来るのは初めてでした。その時の心情を未だに鮮明に覚えています。もちろん嬉しい気持ちの反面、「実際に児童相談所から来る子はどんな子だろう。」「血の繋がりがない子と一緒に暮らすのはどうなのかな。」と若干、負の方向に近い疑問もありました。二月上旬、児童相談所から家へ妹が来ました。その妹は一歳になったばかりでまだ小さかったです。最初はすこしぎこちなかったですがすぐ慣れました。

妹と暮らし始めて少したった頃、ふと疑問が浮かびました。「私の家はお金に余裕があるとはいえないのにどうして親は里親ができるのだろう。」これから十数年も一緒にいるのに負担できるはずがないと思いました。だから私は親に聞いてみました。すると母が、「そのお金は国からもらった税金で補われているんだよ。」と言いました。私はそのことを聞いた途端、こんなところにも税金が使われているんだと驚きました。調べてみたところ、里親手当から出ているそうです。

私は税金の使い道について学校の租税教室などで知っていますが、なかなかいいイメージが湧きませんでした。公共のものは税金で成り立っていますが、税金によってつくられている実感が湧きませんでした。でも妹が来てから、税金によって私たち家族は支えられているんだなと驚きました。そしてこの経験を通して税金のイメージがマイナスからプラスに変わりました。

妹のように、家族になるということは当たり前の幸せではないことに気付かされました。また、その幸せは「税金」のおかげだということにも気付かされました。「税金は高くなる」というニュースをよく耳にし、私にとって税金はマイナスなイメージでしたが、税金は私たちの生活を支えてくれている「なくてはならない存在」だと学びました。報道するときには、「税金が高くなって生活が苦しくなる」という悪い面を強調するのではなく、「世の中をよくしていくものである」という使い道を強調するべきだと思います。国は「使い道」を国民が納得するようなものにしていく責任が非常に重いとも感じました。最後に今回の経験を通して、税金によって家族になれる子がたくさんいることをみんなに知ってほしいなと思いました。現在少子高齢化が進み子供の数は年々減少していますが、児童相談所に入所する子は年々増えています。その中で一人でも多くの子に家族ができることを願っています。また、税金は家族になれる一つの手段にも使われていることをたくさんの人に、知ってほしいです。

忘れない報恩感謝の気持ち

富岡市立西中学校３年　　勅使河原　夏

「良かったー！高校生まで医療費控除を受けられるように変わったみたい！」母が富岡市のホームページを見ながら大きな声をあげた。

私の住む富岡市では、令和五年四月から医療費助成の内容が拡大し、入院費に加え、通院費についても、高校生まで助成対象となった。

私は中学二年生の秋に、遺伝性の血液の病気が見つかった。完治する病気ではなく、毎日の薬と、定期的な検査に通う生活が続いている。ただ、薬さえきちんと飲んでいれば、何の症状もなく、体調も良好であり、薬の量を調節していれば、生活に大きな支障はなかった。

毎回、三ヶ月分の薬を出して貰うのだが、毎日飲むとなるとかなりの量で、スーパーのビニール袋いっぱいの薬を持ち帰ってくる。「この薬、普通に支払ったらいくら位かかるのかなぁ。」母がポツリと呟いた。私も、この先ずっと飲み続けるのであれば、どのくらい診療や薬代にお金がかかってしまうのか。病院へ連れて来て貰うのにも、母に毎回休んで貰わなければならず、気がかりで、申し訳なさを感じていた。だから、この医療助成期間の拡大は、我が家にとって朗報であり、私も少しホッとし、安心することができた。

そして、通院する際にも、母に仕事を休んで貰わなくても、一人で病院へ行く手段を見つけた。それは、富岡市が令和三年から始めた「愛タク」だ。交通空白地域や高齢者の移動のサポートを主とした事業で、スマートフォンから専用のアプリで予約ができ、富岡市民であれば一律一〇〇円で利用ができる。バス停も私の自宅から一〇〇メートルほどの場所にあり、四〇〇箇所以上にバス停があるので、市内の移動が格段に便利になった。私は今、愛タクのおかげで、自分で通院することができ、本当に助かっている。

租税教室で、税金のしくみや必要性、使用用途などを学び、改めて今の私の生活は、税金に支えられていると、強く実感した。私は、税金を使ったさまざまなしくみの中で、今日安心し、健康を保つことができている。

だが、こんなにも税金の恩恵を受けているのに、私はまだ学生で、税金を払う場面といえば消費税くらいであり、自分の稼いだお金でもない。汗を流して働いている方々が納めた税金を使わせてもらっていることを忘れてはならないし、大切に使わなければならない。そして、今まで私たちの分まで支えて下さっていた高齢者の方々に代わって、今度は私たちが税金を納めて社会を支えていく番だ。若い世代が税に対し正しい知識を持ち、理解を深め、感謝の気持ちを持って納税することが、これからの日本を成長させていくのだと思う。私もこの先、社会の一員として納税の義務をしっかりと果たしていきたい。

税金は命の恩人

学校法人共栄学園春日部共栄中学校３年　　清水　結実

世界一の長寿国である日本。

日本人の寿命が延びた理由の一つに医療技術の進歩や、医療制度が大きく関係している。日本の医療保険制度は、誰でも平等に医療を受けることができる優れた特徴があり、この制度が長寿に貢献していることに違いない。

制度の財源は「税金」という仕組みだ。もし税金で賄うことができず、全てが有料だとしたら、医療を受けることを諦めてしまう人がいるかもしれない。

私の祖母は、この制度に助けられた一人である。

心臓の悪い祖母は度々発作を起こし、一時的に意識を失ってしまうこともあった。薬の治療が難しくなり、放っておけば死んでしまうかもしれない。医師から提案されたのはペースメーカーを入れる手術だ。ペースメーカーとは、五百円位の精密機械を鎖骨の下に埋め込むのだ。それを行えば心臓の働きを助けてくれて発作はなくなる。

祖母は仕事で忙しい母に代わり、家事や私の面倒を見てくれていた。働き者で料理の上手な祖母が台所に立つことさえやっとになっていた。

人の噂で、ペースメーカーの手術には、一度に莫大なお金がかかるらしいと、不安になる情報ばかりが祖母の耳に入っていたのだ。手術とペースメーカーの高額さを心配してか「私はもう八十過ぎたしね、みんなに迷惑かけても…」と静かに笑った。

次の診療で、ペースメーカーの手術について話しを聞いた。現在の医療保険制度では、高額な医療費がかかる際、高額医療費制度があり支払いの負担が軽減されているようだ。これには「税金」が使われており、患者側に大きな支払いが行かないようになっている。説明を聞いた祖母は、「あと何年生きられるか分からないけど、もう少しみんなといたい」と言い手術を決意した。

命は平等である。もし、この制度が無く、高額だからと諦め、消えていった命があったとしたらとても悲しくなる。

祖母は三年後亡くなってしまったが、日本の高度な医療と、高額医療制度のおかげでペースメーカーを入れたことにより、私の中学受験を見守ってくれ合格を喜ぶ時間を共にできたことに感謝したい。

医療費は治療や手術を受ける人たちにとっての強みである。高額な医療費だからとか、年だからではなく、医療費を使い今後どう生きていくかを考え、自分の大切な人と少しでも長く過ごせるよう助け合いの「税金」を使ってほしい。

税金は、安心と笑顔を取り戻す私たちの強い味方と言うことをたくさんの人に知ってほしい。近い将来、今度は私たちが担い手となり、知らない誰かを支えていくであろう。

一人一人の納税が人を救う

伊奈町立小針中学校３年　　野﨑　妃菜

税金についてあまり深く考えたことがなかったが、小学校五年生の時に「税に関するハガキコンクール」に挑戦し、税金のあり方について絵で表現をした。コンクールで大きな賞をとることができ、改めて税金について考えるきっかけとなった。

私の暮らす日常は税金が多く関わっており、学校・施設・公園・道路・病院・義務教育期間に使用する教科書・机・イス・医療費など様々な物が税金と深く関係があり、自分達の生活を支えているということが分かった。それは、国民が納税をすることで人々を助け、また、自分も助けられているというサイクルであることが理解できた。あたり前すぎる日常であるため気づきにくいが、税金によって生活が成り立っているということを忘れてはいけないと感じた。

私の祖母は去年病気で他界した。私が産まれる何十年も前から腎臓を悪くして、約三十二年間、人工透析という治療を行っていた。病気は腎臓だけでなく、心臓や腸、血管など様々な疾患を持ち、その度に入院、手術を送り病院での生活を送っていた。退院後も継続した通院を要するために、国や県、町のサービスを利用していた。母は看護師なので、私は祖母の治療方針や予後についての話しを聞かされていた。

人工透析にかかる費用は月約四十万円程かかる。年間にすると四百八十万円であり、祖母は三十二年間で計一億五千三百六十万円を必要としていた計算となる。身体障害者手帳一級保持者であるので、月一万円の医療費の支払いで、国の最先端治療を受けられていたこととなる。税金のおかげで祖母は命を繋いでもらえていた。

状態が悪くなり入院したあの日、救急車を使って、救急隊員の方々に安全に搬送して頂いた。病院では、医師や看護師の方々の懸命な力で命を繋いで頂けた。感謝でいっぱいである。納税義務のある国民の力により治療を受けることができ、病気の祖母と十四年間を暮らすことができた現実がある。

人は、納税という義務の大切さを十分に理解し、正しい使い道で人々が助けられているという意識を強く持つべきである。

今回私は、祖母と暮らし様々な場面を見たり、母から色々な話しを聞くことで、税金のありがたみを知ることができた。人を思いやる気持ちを強く持ち、社会貢献のためにきちんと義務を守っていこうと思った。将来しっかりと納税できる様に、自分の目標である看護師を目指して努力していきたいと思った。看護師として働きながら命を助け、納税することで命を繋ぐ力になれる様に、今、自分にできることを精一杯頑張っていこうと決心した。

未来への誓い

神川町立神川中学校２年　　宮下　悠我

私は、産まれてすぐにＮＩＣＵ、いわゆる新生児集中治療室に入院したそうです。

予定よりも早く産まれてしまい、体重も少なく、すぐに入院が必要だった為です。また、肺に水が入っている疑いがあり、黄疸も出ていた為、しばらく集中的な治療が必要と判断されたそうです。

その時の写真を両親が残してくれており、少し大きくなってから見せてくれました。そこには、保育器の中で手の甲に点滴の針を刺した私が写っていました。また、周りには見たことのない医療機器がたくさん並んでいて、そこに入院するという事の深刻さを伝えていました。

これは最近になって聞いた話ですが、私が必ず助かるという保証がない中、両親は何も手に付かない状況だったそうです。また、母自身も私を産む前の数か月間、産科に入院していたため、その時の精神的な負担は相当なものだったようです。

その後、機会があり医療について調べていた時、ＮＩＣＵについての記事が目に留まりました。以前両親から聞いた私の話を思い出し、詳しく読み進めると、新生児医療の技術はかなり高度で、そのための投資も高額であることが分かりました。また、私の母のように出産前から入院し、その後、子供がＮＩＣＵに入院した場合、掛かる費用はかなり高額になる事を知りました。

私はその事実を知り、私が産まれた当時、両親には精神的な負担と同時に、かなりの経済的な負担があったのだと考えました。気になった私は、単刀直入にその時に掛かった費用について聞いてみました。すると、意外なことに入院や治療に掛かった費用は、自治体の助成制度や医療保険などによって大半が支給され、自己負担はさほど多くなかったという事でした。そして、その費用は税金によって支えられていることを教わりました。さらに、産まれてから現在まで私が病院にかかった際の医療費は、自治体の「こども医療費支給事業」により全額が支給されていることを知りました。

今までも学校の授業などで、様々な種類の税金が社会の根底を支えていることを学んできましたが、産まれてすぐに消えかけた自分の命が、多くの人たちが納める税金によって繋がれたことを知り、私は改めて税金のありがたさと大切さを実感しました。

私は将来、職業として医療の現場に携わることを目指しています。医療は税金で支えられている重要な社会保障制度の一つであることを、私は自分の経験を通して学ぶことが出来ました。今の私はまだ、税金に助けてもらう事ばかりですが、未来の私は、苦しんでいる人を助ける事で社会に貢献し、納税を通して世の中に恩返しをすることを誓います。

社会への募金

新潟市立横越中学校３年　　茅原　穂ノ花

母がセルフレジにお金を入れた。「レシートもらっといて。」といわれ、私はレジから一枚の長いレシートをぴっと取った。母に渡す際に少し見えて気になったのが「消費税」という文字だった。消費税は、ニュースなどで八％から十％に上がったということや、百円の商品には十円の消費税がかかるということしか聞いたことがなかった。百円均一の店で買い物をする時は、百円ではなく、百十円支払うのが当たり前になっていた。このような当たり前で身近にあったのが消費税である。しかし、なぜ払っているのか、何に使われているのかまでは考えたことがなかった。そこで私は資料やインターネットで、消費税などの税金がどのように使われているのか調べてみた。

すると税金は私たちの生活の様々なことに使われているのだと分かった。ゴミの処理や医療、教育などこの中のどれかでも欠けたら充実した生活が難しくなるものばかりだ。中でも私が一番気になったのが、災害からの復興だ。知っている災害の中で印象的なのは「東日本大震災」だが、私はこのときまだ三歳だった。当時のことは覚えていないのでニュースや親からの話を聞いて痛烈な思いだった。ニュースで毎年三月十一日になると当時を振り返る映像が流れる。震災後の町の様子と震災前の町の様子を比べると明らかに変わり果てていた。しかし、ニュースキャスターが現地を取材に行っている映像をみると、最近は元のように戻っているところも多くなっているようだった。絶望的だった景色から希望の見える美しい景色に戻るところをみて人類の凄さに感動したという覚えがある。そんな被災地の復興にも税金が関わっていることを知ると、税金の大切さが身に染みた。東日本大震災の復興に使用するお金を集めるために、通常の所得税に上乗せする「復興特別所得税」というものがある。上乗せすると聞くと、払う税金が増えて悪いイメージを持つかもしれないが、その上乗せされた税金が、住む家を震災によってなくして困っている人や破壊された日本の景色を取り戻すために使われると思うと惜しくないのではないか。それが遠くから被災地へ送る立派なエールになることも間違いない。

税金を払うということは、人のためにもなる「社会への募金」のようなものに感じた。人は支え合って生きていく生き物であり、支え合うことによって成長できる。人のために払った税金が税金によって自分に返ってくる。人は税金によって繋がっていると思った。気付かれにくいが正しい事実だ。私も、税金によって与えられた教育を感謝しながら受けたい。税金に対して正しい知識を身につけ、人に伝えたい。そうして人との繋がりを増やすきっかけとなるのが税金であってほしい。

父を支えた税金

岡谷市立岡谷東部中学校３年　　松川　怜菜

私の父は公立小学校の教師だ。毎日忙しそうにしている。ある日、父が救急車で運ばれたという知らせが勤務先の学校から入った。脚立にのぼって掲示物を外す作業中に、足を踏み外して床に転がり落ちたのだそうだ。

母と私は急いで病院に向かった。速足で部屋に入ると、検査待ちの父がベッドの上に横たわっていた。

「びっくりした？ごめん、大丈夫だから。」

と父は私たちに向かって言った。父が喋れていて、ホッとした。

レントゲンなどの検査を終えた結果は打撲で、幸い骨折などの大きなケガは無かった。

病院の待合室には、父の勤務校の校長先生や他の先生方がいらしていた。更に警察の方が二人お見えになり、校長先生と父から事情をくわしく聞いていた。何だか大事になっていると思い、後で事情を聞いたら「労働災害」の手続きのためだったそうだ。

労働災害とは、簡単に言うと仕事中に病気やケガをすることだ。仕事中の事なので、個人は一円も支払わなくても良いのだそうだ。父も、病院の窓口で「支払いはいりません。」と言われたそうだ。

気になって調べてみると、会社の場合は会社が労災保険に加入するので、個人は一円も支払う必要が無く、会社が全額支払うのだそうだ。

父は公務員なのでどこからお金が出ているのかなと思い、これも調べてみた。すると、地方公務員災害補償基金というウェブページを見つけた。管轄は総務省とあった。国の役所が行っているという事は、公的な予算があるということだ。つまり父のケガの検査や診察にかかった費用は、税金から払われたということだ。

このことを父に話すと、

「よく調べたなぁ。さすが中学生。」

と言われた。

「更に言うとね、怜菜が病気やケガで病院にかかる時も税金は使われているんだよ。受付で保険証を出すでしょ。あれが無いと、一回医者にかかるとざっと一万円ぐらい支払うことになるんだ。保険証があると、二千円から四千円ぐらいかな。あれも労災と似たような仕組みだね。」

そうなのか。私にはまだ知らないことがたくさんあるなと感じた。

一生懸命働いてもらう給料から税金が引かれたり、買い物をするたびに消費税を払ったりするのは正直嬉しくはない。でも、働く人を守ったりサポートしたりする事に有効に使われることを知って、税金はしっかり納めなければいけないという事がわかった。これからも、無駄な所に税金を使わず、国民が安心するような使い方をしていってほしい。

時給千円

鎌ヶ谷市立第三中学校３年　　岡　柚那

　ある日、母がケーキを買ってくれると言うので、喜んで母と一緒に近所のケーキ屋へ行った。ショーケースに並ぶ色とりどりの美味しそうなケーキ。どれにしようか迷いながら、好きなケーキを選んだ。店員さんが、ケーキを白い箱に詰め、レジで会計を始めた時、近くに貼ってあった求人の張り紙に目が止まった。時給千円。
「そっか。一時間頑張ったら、千円も貰えるんだ。」
そんな言葉が、私の頭に浮かんだ。
　会計が終わり、家に帰る道すがら、私は母にさっき見た求人の話をした。
「あのケーキ屋さん、時給千円なんだって。一日八時間働いたら、八千円。一ヶ月二十日間働いたら一六万円だよ。一六万円も稼げたら、一人で生活出来ちゃいそう。」
一六万円なんて大金は、自分の財布の中身を考えると、私には簡単に想像が出来なかった。だから、凄い大金を稼ぐことができると、なんだか嬉しくなって母に伝えたのだ。そんな私の話を聞いて、
「一六万円稼いでも、実際に一六万円貰えるわけではないよ。税金取られるから。」
と、母は少し笑いながら答えた。
そうだった。「手取り」という言葉があるように、稼いだ金額と手に入る金額が違うことを、私は完全に忘れていた。
「せっかく頑張って働いても、税金を取られるなんて嫌だなあ。」
ため息まじりに、私は呟いた。
「でも、税金は色々な所で使われていて、特に子供のいる人は、すごく身近に税金の恩恵を感じているんじゃない？」
母はそう言いながら、兄が手術した時、病院の付き添いで仕事を十日も休まないといけなくなって収入が減ってしまい、手術と入院で費用がどのくらいかかるのか不安だったけれど、税金のおかげで医療費が安く済んで、とても助かった話などをしてくれた。
　確かに考えてみれば、道路の整備や水道、私達が遊んでいる公園の整備にも税金が使われているし、警察や消防、そして医療や介護にも使われている。私が中学校で使っているパソコン、理科の実験道具、部活で使っている道具だって税金なのだ。国税庁のホームページを見たら、令和二年度には中学生一人当たり約百十二万円の税金が教育に使われていた。私は、税金の恩恵を知らず知らずのうちに多分に受けていた。
　今までは、税金なんて「取られるだけで厄介な物」というイメージしかなかった。しかし、私達が、当たり前のように安心して暮らしていられるのは、税金があるからだ。今はまだ中学生だから、消費税ぐらいしか税金を払えないが、次からは、私も気持ちよく税金を払おう。私のために、そしてみんなのために。

税はライフセーバー

千葉市立幕張西中学校３年　　田中　日和

「火事だ！」父の大きな叫び声で私たちは飛び起きた。二年前の冬。朝七時頃のことだった。どうやら同じ集合住宅の下の家が火事になっていたようだ。気がつくと我が家のリビングにまで煙が充満していた。父は消火活動を手伝うため、煙の立ち込める階段を降りていった。母と私と妹は階段から避難することは危険と判断し、三人でベランダの避難用パネルを突き破った。そして隣の人に助けを求め、隣の階段から避難させてもらった。無事逃げることができて安堵した途端、父のことが心配になった。何度か爆発音が聞こえていたからだ。火事に気づいて約 15 分がたった頃、消防車が到着した。それと同時に父の姿が見えた、父は消火器三本を使って初期消火を行っていたのだ。父は煙を吸って少し喉を痛めていたが、無事で安心した。気づけば消防車七台、救急車二台、パトカー二台が家の前に止まっていた。しばらくして火は無事、鎮火した。火元の家以外に被害が及ぶことはなく、その家に住んでいた老夫婦も救急車で病院に運ばれていった。

その日の夜、ふと窓の外を見るとまた消防車が一台止まっていた。完全に火が鎮火したかどうかを確認しに来ていたのだ。そしてその次の日も、さらに一週間後も、消防車がパトロールしに来てくれていた。そこまで徹底して点検してくれていると知って安心した。父はと言うと、喉を痛めていたため、翌日は仕事を休んで病院に行った。結局、父は二日間仕事を休んだ。

その後消防署によって、父は消火活動に協力した「民間協力者」として正式に認定され、負傷の治療費と、仕事を休んだ日数分の給料が補償されることになった。その全てが税金で賄われているということを初めて知った。思えば、消防車が消火活動をしてくれたのも、何度も見回りに来てくれたのも全て税金で賄われているのだ。もし、これが税金ではなく個人で支払わなければならない有料サービスだったとしたら、お金がない人は消防車や救急車を呼べないということになる。何かがあった時にすぐ一一〇番、一一九番を押せるのは、税金のおかげなのだ。そう思うといかに税金が、私たちの生活の安全や安心に繋がっているかが分かり、感謝の気持ちでいっぱいになった。

税金があるからこそ、私たちは安心して暮らすことができている。私もいつか大人になった時、この時抱いた感謝の気持ちを忘れずに税金をしっかり納めたいと思う。税金は色んな人の命と安全を守るライフセーバーなのだから。

家族を支える税金

荒川区立第三中学校３年　　近藤　美羽

私の家は母子家庭だ。母は、私が小学生の頃からずっと一人で私と二人の兄弟を育ててきてくれている。母子家庭になり、四人で暮らすようになってからは、環境の変化を感じることは多くあったが、日々の生活に不満を抱いたり不自由だと感じたりすることは一切なかった。それは中学校に入ってからも同じだった。

中学生になってからは、援助についての書類を目にすることが多くなり、自分の家が母子家庭だから税金からの援助を頂けているということを知っていたが、それがどういった内容なのかまでは知らなかった。なので、この作文を書くことをきっかけに、私たちが受けているひとり親を支援する制度について母に聞いてみることにした。

すると、同じ中学校に通う私と中学一年生の弟は、「就学援助制度」という手当によって給食費などの免除、都内の私立高校に通う高校二年生の兄は、「私立高等学校等奨学給付金事業」という制度で奨学金の給付を受けていることがわかった。私の家族は、就学に要する様々な費用を助成してくれる制度に助けられていて私の知らないところで、私たち家族の生活は支えられていたのだ。そのうえ、私が日々の生活に不満や不自由を感じなかったのは、「就学援助制度」によって最大限の支援をもらっていたからだった。

私はこのことを知ってから、税金を払っている全ての人たちや、制度を整えてくださっている方々のおかげで何不自由なく暮らすことができていることを感じ、感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。また、それと同時に、もっと早く自分の生活を支えてくれている制度について知ろうとするべきだったと後悔した。

私が今、好きなことを思う存分やらせてもらっていることは、決して当たり前ではなく、母をはじめとする身近な人はもちろん、遠く離れた色々な人の支えによって成立しているものなのだということを、税金の使われ方を考えることを通して知ることができた。

私は、自分や兄弟の学業や生活を支えてくれている人たちの思いに応えることができるよう、今後自分が税金を納める立場になったときには、私が納めた税金が困っている誰かの支えとなることを願って、少しずつ恩返しをしていきたいと思う。

今日も私は世界の笑顔を守るヒーロー

和洋学園和洋九段女子中学校３年　　横野　陽咲

小学二年生の時、総合の授業でケニアに住んでいる六歳の男の子の動画を見た。その子は、三歳の頃から重い病気を患っているが治療をするお金がなく、自分で毎日必死に働いてお金を集めているという動画だった。その子は、動画の最後に悲しそうな顔で「治療がまともにできていないから、自分がいつこの世から消えるかわからない。」と言っていた。私はその動画で初めて子どもが働かないと生きていけない国があるのだと知り、衝撃を受けた。

そこから、私は「世界中の子どもが笑顔で生きてほしい」という思いを持ち、毎年一、二回ドナルドマクドナルドハウスのボランティアをするようになった。ドナルドマクドナルドハウスは重い病気の子どもとその家族が利用できる滞在施設で、そこで病気を患っている子どもの家族と実際にお話をして更に私の思いは強くなり、他のボランティアにも挑戦してみたいと思うようになった。しかし、新型コロナの緊急事態宣言の影響で私の生活は縛られ、ボランティアはできなくなった。

そこから約三年、中学三年生になった私は小学生の時の思いを秘めながらＳＤＧｓの活動をするようになった。学校でＳＤＧｓの講習を設けて発表したり、ＳＤＧｓの活動をしている企業に訪問をしてお話を聞いたり、私は本気で世界と向き合うようになった。しかし、まだ中学生の私の力ではどんなに頑張っても、全てにお金の話がからみ込んでなかなか次の大きなステップに踏み出せなかった。

そんなある日、二〇三〇年までに消費税が十五％に引き上がる可能性があるというニュースを見た。私が生まれた時は消費税は五％だったのに、今は十％。まだアルバイトができない私にとってお小遣いで買った物に消費税が十％つくのはかなり重く、今まで何回も消費税があることを恨んだ。そのニュースをきっかけに私は苛立ちを覚えながらも、消費税が何に使われているのかを調べてみた。国の消費税は主に医療や少子化対策の費用にあてたり、一部は政府開発援助という苦しんでいる人たちが多くいる国を助けるために、病院をつくったり、病院で使う薬や注射器などを送るための活動に使われているそうだ。使い道は国内だけだと思い込んでいたが、実際は消費税は私が願っている「世界中の子どもが笑顔で生きてほしい」という思いに関係していたのだ。次のステップを踏み出す以前に、ＳＤＧｓの活動をしているのにも関わらず、今まで苛立ちながら消費税を払っていた自分が恥ずかしくなった。

私は子ども、大人関係なく誰もが平等に社会で輝けると思っている。これを読んでいるあなたも、きっと私のように一度は税金があることに腹が立ったことがあるだろう。しかし、私達が払っている税金は国内や世界を支えていくために必要不可欠だ。つまり、誰でも地球を救うヒーローになれるのだ。

納税による幸せな社会づくり

新宿区立牛込第三中学校３年　　道明　孝太郎

この夏、十二歳の誕生日を前にして弟が天国へ旅立った。小学六年生だった。私と弟は、弟が東日本大震災の年に生まれてからの四千五百三十九日を一緒に過ごした。

弟は先天性の遺伝子病により、身体障害と知的障害ともに一級相当で重度な障害を患い生まれてきた。飲食は出来ず、水を飲むことすら出来なかった。三歳からお腹に開けた穴にチューブを通して、直接胃に食べ物を流し込む胃ろうという方法で栄養を取った。言葉も話せず、歩くことも出来ずに一人で座るのがせいぜいで家族全員で弟を介護した。しかし、重度障害者ではあったが、弟は家族と共に笑顔が絶えない幸せな生活を送ることが出来た。それは国や自治体が病院や学校をはじめ様々な公共サービスを提供、支援してくれたからだ。私の両親は弟を支えてくれる全ての人々に日々感謝の言葉を口にしていた。弟の葬儀には沢山の人が弔問に訪れ、弟のみならず私たち家族が多くの人々に支えられてきたことを改めて知り、私は両親の感謝の言葉の意味をようやく理解することが出来た。

子どもの医療費は法律や各地方自治体の医療助成金制度により自己負担率が決められているが、弟の医療費は薬代を含めて無料だった。おむつや車椅子などの補装具も障害者等級で差はあるものの、国や自治体が多くの費用を負担してくれていた。また、重度障害者であっても、平等に教育の機会も与えてもらい、弟は地元の特別支援学校で学び、幸せで充実した学校生活も送ることが出来た。複数の病院に通い、通院が難しい時には、訪問看護ステーションの支援サービスも受けることが出来た。心身障害児向けの総合療育センターでは、私も所属していた野球部を途中で辞めて、弟の歩行リハビリに付き添った。

国や自治体は、障害者でも安心して文化的な生活を送るための様々な公共サービスを提供してくれている。これらのサービスには、実際には多くの費用がかかっており、その費用は税金から支払われている。みんなが出し合い負担しているのだ。つまり、税金をきちんと納めることは自分や周りの大切な人達を守ることであり、みんなが健康で幸せな生活を送るためには税金が必要であることに改めて気づいた。国や自治体は、治らぬ重度障害の弟であっても見捨てずに、幸せに生活できる環境を最期まで弟へ提供し続けてくれた。それはその後ろで、きちんと納税するみんなの存在があり、また、その税金を幸せな社会づくりに役立て、奉仕する人々がいるからだということを弟は私に教えてくれたのだ。

弟はいなくなってしまったけれど、弟を支えてくれた方々への感謝の気持ちを私は決して忘れはしない。顔を上げて前に進み、弟の分も生きて、将来きちんと働き、納税することで、みんなが幸せに安心して暮らせる豊かな社会づくりに貢献する事で弟に代わり感謝の気持ちをみなさんへ伝えていきたい。

「日本とイギリスを比べて」

学校法人洗足学園中学校

最近の我が家では、私を含めた姉妹・母の服のサイズがほぼ同じで、互いの服を貸し借りしあう日々だ。「これは私の」「いや私のところに入ってた」こんな会話を何回しているか分からない。そんな中、私は夏休みに二週間という短い期間ながらイギリスに研修に行ってきた。日本との文化の違いに驚く日々を送りながら、私はイギリスでは子供の衣料品には課税しないという話を耳にし、とても驚いた。そういえば毎日のようにお土産に悩みながらイギリスの課税制度については興味さえ持っていなかったことを思い出し、イギリスと日本の課税制度について調べてみることにした。

イギリスの消費税は二〇パーセント。ただし、生活に不可欠なものには課税されていない。例えばイギリスの代名詞と言っても過言ではない紅茶はもちろん、一緒に食べるミルクやビスケットは課税されていない。また、知識に課税しないという姿勢のイギリスは新聞や本には課税しないそうだ。同じように、次世代を担う子どもたちを育てるために不可欠である子供服は課税されないが、大人の服は課税されている、と考えることができるかもしれない。このように課税されているもの、されていないもの、その理由を考えていくと、イギリスの課税制度は理にかなっているな、と感じた。イギリス国民にとってどうしても削れないもの、将来の必要な人材を育てるために必要なものには課税せず、それ以外のものには多くても一定の税を課税する。そういう考え方はとてもわかりやすいし、国民にも理解しやすくて素敵だなと思った。

続いて、日本の税制度についても調べてみた。日本では二〇一九年には一〇パーセントとなって軽減税率も導入された。軽減税率制度では、酒類・外食を除く飲食料品と定期購読契約が締結された週二回以上発行される新聞を対象に消費税が八パーセントとなっている。

ここまで二つの国の違いを調べてみて、両国の考え方は似ているな、と感じた。新聞や食物について軽減税率を採用する点など、日本の考え方はイギリスにも通じるような気がする。私たち国民は目に見えて負担が分かる消費税によく文句を言うし、それはイギリスでも多かれ少なかれ同じなのだと思う。だが、今回はイギリスと日本についてしか調べていないものの、政府は国民の生活を考えて課税を考えてくれていて、それは日本だけでなく世界にも共通するところがあるということを今回改めて知り、学ぶことができた。ものを買うときに、今後は消費税のマイナスな面だけ考えるのではなく課税する側や課税目的も頭の隅に置きながら生活していきたいと思う。

未来への投資

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校付属中学校３年　　大下　彩音

今年、私の学校では「マレーシア国際共同課題研究」についての説明会が実施された。このプロジェクトでは、マレーシアの大学生と一緒に共同研究を行うことで、研究スキルの向上を目指す。また、実際に七月と一月にマレーシアを訪れ、現地交流を通して英語力の育成も図る。

説明会では、応募条件や具体的にどのような活動を行うのかに加え、実際に訪れる際の費用についての説明もあった。三泊五日であることもあり、二回訪れる分合計で本来は四十万円以上かかる、参加費がとても高いプロジェクトだったらしい。しかし、「将来の国際的な科学技術人材の育成」を図っているこのプロジェクトは、ＳＳＨ重点枠に認定されていることで行えるものであり、文部科学省から予算支援を得ることが出来たそうだ。約五百万円をいう税金による高額支援により、費用を半分以下の約十六万円に抑えて参加できる、という説明を受け私は驚嘆した。税金がこのような使われ方をしていることを初めて知ったからだ。

私は今まで「税金」についてあまり良い印象を持っていなかった。買い物をするたびに「消費税」を払い、父の給料からは「所得税」や「住民税」が引かれ、車を所有しているだけで「自動車税」がかかるなど、何をするにしても税金がまとわりついてきてうんざりしていた。また、納めた税金が具体的にどのような用途に使われているのか調べたことがなく、税金の存在意義について考えたことがなかった。

「マレーシア国際共同課題研究」の件で気になって調べてみると、税金は健康や生活を守る「社会保障費」や道路や住宅などを整備する「公共事業費」など、私たちの生活をより良くするために使われていることを知った。そして今回のように、教育や科学技術の研究のための「文教及び科学振興費」としても高額な税金が使われていることを初めて知った。未来を担う学生への支援としても使われている税金。それは、日本の「未来への投資」と同じことなのではないか。

今回調べてみて、税金には様々な用途があることが分かった。その中でも特に「未来への投資」として使われていることに感銘を受けた。私たち学生は「投資」に報いるべく、まずは税金についてもっと学ぶべきだと思う。そして、将来大人になったときにしっかり納税し、「未来への投資」のたすきをつなぐ義務があると思う。私は今回調べたことで、充実した生活を送れる源になっている税金に、感謝の念を抱いている。たすきが途切れないように、今の私に出来ることを精一杯やって税金について学びを深めていきたい。そして、税金の存在意義について、積極的に発信していけるようになりたい。

美しい山を守るために

甲府市立南西中学校２年　　高橋　賢誠

「お父さん、あと少しだから頑張って」

これは去年、父と二人で北岳へ登山に行った時の、帰り道での会話だ。僕と父は登山が好きで、毎年、たくさんの山に登っている。そして、北岳は二回目なので体力的な心配はしていなかったのだが、この日は、父はいつも以上に疲れていて、まるで牛歩のようでなかなか進まない。帰りのバスの時間がせまっていたので、なんとか励まして無事に下山した。

こんなにも疲労困憊の状況で、よく怪我もせず帰ってこられたな、と振り返った時、それは、登山道の段差がある所には階段が作られていたり、急な所には梯子がかけられていて、また、道に迷わないようにピンク色のテープが木につけられ、分岐地点には標識が立てられているなど、人の手で整備されているからだと気がついた。

このような登山道は誰が管理しているのだろうと疑問に思い調べてみると、場所によって異なるが、環境省や林野庁、都道府県や市町村が関わっているということが分かった。つまり、登山道の整備には税金が使われているのだ。

しかし、税金だけではまかなえず、民間の山小屋の人やボランティアが担っていることもあるそうだ。また、一部の山では、協力金を募っているところもある。例えば、南アルプスでは、中学生以上は三百円。これは去年、北岳へ行った時に僕も支払った。北アルプスでは一口五百円。各山小屋に協力金収受箱が設置されているそうだ。秋に燕岳に登る予定があるので、お小遣いを持っていってしっかり協力したい。富士山は任意ではあるが入山料を徴収している。今後は税金として義務化が検討されているが、登山者全員が納税できるように、是非、早めに実現されることを願っている。滋賀県米原市では、大雨で登山道が崩落した伊吹山の復興のために、ふるさと納税で支援金を募っているそうだ。二千円以上で返礼品はなし。これは、登山道の早い回復を願う人の思いが明確に届く、とても良い方法だと思う。

これらの税金や協力金は環境保全や登山道の整備に使われるのだが、どの山も同じように整備されているわけではないのだと、色々な山に登って実感している。例えば、富士山、北岳、白馬岳など人気のある山は整備がいき届き、お手洗いや水場まであり、とてもありがたい。一方で、あまり有名でない山は、それらがないことがほとんどで、少し危険な箇所があったりもした。

中学生の僕にできることは協力金を払うことだ。しかし、協力金やボランティアに頼ることなく、税金でまかなえるようになることが一番なのだ。だから、将来、大人になり働くようになったら、きちんと納税をして少しでも貢献したいと思う。僕の大好きな山が、いつまでも美しく、安全であるように。

「国民一人一人」の豊かな人生のために

滑川市立滑川中学校２年　　開田　結衣

「この子にも色々な人と関わらせたい、教育を受けさせたい。」
という、ある母親の訴えから、祖母が理事長を務めるこども園の奮闘は始まった。この訴えは、園児の妹が医療的ケア児である母親によるものだ。

医療的ケア児とは、様々な医療機器を使用してケアを受ける児童のことである。日本の小児医療は世界でもトップレベルだが、支援体制はそうではない。そのため、救える子供の命は他の国に比べて多いが、その分、重い障害をもって生まれた子供は、保育や教育を十分に受けられていないという課題を抱える。

そのような中、医療的ケア児の健やかな成長と、その家族を支えることを目的とした「医療的ケア児支援法」が令和三年に制定された。同時期に、祖母や園の職員が医療的ケア児を受け入れるために様々な準備を行うことになった。

しかし、医療的ケア児を園で受け入れた実績の少ない私の県では、医療的ケア児についての知識が豊富とは言い難く園で受け入れることに抵抗が大きかった。医療的ケア児を受け入れるには、吸引器や酸素吸入器、人工呼吸器等の施設的な環境整備が必須だ。また、元々対象児をケアしていた訪問看護師からアドバイスを受けたり、新たな専属看護師を雇ったりする人的な環境整備も重要な要素だ。

さらに、祖母は医療的ケア児の保護者にも働く場を提供したいと考え、自分の園で保育士や保育補助として雇い、我が子のそばで安心して働けるようにすることで、家族そのものを支えようと力を尽くした。

前例があまりないことを実行するのは、とても大変なことだったと思う。私は祖母に、「たくさんの資金が必要だったでしょう？と尋ねると、祖母は、

「それもこれも国や県、市の税金、つまり皆さんのおかげだよ。」
と話したのだ。初めは理解できなかったが、これらの医療機器や人件費の全てが、国や県、市からの補助金、つまり、国民が支払う税によって賄われているということを知った。税の徴収から主な使われ方まで学校の授業で習ってきたが、正直、中学生の私にとって関心の薄いものだった。しかし、祖母の話を聞いて考えが変わった。国民が納める税のおかげで、常に医療的なケアが必要な子供が他の園児と関わりながら充実した生活を送ることができる。そして、その家族のサポートにも繋がる。様々な用途に使われる税は、たくさんの人の生活を支えるだけでなく、社会的に弱い立場にある人に寄り添い、一人一人のニーズに合わせて生活を支えるために、重要な役割を果たしているということに気付いた。

税とは、「国民全体」はもちろん「国民一人一人」の豊かな人生のためにあるものだということを心に留めて、関心を高めていきたい。

一人一人の税が大きな助けに

津幡町立津幡中学校３年　　北口　美羽

「税金って高い。」「何のためにあるの。」私は日常生活でよくこう思っていた。税には、私たちに身近な消費税の他にも、所得税、法人税など、約五十種類もあるそうだ。物を買ったとき、収入を得たとき、家や車を所有しているとき、様々な場合でたくさんの税金を払わなければならない。だから、税金に対してよい印象は持てなかった。しかし、ある出来事を通して私の考えはがらりと変わった。

それは、今年の夏、私の住む地域が豪雨による災害に遭ったからだ。水害によって、車は壊れ、畳は流され、家の中のドアは閉まらなくなってしまったし、たくさんのものを捨てることになった。とても心配だった。

「これから大丈夫なのかな。」「これからどうしよう。」そんな思いばかりが頭の中にあった。そんな中、母が役場から、一枚の書類を持ってかえってきた。書類には「罹災証明書」と大きく書かれていた。罹災証明書？被災者生活再建支援金？人生で初めて聞いた言葉だった。そこで、私は詳しく調べてみた。罹災証明書とは、自然災害にあったとき、申請に基づいて、被害の程度を判定し、証明するものだ。つまり、罹災証明書があることで、勤務先の助成金や支援金がもらえるのだ。また、被災者生活再建支援金とは、被災者生活再建支援法に基づいて各都道府県が出した基金のことだ。災害に備えて各都道府県は同じ口座に積立金を振り込んでいる。災害が起こったときにはこの口座から支援金支給されるそうだ。この積立金の中には税金も含まれているということに驚いた。こんなところにも税金があるのだと思った。しかし、今回は「何のためにあるの」なんて思わなかった。この税金が私たちを助けてくれた。これは「全国民がお互いに困ったときはみんなで助け合おう！」というシステムだ。全員が少しずつ払っている税金が大きな力となって人々を助けているのだと分かった。家の被害の程度によって貰える金額は変わってくる。私の家もこの被災者生活再建支援金によって少なからず支援されることを知って、とても安心したし、家族もほっとしていた。

今まで、税金は自分たちが払うものだという考えで、どこに使われているか、どのように使われているかという視点からはほとんど考えたことがなかった。しかし、今回の災害を通して、税金の重要さを実感することができた。水害にあったときは、とても不安で怖かった。しかし、のちに税金が私たちの助けになった。この使われ方は一例にすぎない。私が知らない税金の世界はまだまだ広いのだと思う。今、中学生の私が物を買うときに払っているお金も困っている人の助けの一端を担っているのかもしれない。これからは税金の意義を考えて、自分の意志で責任を持って、納税できる大人になりたい。

互いに支え合える社会へ

河津町立河津中学校２年　　高木　さち

私は一才三か月の時に川崎病を発症しました。高熱が五日以上続き、やっと熱が下がってほっとしていたら、発疹がでてきたようです。その母は特に心配はしておらず、念のため病院に受診してみたら、医師から今すぐ順天堂病院に行くように言われたそうです。また、

「もしかしたら、これから運動ができなくなるかもしれない。」

と言われ、母は泣きながら急いで病院に向かったそうです。そして私はそのまま緊急入院し治療を受けました。私は早く治療を受けられたため無事に症状が治まり、後遺症が残らなくてすみました。その後は運動制限もなく今も大好きなバスケをすることができています。しかし、母は今でもその時のことを思い出すと、胸が苦しくなると話していました。また、その時の入院費や治療費はとても高額で、領収書を見た母はとても驚いたと言っていました。しかし食事以外は全て税金が負担してくれて、改めて税金に心から感謝し、安心したと母は言っていました。そして私は、それから六年間通院し、再発することなく今も元気に過ごしています。

私はこの税について考える機会があったので、改めて幼い頃にあった出来事を聞き、初めて今私が元気に過ごせているのは税金のおかげで、たくさんの人に支えられている、ということを実感しました。だから私は、今当たり前のように健康でいれることに感謝し、その気持ちを忘れないようにしたいと思いました。また学校に通い、勉強できることや、地域の環境整備や交通整備など、私たちの身の回りのさまざまなものに税金が使われていることに気づきました。

税を納めることは「お金を取られてしまう」と、マイナスに考えている人が多いかもしれません。しかし、自分が払った税金で誰かの命を救ったり、誰かのために役立つことができます、そしてたくさんの人に、安心や安全を届けることができます。だから私は「税を納める」ということは「お金を取られてしまう」と思うのではなく、「誰かを救うことができる」という価値観に変えていければいいなと思います。そのためには「いつも税金のおかげで生活できている」、「税金のおかげで救える命がある」ということを知ってもらう必要があると思います。私たちは一人では生きていけません．だからこそみんなが互いに支え合える社会を作っていかなければいけません。だから私はたくさんの人に税金の大切さを伝えていきたいです。そして自分自身も税金に感謝しながら、しっかり納税の義務を果たせる大人になりたいと思います。

誇り

名古屋市立冨士中学校３年　　田栗　未莉音

「税金を払うことは誇りだよ」
私の何気ない質問に、父は真面目な顔でそう答えた。その時は、私と父で脱税に関するテレビ番組を見ていて、それについて私が父に聞いたのだ。税を払うとはどういうことか、と。

テレビの中の彼らは、家の床、クローゼットの中、さらには階段の下にまで金を隠し、知恵という知恵を振り絞って税から逃れようとしていた。脱税がばれて、とうとう警察に捕まる、となった彼らの姿は、悔しさや苦しさであふれている。何故？私の目には、その姿がどうにも不思議に見えてならない。私には、なぜ彼らがそうまでして、税から逃れたいのかがわからなかったのである。税が、税を払うことが、人にそれほど不利益を生むものか。まだ子供な私が払える税とは、消費税ほどしかない。これでも立派な納税者だとも思ったが、テレビの中の彼らはもっと重い税を払っているのだろう。彼らの気持ちを知るには、少しばかり経験が足りない。税を払うとはどういうことか。それを知るなら、彼らと同じ「納税者」に聞くのが一番だろう。気付けば私は父にその質問を投げていた。

そして、それに対する父の答えが「誇り」だった訳だが、その言葉の真意が、私にはわからなかった。誇り。どうにも抽象的なその言葉に、私はさらに頭を悩ませる。そんな私の様子を察してか、父は優しく教えてくれた。自分たちが払った税金は、自分たちも知らぬところで社会の役に立っているのだと。

「知ってる？学校の備品や教科書も、税金で作られているんだ。他にも、病院や公共サービスも税金から支払われているんだよ。」その一言で私は父の言った「誇り」の意味がわかった。税金とは、社会の土台なのだと。私たちが生活できているのは税金あってのことなのだと。その頃はまだ私も小さかったから、詳しいことはわからなかったが、社会をつくっている、よりよくしている税金を払うことは誇りだと言う父の気持ちにひどく納得したのを覚えている。

中学生になって、税に助けられている、というのを実感することが多くなった。自分たちが使えるこの水も、医療も、学校も、全て税金によるものだと思うと、感謝でいっぱいになる。私はまだ、自分でお金を稼ぐことはできない。社会のために税を払う、ということもできない。実際、脱税者の気持ちも少しは理解できるなと思ったのだ。自分のために稼いだお金が、他人のために消費され、減っていくなんて、いやだと思う気持ちも。それでも、私がこれから社会人になり、自分で税を払う日が来たら、そんなマイナスな気持ちは考えず、この税が社会のためになる、と誇りを持った納税者になりたい。

税金の大切さ

蒲郡市立中部中学校３年　　足立　萌

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

中学生になり、国語の教科書をテスト勉強の合間に読んでいた時のことです。ひと息つこうと教科書を閉じた時に、偶然目に飛び込んできたこの一節。私の税金への見方を一変させるほどの強い衝撃を与えたのでした。

買い物をするたびに支払う消費税。予想を上回る金額を目の前に「消費税なんてなくてもいいのに」と、私にとって消費税は取られるお金であり、「厄介な存在」でした。しかし、教科書に書かれたこのメッセージが、実感と共にその重要性を私に気づかせてくれました。

税金の使途として、私たち中学生にとって最も身近なものは、学校で使用される教育費だと思います。私は今年度で義務教育を修了しますが、その九年間の教育にかかる費用は一人当たり約八百八十五万円にものぼるそうです。これが何万人、何十万人という数になればその総額は膨大です。

さらに、税金は医療、介護、年金、公共施設など、私たちの生活に不可欠な様々な分野にも充てられています。私の弟は、生後一ヵ月でＲＳウイルスに感染し、二週間入院をしました。また、私自身も中学一年生の時に右膝を患い、現在も通院を続けています。生まれてから現在に至るまで多くの治療を受けてきましたが、両親が負担した金額は限られており、それを支えてくれたのは、国民全体が負担する税金でした。私が住む市では、高校生まで医療費が無料で、これもまた税金によるものです。これらの制度を知った時、今までお金に困ることなく治療を受けてこられたことに感謝すると共に、こんなにもお世話になっていた税金を「厄介な存在」と思っていた自分を恥ずかしく思いました。

これまでの自分自身の生活や経験を振り返ると、税金は社会生活を成り立たせる上で、不可欠なものだと改めて感じます。今ここにある素晴らしい生活環境は、当たり前のことではなく、税金によって支えられ、共に助け合って成り立っているのです。私が今できる納税は消費税だけかもしれませんが、それを通じて社会全体の発展に貢献することができると思うと、誇らしい気持ちになります。

税金がなければ、楽しい学校生活も安心した医療サービスも享受することは難しいでしょう。私の税金の見方も「払わなければならないもの」から「みんなの幸せのために貢献するもの」へ変わりました。これからも、税金が私たちの生活を多岐にわたって支えてくれていることを意識し、消費税を支払うことを通じて、社会に貢献していきたいと思います。そして、この恵まれた環境に感謝し、「税金のおかげ」という自覚を持って、日々の学びに全力で取り組んでいきたいと思います。

これまでの税金　これからの税金

高島市立湖西中学校３年　　梅澤　桜子

日本には、ありとあらゆる税金が存在する。それらを支払うのは、私達国民の義務だ。だが、歴史の授業を受けていると、「税は人々の重い負担であった。」「税によって人々は苦しめられていた。」という言葉を度々耳にする。今の時代、税金は国民にとってどんなものなのか。税金は長い歴史のなかでどう変化していったのか。

まず、江戸時代まではお金ではなく、年貢を納めていた。つまり、農民に負担がかかるのは明らかである。このような、身分による不公平が生まれていたのだ。また、重すぎる税の設定だ。収穫の三分の二を納めさせる時代や、戦争による増税が度重なる時代があったそうだ。今挙げたものでも、払う側にとって不満に思ってしまう点がたくさんあるが、極めつけは、これらは政府に一方的に納めるもの、というのが常識だったことである。当時の人達にとって、税という制度がどれだけ苦しいものだったのかがうかがえる。

では、今の税金はどうだろうか。まず、一番私達にとって身近である「消費税」。一部の軽減税率の対象物以外、全て十パーセントと定められている。これらは、差別がなく皆一様に等しい「平等」に値する。次は、「所得税」だ。所得税には、累進課税制度というものが取り入れられており、所得が増える程、税率が高くなるのだ。つまり、自分の給料に合った税金を納めることになる。これらは、所得が少ない人も多い人も同じように扱う「公平」に値している。このように、現在の税は平等性も公平性も持ち合わせている。不平等だった税が、今は不平等を少なくするための制度に変化しているのだ。

そして、一番は税金が国民の為に使われていることだ。健康や生活を守る社会保障費、道路や住宅を整備する公共事業費、地方を支援する地方交付金など、私達の生活は税金によって支えられている場面がいくつもあるのだ。学生である私も税金によって支えられている。私がいつも使っている教科書も、私がいつも食べている給食も、全て税金でまかなわれているのだ。

なぜこんなに種類があるのか、なぜ消費税を引き上げるのか、疑問と不満を持つ人もいると思う。でも、税金の歴史を長い目で見てみると、税金がどのくらい変化し、私達の生活にどのくらい活かされているのかが分かると思う。更に、一方的に定められていた税金も、今は私達の意見が反映されるようにもなっているのだ。税金について知り、考え、自分の意見を発信していくことが今の時代では大切なことなのだ。

これまでに良い変化をたくさんしてきた税金だから、これから私達の手で、国民にとって更に良い税金に変化させることも可能なのだ。税金に関心を持ち、自分ごととして考えることを大切にしていきたいと思った。

私と税と社会

京丹後市立大宮中学校３年　　高田　円花

学校に行く。授業を受ける。新しい発見や学びがある。これは私にとって当たり前であり、日常的なことだ。このような日常を送ることができるのは、自分で学費を払っているからではない。税金のおかげだ。

生徒一人につき年間でどのくらい税金が使われているのか、私は初めて知った。とても驚いた。私の想像をはるかに超えていたからだ。これだけ多くのお金を自分で払うことは、とても難しいと思う。もし税金が使われていなかったら、学費を払えなくなり、学校に行けない人が出てくるかもしれない。きっとそれを無くすために、教育に税金が使われているのだろう。

私はこう考える。「社会は子供の未来に投資してくれている」と。私たちはこれから成長して大人になり、社会をつくっていかなければならない。よりよい社会の担い手を育てるために、税金を使って、充分な教育を受けられるように環境を整えているのではないか。しかし、私たちがそれを活用しなければ、投資は無駄になってしまう。だから、私たちは与えられた良い環境を有効に活用し、自分で自分を進化させる必要があると思う。

例えば、無償で提供していただいている教科書や iPad。これらは自分のお金だけでは買えないもので、税金があるからこそ全員に平等に与えられているものだ。私たちは教科書をたくさん読んで自分の知識を広げたり、iPad を使って好きなことを追究したりして、自分を進化させることができる。一方で、与えられたものを活用しなければ、自分はあまり進化しない。こうなると、投資つまり税金が少し無駄になってしまうのではないかと思う。

学校外でも、教育環境は整えられている。私が住んでいる市では、国際交流を盛んにし英語力を伸ばすために、様々な英語活動が行われている。オンラインホームステイ、グローバル人材の育成に向けたシーラボなどだ。今年、私はそのシーラボに参加した。参加する前と後では物事に対する考え方が変化し、とても視野が広がったと思う。つまり、この活動を通して進化できたということだ。しかし、もしこの活動に参加していなかったら、私は変わっていなかったと思う。たくさんの人々や税金によって環境は整えられている。私たちは多くのチャンスを与えてもらっている。そのチャンスを活かすことができるかできないかは自分次第だ。

私たち国民には納税の義務がある。何のために税金を払わなければならないのか。それは、みんなでよりよい社会をつくるため。助け合ったり支え合ったりして、今の社会はもちろん、未来の社会も明るくするために税金があるのではないだろうか。私は、税金で自分も社会も進化させていきたい。

ありがとうで溢れる社会

清風南海中学校３年　　伊藤　優花

草の刈られた河川敷を目にした。暑くてしんどかったはずが、気がつくと笑顔になっていた。

私は陸上部だ。一番の目標である「速くなる」を達成するため日々練習を重ねている。部活のない日、私の練習場所は河川敷だ。

その日も変わらずいつものコースを走っていた。夏の日差しとそれに伴う苦しさに耐えながら、ただひたすらに前へ足を運ぶ。そんな中、目の前に現れたいつもと違った道。草が生い茂っていたはずの道はがらりと姿を変え、普段より涼しい風、開けた見通しが私を出迎える。心地いい。一番にそう思った。このような景色、状態で走れているということに嬉しさを感じ、思わず笑みがこぼれた。道の先へ目をやると草を刈っている業者の方々がいた。それを見て、直接言うことはできず、心の中ではあったが草刈りをしてくれていることに私は全力で、ありがとうを伝えた。

速くなるという目標を達成する上で、一番怖いものである、怪我。それを防ぐため、私は定期的に接骨院へ通っている。治療代は１回 500 円だ。ある月、試合が重なり疲労もたまっていたためいつもより多く接骨院へ通った。治療が終わり、治療代を払おうと財布を取り出すと、先生が言った。「お金は払わなくていいよ」と。私の頭は「？」でいっぱいになった。なんで払わなくていいの？先生のサービス？？そんなことを考えていると先生は「月３回以上は国が代わりに払ってくれるから払わなくていいんだよ」と教えてくれた。あっ、そういうことか。「？」が消えた私の頭の中は気がつくと、ありがとうがあった。

これらの経験の上、学校で税について話を聞き、今まで考えたことのなかった疑問に出会った。これまでに感じた「ありがとう」はどこから来るのか。元をたどると、どちらも税金へと行き着いた。よくよく考えてみると、ごく当たり前なことだった。けれど意識しなければずっと気づけなかったかもしれないことだ。ただ目の前の事柄に対してのみ、ありがとうと感じ、伝えてきた。けれど、ほんとうにありがとうを伝えるべきなのは私たちを含めた納税者の方々なのだと気がついた。

税金が使われている箇所は身近すぎて意識していないことが多い。実際、これまでの私のように何も考えていないという人も多くいるだろう。また税金を払うことに対して抵抗を感じているという人もいる。そんな税金について考えるようになった今、私の日常はありがとうで溢れている。整備された道路を走れること、充実した医療・教育を受けられること。それらは全て、納税者の方々によって支えられている。税金を惜しまずきちんと納めるというみんなの誠実さがささやかな幸せを私たちにもたらしてくれる。税金という繋がりが笑顔の輪を広げる。私には、ありがとうで溢れる社会は前よりもずっと明るく感じられる。

税金が叶えた新しい学びの形

大阪市立市岡中学校３年　　松本　菜々華

新型コロナウイルスの感染拡大による全国一斉臨時休校。そのときには、プリントやワークなどの家庭学習や指定された動画を見る課題で授業の代用をしていた。オンライン授業のために家庭に持ち帰った端末でテスト操作を行ったことも何度かあった。今では学年休業になった二日間であっても、オンライン授業を実施して授業を行うことが当たり前のようになっているけれど、一回目の臨時休校のときには完全には機能していなかったのだ。

新型コロナウイルスの猛威とは別に、文部科学省が推進していた「ＧＩＧＡスクール構想」によって、児童・生徒に一人一台パソコンやタブレットなどの端末機器を用意し、学校に高速ネットワークを整備する取り組みが令和元年から五年間かけて行われる予定だった。しかし、コロナ禍の状況において、大阪市では令和二年度に一人一台を前倒しして実現させたそうだ。当初の五年間計画だとしても、前倒ししての一年間で整備したとしてもこれらにかかった費用は税金で賄われる。学習者用の端末もそれまでの約二万二千台から約十六万台増えて約十八万二千台が用意された。ハード面を整備するだけでもかなり多くの予算が使われている。これに加えて学習のためのソフト面や維持費などの費用も税金が使われている。

日本の学校におけるＩＣＴ活用は諸外国に比べて遅れているといわれている。学校の授業におけるデジタル機器の使用時間はＯＥＣＤ加盟国の中で最下位であり、文部科学省が教育におけるＩＣＴの活用を促進するプランを打ち出し改革を行おうとしていた。私たちにとって急な前倒しにはメリットのほうが多かったように感じる。初めのころはつながらないなどといった不具合も度々生じて、中断されることもあった。だが、そのおかげでネット回線のことやサーバーのことなど、目の前にある端末のことだけではなく、ハード面の設備の概要を知ることができたように思う。また、先生と生徒で工夫をして取り組む機会も経験することができた。紙上だけでは形にできなかった制作物でプレゼンテーションを行ったり、撮影して合唱コンクールの練習に活かしたり、深い学びを得る機会は大幅に増えた。

義務教育の九年間で一人にかかる教育費は大きな金額になる。教育を受ける機会を平等に持つことができるのも税金のおかげだ。従来の教育に加えてＩＣＴのような新しい分野の教育も受けることができ、その先の学校生活や社会人となって活かせる知識の基礎を習得できたことは有意義なことだと思う。これらの知識はこれから働く私たちにとって必要不可欠なものになるだろう。大人になって働いて納税するようになったときに、子どもたちのために税金を有効活用してもらって、次世代へ還元していきたい。支えてもらった私たちが次は支える番だ。

私の生活と税

三田学園中学校３年　　田中　暁生

私の生活と税について考えた時に一番最初に思い浮かんだのは私の補聴器についてです。私には軽度の難聴があり、特に人の声くらいの高さの音をはっきり聞きとることができません。そこで小学五年生の時から補聴器を使用することになりました。補聴器を購入する際に、両耳で十万円以上もすると聞いた時には大変驚いたと共に、両親に金銭的な負担をかけるのではないかと心配しました。ところが補聴器店の方から、私の住む豊中市では豊中市難聴児補聴器交付事業という制度があるという事を紹介されました。

この制度は、補聴器の交付申請時に豊中市内に居住する十八歳未満の児童生徒であれば、障害者総合支援法に基づく補装具費の支給の対象にならない程度の軽度の難聴でも、医師の意見書によって補聴器の使用が効果的であると見込まれた場合に、申請者の負担が購入額の三分の一になるというものです。さらにこの年齢内であれば、補聴器の修理にも補助金が発生します。この補助金にはみなさんが納めた税金が使われています。私が初めてこの制度を知った時、障害者総合支援法に当てはまらない私でも援助が受けられるのかとうれしく思いました。税金は納めてばかりのものではなく私たちの生活を支え、豊かにしてくれる無くてはならないものだと気付くと共に、もし税金がなかったら私たちの暮らしはどうなるのだろうかと不安になりました。そして、色々な人達が納めてくれた税金で買えているものなので大事に使おうと決意しました。

私がこの補聴器を使用してから、友達の話している事が聞き取りやすくなって会話がより楽しくなったり、狭い道を歩いている時に、車が近付いていることに気付かずヒヤリとすることが減ったりしました。英語のリスニングや英検の面接でも効果を実感しており、今では安全で楽しい生活を送るためになくてはならないものです。また、補聴器のイヤーモールドは一人一人の耳の形に合わせて作られているので成長期には何度か作り直しが必要です。これにも補助が出るのでありがたいです。加えて、たくさんの人のおかげで今、補聴器を使って不自由なく学校に通えているのだという感謝の気持ちを絶対に忘れないでおこうと思いました。

私は、税金とはあらゆる人がより良い生活を送れるように協力して出し合っているお金だと思います。全ての人が安心して生活するために、必要としている人にきちんと行き渡るよう限られた税金を有効に使ってほしいです。

「子どもの笑顔と未来を育む税」

姫路市立東中学校３年　　生頼　佳子

二年前の四月、私達は中学校に入学した。新生活の始まりに緊張する中、沢山の教科書を受け取った。その一冊一冊のボリュームと、総重量から、これからスタートする中学校の学習量に圧倒されたことを覚えている。

それから新年度を迎える度、大量の教科書の配布と同時に、「こんなにも沢山の教科書を、全て税金によってもらっているんだ。」と思い、私達の生活と多くの方が納めた税金が直接結びついているのだと実感するのだ。

そして、出来るだけ丁寧に名前を記入していく。その瞬間に、大切な税金によって作られた教科書が私達の教科書になったという気持ちになり、中学生になった自覚と誇りや、進級の喜びが湧いてきた。

多くの物に恵まれた学校生活の中で、私達が名前を記入して使える教科書は特別な存在だと思う。毎日使う机や椅子も貸してもらっているのに対し、教科書は一人ひとりに与えられている物だからだ。それにより、書き込んだりと自由に工夫して使うことが許される。このことは、未来の日本を担う私達子どもへの期待と、成長と幸せを願っているというメッセージのように感じている。

また、校舎などの学習環境を整備するにも、多額の費用が必要になる。私達が入学してから、校舎の改修が行われた。外壁補修により、街の景観までもより美しくなり、登校する時の気持ちもより弾んでいる。

美しくより良くなった設備は、毎日を快適にしてくれるだけでなく、恵まれた環境を与えてもらえたことによって、「もっと頑張ろう」という前向きな気持ちも与えてくれた。設備の充実は、災害時の避難場所としての学校の機能や、避難した際の過ごしやすさが増すことになり、私達近隣住民の日々の安心に繋がっている。

私達は、約半年後には中学校を卒業する。つまり、義務教育を終了する。これまでの義務教育の約九年間を振り返ると、学校に通わなければ味わうことの出来ない経験が沢山あり、本当に数え切れない程の大切なことを教えてもらった。

それによって、自分達で考えたり、時には悩んだりしながらも、楽しくみんなで成長出来たと感じる。そんな学校は、私達にとって「社会」そのものである。こんなにも大切な存在である学校を築き、維持出来ているのは他でもない税金のおかげだ。学校に子どもを通わせている家庭の負担だけでは到底維持出来ない存在である学校で、日々の学びを通して未来を見つめて、希望を持てるようになっていった。

この喜びや感謝の気持ちを、ずっと忘れたくない。私達がしてもらったように、未来の子ども達にも、良い学びの環境を繋げていけるように、私も将来夢を実現して働いていく中で、働く喜びや意義の一つとして、バトンを受け継いでいきたい。

未来へのバトン

天理中学校３年　　吉岡　美結

「税金とは」と考えたとき、コロナ禍に対応していくために、ワクチン接種やギガスクール構想のタブレット配布、給付金など、払った税金の使い道を直接実感できる機会が多かった。税金を元に、日本の危機を何とか乗り越えようと必死だった数年間だったと思う。

他に税金の使い道として、どのような事があるかと考えたときに、高速道路工事のニュースを目にし、工事費には莫大な金額がかかっていることに驚いた。この工事費も税金でまかなわれている。

住んでいるマンションから車が行き交う京奈和自動車道が見える。ネットショッピングの普及により、トラックが流れるように走り、救急車が目的地へ急ぐ様子が見えた。親から京奈和自動車道の一部開通により天理から南部方面への移動が便利になり、以前は国道二十四号線の渋滞もひどかったが、渋滞が緩和されたと聞いた。京奈和自動車道は近畿の経済・文化・暮らしを支える事業として着工が進められている。京奈和自動車道が全て開通することにより、シルクロードのおかげで、中国から日本に文化が入ってきて世界が広がったように、奈良の世界遺産や国宝等がもっと大勢の人に知ってもらえる時がくることが私は待ち遠しい。

奈良時代の税金の仕組みであった、庸、調は完成していない都の工事や寺院建設などの雇役に使われることが多かったらしい。聖武天皇は天然痘流行で多くの人が亡くなり、地震などの災害で不安定な世の中を救うために東大寺を建立した。この当時の人々は、自分達が日々生きていくことだけで精一杯だったはずで、東大寺を建立することに不満もあったにちがいない。約千三百年たった今、東大寺は世界遺産に登録され、日本のみならず世界各国から観光客が訪れる奈良県を代表する観光名所となっている。奈良時代の人々に感謝しなければならない。

税金の使い道は、自分達に直接関係あることに使われると納得しやすいが、逆に、自分が必要としていないことに税金を使われると不満がでる。だが、自分が必要としていなくても、それを必要としている人がいるかもしれない。高速道路工事はコロナ禍に対応していた税金の使い方に比べると、必要性を感じるレベルは低いと思う人もいることだろう。

天然痘流行の奈良時代とコロナ禍だった現代の状況が似ていると感じた。奈良時代の人々は東大寺が観光名所となり経済を回す存在となっているなど夢にも思わなかっただろう。奈良時代の人々が苦労の中、東大寺を残してくれたように、京奈和自動車道の開通により未来の人々が、生活を豊かに送れるようになったと感じてくれたなら、こんな嬉しいことはない。この税のバトンがうまくいくことにより、未来の人達もまた次の世代につないでいこうと思ってくれるだろう。この税のバトンが永遠に引き続いていくことを願う。

普通をくれてありがとう

和歌山市立東中学校３年　　吉田　朱里

私にとっての幸せは毎日楽しく学校で学べて、家族みんなで一緒にくらせることです。

そう思えるようになったのは、母と私と姉の三人で暮らしていたときに、生活保護などの社会保障によって生活が成り立っていたことがあったからです。生活保護とは、健康で最低限度の生活を保障するための公的扶助制度のことで、これは主に税金によって成り立っています。なので私は他の人からみても、とても裕福な家庭ではなかったと思います。

しかし、他の子と同じように学校に行き、給食を食べて、たくさん勉強をして、友達と一緒に遊べていました。私はこの今では普通に感じてしまう幸せが全国の人々が払う税金で守られていたことを知って、驚いたのと同時に感謝の気持ちでいっぱいになりました。また、裕福な子もそうでない子も平等に勉強することが出来る学校というところは私にとって大切で、大好きな場所です。

そして、私が税について知っていくうちにどれだけ普段の生活が税金に支えられていたのかということに気づきました。私の家には自動車もなかったし、旅行に行くこともまったくなかったが、それでも一週間に一度くらい家族三人、自転車でスーパーに買い物に行くのがとても大好きだったし、家の中で学校のことや友達のことなど、普通の話をするだけで幸せだなと思えました。それは、けして裕福ではなくても、税金のおかげで、一日三食、食事ができて、住むところもあったからだと思います。

私の家族は今、生活保護なしでも、生活が出来るようになりました。これも税金でたくさん支援してくれたのと母がその間も頑張ってくれたからです。今は自動車もあって、前のように自転車で買い物に行くことがなくなったが、私はそのスーパーに行くと、毎回のように思い出して、幸せに感じます。今の生活が出来ていること、学校に行って友達と楽しく勉強出来ること、大好きな家族との思い出もすべて、生活保護という制度があったからです。

生活保護はよく、税金の無駄使いだと言われることがあるそうです。しかし私の家族はこの制度に救われました。そして、私たちは予想もしない最悪の場面に陥ったときに、救済の一つにもなる生活保護などの社会保障はあるべきだし、とても良い税金の使い道だと私は思います。

私たちが普段、普通だと思っていることが税金によって守られていて、それは全国の税金を払ってくれている人々に感謝していくことが大切だと学びました。また、普通という幸せを大事にしたいと思いました。

将来、私が税金を消費税以外に払うようになったときに、今までたくさんの幸せと思い出と普通をくれた恩返しなんだと思って「ありがとう」という気持ちで税金を納めたいなと思います。

見知らぬ誰かに「優しさ」をつなぐ税

倉敷市立福田中学校２年　　平田　瑞樹

テレビや新聞のニュースで税金の話を見聞きする時、よく目につくのは「増税で暮らしが苦しくなる」「税負担の大きさが問題だ」などという内容です。実際に、僕も税金にあまり良いイメージは持てていないように思います。スーパーやコンビニで買い物をする時に、税抜、税込の金額を見比べて、税金がなかったらなあ、なんて思ってしまうこともあります。では、税金は僕たちにとって、悪いものなのでしょうか。

僕の祖母は、再生不良性貧血という難病です。血液に含まれている白血球や赤血球、血小板といった必要な成分が減ってしまい、貧血や出血などの症状が起こる病気です。症状を抑えて日常生活を過ごすためには、定期的な治療が欠かせません。

この作文を書くために、両親と税金についての話をしていたら、祖母の病気を治療できているのは税金のおかげでもあると言われました。日本では、医療費の一部を税金が負担しています。税金がなかったら、治療にはたくさんのお金がかかります。祖母が払う分もあるけれど、残りの分は税金です。つまり、見知らぬ誰かが払ってくれているとも言えるのです。

それに、僕の住む倉敷市では、小学校卒業までだった医療費無料が、今年の七月から、中学校卒業までに拡大されました。両親は、僕が風邪をひいたり、部活でケガをしたりすることがあるから、こういう取り組みはありがたいね、と話していました。僕は、税金を疎ましく思うのは、幸せな証拠なのではないかと考えました。病気にならなければ、医療費が大きな負担になることもわからないと思うからです。

税金とは、僕たちが優しい気持ちを持って暮らしていくために必要なシステムでないかと思います。見知らぬ誰かが病気で困っていたとしても、突然声をかけて病院に連れて行くのは難しいですが、税金があるおかげで知らない誰かが支払う医療費を減らすことができるのです。もちろん、誰かの優しさが自分に返ってくることもあります。

見えないものにお金を支払うのは、あまり気持ちの良いことではないかもしれません。でも税金は、確かに僕たちの暮らしを支えてくれています。税金そのものが問題なのではなくて、税金がどう使われているのかを知る機会が少ないことが問題なのではないでしょうか。

僕たちは商品を買う時、何を買うかをよく考えます。でも税金は、なんとなく支払われています。僕たちも、税金がどう使われているのか、そしてどう使われてほしいのかをもっと知り、考えるべきではないでしょうか。税金に関するポジティブな会話が飛び交う未来を、僕たちが作っていかなければいけないと思います。

思い出を形作る税金

岡山県立岡山操山中学校３年　　茶圓　由衣

誰しも幼少期の楽しかった記憶があると思う。遊び、お出かけ、家族との会話……。思い返すと、私の幼少期の楽しみはそのほとんどが税金に支えられていた。

私は小さな頃から本を読むことが好きだった。図書館に行っては、本を二十冊ほど借りることを毎週繰り返していたが、今思えば中々すごいことだ。もしこれらの本を全て本屋で買う場合を考えてみる。一冊八百円として、二十冊買うことを一年間続けたとすると、約八十三万二千円かかる。それを図書館では無料で読むことができるのだ。それだけでなく、図書館は定期的にイベントが開かれたり、紙芝居をしてくれたりと、子供達が楽しみながら学べる工夫が施されている。私は読書を好きになって、国語が得意になったのは税金の使い道の一つに図書館があったからだと思う。

また、県中の様々な公園を探して、そこへ家族と出かけることも好きだった。大きな遊具や噴水、芝生でおおわれた広場……。全ての場所に笑顔が溢れている公園が大好きだった。また、公園は体を動かすだけでなく、たくさんの人と交流できる場でもある。私も、時には初対面の子と仲良くなり、一緒に遊具で遊んだことがあった。小さな子供達が広場を駆け回っているのを見守りながら会話を楽しむ大人達。音楽を聴きながらランニングをする若者や、犬の散歩に来たお年寄りの方々。そこにはさっきまで走り回っていた子供達が犬と触れ合う姿も。全ての世代の人が一箇所に集まり、各々がやりたいことを楽しみながら時に交わるこの空間は、とても居心地が良くて暖かかった。税金で作られたものから人々の笑顔や繋がりが生まれていくことを知った。

税金によって作られたものからは必ず誰かの笑顔が生まれる。幼少期の充実した思い出を形作って貰った人も多いと思う。日々払っている税金は、人生を豊かにしてくれる物に変化して、私達の元へ返ってくるのだ。ささやかな幸せをおまけにつけて。

「未来を守ってくれた税金」

国立広島大学附属三原中学校３年　　西川　颯祐

僕には自慢の兄がいる。その兄は僕が小学校一年生の時、難病にかかり九か月間入院した。入院に付き添う母にもかなり負担がかかったようだった。そして僕も祖母に預けられ家族はバラバラになってしまった。しかし入院費に関しては、「乳幼児医療」という制度のおかげでほぼ負担はなかったようだ。それに加えて、「特定医療費（指定難病）受給者」の資格を得たらしい。今回受給者証を見せてもらった。僕は今までこの制度を知らなかったのだが、この制度を利用すると、月々の医療費負担の上限が一定額以内になる。つまり兄が「乳幼児医療」の受給者資格を失ってもこの制度により医療費が一定額を超えないため、安心して病気と向かい合い治療することができるのだ。

難病と共に生きている人にとって、医療費の問題はとても重要だ。定期的な投薬や通院が必要なため、多額の医療費がかかることも多い。ただでさえ辛い病気を抱えているのにその上医療費の心配までしていたら、精神的に追い込まれて病状が悪化してしまうかもしれない。高額な医療費の心配をせず療養に専念できることは、とてもありがたいことだと思う。僕は近くで兄を見てきたので、それがどれだけ助かることかがよくわかる。

兄は、退院後「難病を抱えていると、それだけで色々負担が大きい。でもこの制度に『がんばってね。一人じゃないよ。応援してるからね。』と背中を押してもらっている気がする」と言っていた。僕はそれを聞いて制度のありがたさを痛感した。インターネットで調べてみると国民医療費の財源は四十％近くが税金だった。僕達は気づかないうちに税金に支えられているのだ。困った時に支えてくれる税金の存在を、僕は今まで正しく認識していなかった。税金は本来は自分のものであるお金を取られてしまうものだと思っていて、税金を払うことによって、困っている誰かを支えることができるということに気付かなかった。それを知った今、僕は未来を守ってくれて、困った時に支えてくれる税金にとてもとても感謝している。もし多額の医療費の負担がかかっていたら兄や僕の望む進路は叶えられなかっただろう。正しく納税している納税者のおかげだ。

しかし最近少子高齢化が進み、社会保障費が増大していると聞く。このままだと社会保障費が不足し、僕たちを支えてくれた医療費も、十分な財源が確保できなくなるだろう。そうならないよう、これから色々な知識を得て、どうすればいいか考えたい。増税により負担が増えるのは嫌だが、そうしないと幸せな未来が守れないなら、増税するべき所と、しない所のバランスを考えなければならないと思う。そして、将来は正しい知識を得て正しく納税し、困っている人達を支えたい。かつて僕達が支えてもらった様に。

姉を助けてくれた税金

愛媛県立宇和島南中等教育学校３年　　青芝　亜希乃

私には、五歳年上の姉がいます。姉は予定日より二ヶ月早く低出生体重児で産まれました。松山市にある県立中央病院の周産期センターの集中治療室で約二ヶ月間入院していたそうです。小さく産まれたため、肺呼吸が上手く出来ませんでした。また、心臓にも病気があり、高度な治療が必要でした。父から教えてもらったのですが、その約二ヶ月間にかかる医療費が一千二百三十万円だったそうです。姉が産まれた当時、父も母も年齢的に若く収入が低かったため、医療費の支払いが重くのしかかっていました。しかし、病院の方から、愛媛県の方から払ってもらえますよと教えていただき、申請をすることができました。約二ヶ月の入院を終えて、姉が無事に退院したときは、両親は心底ほっとしたそうです。その周産期センターには、たくさんの低出生体重児がいたらしく、姉と同じように高度な医療が必要な小さな赤ちゃんの大切な命を守るためにたくさんの税金が使われていると聞きました。日本の税にはたくさんの種類があることを授業で学びましたが、学生の私が今、直接関わっている税金といえば消費税くらいで、今の私にはそれほど関係ないと思い、あまり興味がわきませんでした。しかし、父と母から姉が産まれた時の話を聞いて、税金は大人だけのことだと思っていた自分の無知を思い知りました。税金が産まれたばかりの赤ちゃんにも使われていることを知って、日本に住む全員に使われているのだと改めて税の大切さを実感しました。今は各市町でも十五歳以下の人達の医療費の免除があります。私も現在、持病のため通院していますが、その医療費も町の税金で負担してもらっています。道路を直すのも税金、消防車や救急車の維持や出動なども税金とたくさんの人々が安全に安心して毎日を暮らせるようになるためにも使われています。テレビを見ているとニュースで税金の無駄使いだとかいろいろ批判の的になっていることもありますが、私の姉の命を助けてくれたのも税金、そしてこれから産まれて来る赤ちゃん達の命を救ってくれるのにも税金が必要なので、私も社会人になったら少ない額かもしれませんが、しっかりと税金を納めたいと思います。姉は今、社会人になり元気に働いています。給料は少ないそうですが、少しずつでも税金を納めているみたいです。父は姉によく「お前は愛媛県のみんなに助けてもらって、今、元気に働けれよるんやけん、今からはお前も頑張って働いて、今から産まれて来る小さな命のためにしっかりと税金を納めろよ」と言っています。毎日姉とくだらない話をしたり、たまにけんかもしますが、あの時、医療費を愛媛県から出してもらえなかったら、今こうして姉とあたり前の日常を過ごすこともできなかったのだと思うと税金に感謝の気持ちが沸いてきます。私も働くようになったら、税金をしっかり納めようと思います。

循環される税制度

須崎市立朝ヶ丘中学校３年　　寺村　心那

私は小さい頃から両親の影響で洋楽が好きで、いつしか英語に興味を持った。もっと英語を学びたい、楽しみたいと思い、ＪＰのペンパル制度を利用してスロベニアの友人と文通したり、英会話教室に通っていた。

そんな私はこの夏、人生最大の経験をすることができた。それはカナダに二週間ホームステイしたことだ。見るもの聞くもの肌で感じるもの、全てが新鮮で刺激的な時間だった。こんな貴重な体験ができたのも「税」が関係している。

私の住む須崎市を含む近隣五市町村からなる高幡地域には、中学生を対象とした海外研修がある。ここ数年コロナの影響で中止になっていたが、今年四年ぶりに復活した。告知を見た時の私は胸が高鳴り参加したいと強く思った。しかし費用が二十万と高額であり、一般家庭の我が家にそのような余裕があるはずもなく、あきらめようと思っていた。そんな私の思いに気付いた母が、

「大丈夫。税金の滞納がなければ、研修やレポートとかの条件を満たせば研修後に半分戻ってくるき。何も心配せんでえいき、がんばってみいや。」

と、背中を押してくれた。私は英語や海外への思いをつづった作文を提出し、須崎市の代表の一人に選ばれた。

カナダでは英語力やコミュニケーション力など落ち込むこともあったが、バディや友人らに支えられ今まで気付かなかった自分を知り、もっと自分を好きになり、前を向いて生きていこうと強く思えた。

この貴重な体験は税のしくみの上に成り立っている。市の事業なので費用負担には税金が使われている。返金の条件には滞納がないことが決められており、正しく納めて正しく使用することが伝わってくる。

私は今まで税金と言えば文房具やお菓子を買った時に払う消費税くらいしか身近に感じていなかった。しかし今回のことで税の循環を身を持って知った。

納税は国民の義務である。しかしそのほとんどは意識されず納めていたり、使われ方を意識することもなかった様に感じる。

高知県の中学生一人当たりの教育費は一年間で百八十一万千円だ。これは私を成長させてくれるために国や市町村が出してくれている。私はこの額に見合った学生生活を送っているか。もっと真剣に今を生きていき、しっかり自分の頭で考え、学びから得たことを社会に返せる大人にならなければいけないと思った。そしていつか自分でお金を稼ぐようになれば、しっかり納税をして、社会人としての役割を果たしたい。

税の制度はただの社会のルールだけではない。それが循環されるからこそ生まれるものもある。税の循環は学びの循環だと思う。

この先も、税と共に

那珂川市立那珂川南中学校３年　　三浦　由愛

「どこにいったの。」私は、心臓の激しい鼓動と冷や汗が止まらなかった。

ある年の夏祭りに家族で行った際に、まだ小さい妹が迷子になった。そこは、都会の街の中心部であり大規模な祭りが行われていたことから大勢の人が集まっていた。

当然のことながら、人混みの中で背の小さな妹を見つけられるはずもなく探し回っているうちに、時間は過ぎていった。

そこで、もしかしたらという思いにかけて最寄りの警察署に向かうと、なんとそこには妹がいた。妹が迷子になって一人でいたところを、祭りの警備に当たっていた警察官の方に保護され、警察署まで届けてもらったそうだ。おかげで妹と再会するまでに一時間もかからなかった。素早く保護してくださった警察官の方の対応に、心から感謝している。

私は、この出来事がきっかけで私たちの生活を守る機関に興味が湧いた。思い返せば、学校の授業で警察署や消防署の活動資金は税によって賄われていると学んだ覚えがある。税は他にも、ごみの回収、下水道の整備や、私達中学生の教育費など様々な物事に使われている。不平等が起こる可能性をできるだけ排除するためにも、国や地方自治体といった公的な組織が公平に活動資金を供給する必要があり、そのために税は使われているのだ。

私達の暮らしは、国民一人一人が納めている税に支えられ、守られて成り立っている。

これまで、私にとって税は「国のために払っているもの」という意識であまり身近なものだとは感じず、少し厄介だとまで思っていた。しかし、私の妹は納税という仕組みがあるから救われたのだ。税は私達が安全に、生き生きと過ごすためになくてはならないものなのだと実感することができた。厄介だ、なんて思えるはずもなくなった。

「税を納める」ということは、一人一人の未来へ「貯金をする」ということなのかもしれない。妹のように、いつ、どこで、どのように税に救われるかは予想がつかない。だからこそ、この貯金は必要不可欠だと思う。

「納税」は憲法によって定められている義務だ。しかし、納税を義務という意識で行っている人に、義務だからとは言わず自分が生きる社会を支える、自分が社会に加わるために必要なものだと気づいてほしい。また、税を納めている私達はただ税を納めるだけでなく、もっと税の使い道に興味を持ち、知っていくべきだと思う。そうして、暖かい気持ちで納税する人で溢れる輝かしい社会であってほしい。

今、私はどちらかというと税を納めてくださっている方々に支えられているが、将来、大人になったときには社会を担う立場として、胸を張って未来に貯金をしたい。

そして、これからもずっと、税が形を変えて届けている決して当たり前ではない幸せを忘れずに、未来へ繋いでいきたい。

みんなの税で助ける命

春日市立春日中学校３年　　吉元　悠菜

これまで、人命救助活動において、国によって考え方や制度等の違いがあるとは思いもしなかった。私の中では、火事や災害時等は消防車や救急車が出動して救助活動をするのは当たり前だった。しかし、先日、二〇一〇年秋にアメリカのテネシー州サウスフルトン市で実際に起きた話を知り、衝撃を受けた。

サウスフルトン市では、Ａの住宅で火災が発生して消防車を呼んでも来ず、Ｂの住宅に燃え移って消防車を呼ぶと、Ｂの住宅だけ消火してＡの住宅は全焼してしまったそうだ。消防隊がＡの住宅の消防活動をしなかったのは、毎年、消防のサービスを受けるための火災保護費七五ドルを払うのを怠っていたためで、たとえ火災の最中に支払いを申し出ても、火事に遭わない限り支払わない人が出てしまうため、認められていないとのことだった。

「消防活動は市が提供するサービスで、サービスを受けるか受けないかは住民の自由である」というサウスフルトン市長の考え方は人の生命を守る消防等のサービスが個人の選択制であることに、私には到底、理解できないものだった。なぜなら、私は東京オリンピック二〇二〇で知った、あることに感銘を受けたからだ。それは、日本における救急車の利用対象者の幅広さについてだ。税金で運営されている救急車は、常識的に考えれば日本国民や在留外国人がサービスを受けることができるものだが、税金を払っていない訪日外国人も無料で利用が可能だ。これは世界的にも大変珍しいことで、総務省では十六言語でパンフレット等を作成して利用普及に努め、救急現場では、救急隊用に開発された多言語音声翻訳アプリが利用され、救急活動を行っている。

このように、日本においては、人命を守ることは公共サービスとして国民及び外国人まで広く提供されている。その費用は無料であるが、税金という形で国民が分かち合って分担している。そしてまた、日本は憲法で納税の義務が定められているため、国民の「健康で豊かな生活」を実現するために使われる一例として、救急車が無料で利用可能なのだと分かった。一方、アメリカにおいては、政府は原則として個人の生活に干渉しないという自己責任の精神と、連邦制で州の権限が強いことから、社会保障制度のあり方が公助や共助より、自助の意識が強いと感じた。

ただ、これからの日本の問題の一つとして、少子高齢化に伴う労働力人口の減少が挙げられている。今まで税金でまかなっていたものが、アメリカと同様に個人で負担することにならないよう、私に今できることは、まず勉強に励むことだと思う。そして、これからは税金の使い道にも関心を持ち、大人になった時はきちんと納税し、公助や共助に重きをおいた日本の素晴らしいサービス制度を続けていけるように貢献していきたい。

税金で運ぶ命

春日市立春日南中学校３年　　手島　愛里

母は、疲れて仕事から帰宅し、ソファーに倒れ込む。救急救命士、それが母の仕事であり、私の将来の夢でもある。最近は出動回数も多く、救急車が足りなくて大変らしい。更に、無料だからと言って救急車をタクシー代わりに使う人も多くいるという。

「だったら有料にしちゃえば。」

私はぐったりしている母に問いかけた。母は

「そうはいかないんだよ。考えてごらん。」

と眠そうな口調で言った。私は少し考えて

「なんで。」

返答がない。母はもう、夢の中だった。

そこで私は自分で考えてみることにした。そもそも救急車が無料なのは税金でまかなわれているからだ。だから、私たちは平等に助けてもらえるし、躊躇なく呼ぶことができる。しかし、逆に呼びやすいが故に前文のようなことが起こったり、病院側も多忙になったりと、本当に命の危険が迫っている人の所に行けなくなり、必要な処置が遅れてしまう可能性がでてくる。では、有料にするとどんなことが考えられるだろうか。もちろん安易な救急要請が減るかもしれない。しかし、お金の心配で呼べなくなってしまう人がいるだろう。それでは、救急医療としては元も子もない。調べてみると、救急車が無料の国は極めて少なく、無料が当たり前ではないことに気づかされた。私たち日本人は恵まれているのだ。

私は、母の言いたいことがようやく理解できた。救急車が無料で呼べるからこそ、経済的な格差による命の差が生まれることなく、平等に命を救うことができる。このようなことができているのはやはり、税金のおかげだ。

私は、「税金は払うのが当たり前。」そう思っていた。しかし、その払った税金が目に見えないサービスとなって日常生活に溶け込み、私たちの生活を陰ながら支え続け、豊かにしてくれていた。税金は日本国民全員が平等に払い続けてきた。その小さな積み重ねが救急車はもちろん、どこかで誰かの大きな支えとなっている。つまり、私たちは税金を通して無意識に支え合い、助け合っているのだ。私は、この素晴らしい助け合いの制度を残すべきだと思う。

母は仕事が楽しそうだ。私が幼い頃から時々、患者さんを助けた話や命の大切さを誇らしげに話してくれる。そんな母のように、私もこの手で人の命を救ったり、困っている人の生活を支えたりして誰かの役に立ちたい。そのためにも、納税の義務を果たせる立派な社会人となり、少しでも安心で優しい国づくりの手助けをしたい。

今は、払える税金はほんの少しだけど、それでもその税金がこの一瞬でさえ、誰かの役に立っていると思うと胸が少しだけあたたかくなった。

「支える」を支えたい

福岡市立香椎第３中学校３年　　山下　紗季

「税金」と聞いても特に何も思い浮かばない。良いイメージもあまりない。少し前までの自分はそうだったと思う。

中学校に入学して半年ほど経った頃、授業で「自分の将来について考える」という課題が出されたことがあった。当時の自分に描いていた未来の想像図などなく、自分にとっては難易度の高いお題だと思った。しいて出すならば多くの人の日常に関わる仕事がいい。それくらいだった。それから間もなく、街中のポスターで「国税専門官募集」の文面を目にした。聞いたこともない職業名になぜか目が留まり、家に帰ってすぐにその名前を検索した。一番上に表示されたのは「国税庁」の文字。画面をスクロールすると「国税専門官は税のスペシャリスト」の説明があった。その他にも調べていくと国の財政の中心を直接支えるという職業に魅力を感じて、直感的にこれになりたいと思った。

国税専門官になりたい。そう思ったは良いものの、当時の現状では「税金」について全くの無知だった。身近な例では消費税くらいしか思い浮かばず、それが具体的に何にどんな風に使われているのかさえ知らなかった。けれど「税のスペシャリスト」になるには税の基本的なしくみだけでも知っておくべきだと思い、調べたり親に聞いたりしているうちに、少しずつ税について分かってきた。まずは税には消費税だけでなく約五十種類の様々な税があること。その中でも税率や納税の対象者、目的などはそれぞれ異なること。想像よりはるか身近な場面で税金が使われていること。特に所得税や贈与税といった売買の過程ではない自分の利益自体にかかる税もあることに驚いた。そして集められた税金の約三分の一にあたる三十七兆円が「社会保障関係費」として国民の生活や医療に充てられているということを知って自分たちの安心で安全な暮らしは税金によってつくられていると言っても過言ではないと思った。少し税について理解してからは、税金でつくられたよく利用する地下鉄や体育館、公園で向ける視点が変わったし、そのために買い物の際に消費税を支払うのも嫌ではなくなった。むしろ自分が税金を通じて社会を支えることができると感じて嬉しい気持ちの方が強かった。自分が税金に対しての意識が変わってこのように思えたように、納税することはただお金を支払うだけでなく、その中には一人一人の社会への期待が含まれていて、納税することにより、その意志が示せると思う。しかし世の中には税金に対して良いイメージばかり抱いていない人がいるのも事実である。だからこそ自分は自分の経験を生かしてそのような人にも税金の社会貢献について理解してもらい、この国一人一人の「支える」という気持ちをそばで直接支えられる国税専門官になりたい。

『生きる』

志布志市立有明中学校３年　　大山　陽向

私は糖原病Ｉ型という難病指定の病気を患っています。毎日数種類の薬を数回に分けて服用し、運動や食事制限などがあり、皆と同じように日常生活することができません。今私の一番辛い症状は気温が上昇すると鼻血が出始め、中々止まらないことです。ひどいときには一時間以上も出続け、その度に専門の病院へ通っています。そして、皆の助けがあり奇跡的に生きている私ですが、生死をさ迷ったこともあるのです。

昨年の休み突然発熱し、コロナに感染しました。世間でもコロナ感染者が増え続けている中で、絶対にコロナに感染してはいけないと言われているときだったのです。そのまま意識が無くなり床に倒れ伏しました。この後のことは全く記憶にありません。意識が戻ったのは二十日後でした。その間ＩＣＵで生死をさ迷っていました。呼吸器につながれ、手足にはいくつもの点滴。輸血。透析。鼻血は止まらない。目が明いているだけで、全く動くことさえできませんでした。容態は悪化し、両親も私の死を覚悟していたと言います。奇跡的に一命を取りとめることはできましたが、以前にも増して生活が制限されています。

中学三年生になった現在も、月に一度の定期検診、急変すれば救急車の出動をお願いします。私は周囲の人の手助けなしでは生活できません。両親、祖父母にも心配をかけっぱなしです。その中でも一番気がかりなのは多額な医療費のことでした。

そんな時です。社会の授業で『税金』について勉強する機会がありました。税金は払うものだとばかり思っていました。働くと所得税に市民税、買い物をすると消費税を納めるくらいのことは知っていました。しかし、それはほんの一部だということを学んだのです。先生の話で、税金は住みよい社会、より多くの人達が幸福に暮らせる社会を築くためのものであること、そして、それを切っ掛けに、私の治療にも大きく税金が関わっていたことを知ったのです。

私の治療費には『小児慢性特定医療費』というのが使われており、税金が私の治療費の一部を助成していたのです。毎日数回にも分けて服用している薬にも税金が使われていて、私は皆に生かされていると思いました。この制度のおかげで両親の負担が減りとても助かっていたのです。母が話していました。「助成があるから十分なことがしてあげられる。ありがたい。」と。

私は難病を抱えながら生活しています。多くの人に助けられている命、奇跡的に助かった命を本当に本当に大切にします。一分一秒も無駄にせずに生きて行きます。

私は将来幼稚園の先生になりたいと思っています。その時、私の納める税金が、病める人々に手を差し伸べ、一人でも多くの方々を救ってくれるものであって欲しいと心から願っています。そして全ての人々に幸せを。

実感して学ぶ税のありがたみ

美里町立中央中学校３年　　山下　幸奈

皆さんは「税」と聞くとどのようなことを思い浮かべますか。心の隅ではきちんと、税は私たちの生活を支えてくれる大切なもの、なくては困る大事なものと分かっているはず。ですが、パッと思い浮かぶのは高くて払いたくない、正直どのくらい役に立っているのか分からない、果たして本当に税金に意味はあるのだろうか、というマイナスな思いだと思います。私も以前まであまり税金に対して良い印象は持っていませんでした。学校で租税教育を受けてもどこかまだ、ありがたみを実感することがなかったからです。しかし私はこの一年を通して、税金の大切さとありがたみを心から実感しました。

そのきっかけとなったのは父が癌を患い、働けなくなってからでした。母が専業主婦の私の家庭は収入源がなくなり、生活できなくなってしまいます。そこで私たちは生活保護を受けることになりました。生活保護というものは前から聞いたことがあったのですが詳しく調べたり学んだりせず、ましてや自身が受けることになることなど思ってもいませんでした。ケースワーカーの話を聞いているうちに生活保護の仕組みが分かってきて、生活扶助費や医療扶助費が税金から出ていることを初めて知りました。

私が特に税金のありがたみを痛感したのは医療扶助です。癌を手術によって摘出し平穏な日々を過ごしていた父ですが、ある日の定期健診で骨盤に癌が転移していることが判明しました。骨への転移は手術ができず、抗がん剤での治療になります。その抗がん剤の値段に私は驚愕しました。定期的に打っている僅かな量の点滴と毎日服用している強い錠剤。なんとその値段は数十万円もしていたのです。癌が完全に治るまで百万円以上かかる医療費は自腹ではとてもじゃないですが払えません。生活保護を受けていなければそのまま癌の進行と、死を怯えながら待つことになっていたでしょう。父が今も闘病しながら元気に過ごせているのは紛れもなく税金のおかげなのです。

これまで税金をあまり良く思っていなかった過去の自分やそう思っている人に伝えたいことがあります。それはいつかあなたが困窮した状態に陥ったとき、光を与えてくれるのは税金かもしれないということです。人は困ったとき本当にそのもののありがたみを実感します。実感しなければ分からないことも沢山あるでしょう。そんなときでも一度自分の頭で良く考え、自分がこの状況に陥ったらどうなるか、どうすべきなのかを思い描くことでそのものの大切さやありがたみを少しでも感じることができるのではないかと考えました。税金に対して国民一人一人が前向きに貢献していくことによって、どこかで困っている人を助け、光となれるならそれほど素晴らしいことはないでしょう。これからの日本が税金によって発展していく事を願っています。

税金で成り立つ私たちの暮らし

学校法人尚学学園沖縄尚学高等学校附属中学校３年　　萩原　陽葉

私は今年の夏、短期留学でアメリカへ行きました。その留学の事前説明会で驚いたことがあります。それは、アメリカで救急車を呼ぶにはお金がかかるということです。私は、救急車はどの国でも無料で利用できると思っていたので、とても衝撃的でした。この事前説明会をきっかけに、私は世界の医療制度について気になり、調べてみました。

世界の医療制度は大きく、アメリカ型、ヨーロッパ型、日本型の三つに分けられるそうです。アメリカ型は、保険に入っていても二、三日の入院で数百万円、一回の外来検査で数十万円かかることが普通だそうです。ヨーロッパ型は、原則無料ですが、病気になっても診察予約は二、三週間の待機、専門医に診てもらうのは月単位の待機が必要となるそうです。そのため、緊急時は有料の私立病院を利用することとなり、その際はアメリカ型同様の金額になります。しかし、日本型は医療保険が充実している為、個人で病院を選び、自分が望む医療を受けることが可能らしいです。

この保険制度のおかげで、私たちはいつでも不安なく医療を受けられます。何故この保険制度が充実しているのか調べたところ、保険の財源の約五分の一を保険税で賄っているそうです。保険税のおかげで、私たちは金額を気にせずに医療を受けられるのだなと思いました。

また、日本では保険税の他に約五十種類もの税金があり、その納められた税金は、私たちの教育、健康、道路の整備などに使われているそうです。私たちの当たり前の暮らしは、税金が支えてくれているから成り立つものだったのです。

私は今まで、税に対してマイナスイメージを持っていました。何をするにも税金としてお金を払わないといけないし、税金を払いたくないが故に脱税する人もいるからです。しかし、税金の使い道を知って、税金のイメージが変わりました。税金は、「私たちへ負担をかける嫌なもの」ではなく、「私たちの生活を豊かにする良いもの」というイメージに変わりました。

税金は私たちの暮らしに深く関わっています。私たちが日々健康に暮らせたり、平等に教育が受けられたりするのも税金という義務があるおかげです。税金を納める意義を理解しながら、私も納税者として、身の回りを豊かにし、よりよい暮らしが送れるように税金を納めていきたいです。

和寒町へ恩返し

和寒町立和寒中学校３年　　和久　葉澄

私は、部活動でクロスカントリースキーをやっています。町の補助をもらって、長野県で開催される全国大会にも出場しています。だから、私は、この税金を「ぜいきん」と読むのではなく、「期待」、「応援」という意味が込められていると思っています。私達は、町民が納めた税金で全国大会に出場しているだけではなく、期待されて、応援されて、背中を押してもらっているのです。全国大会は、私一人で戦っているわけではありません。全国大会に出場できるまでに、多くの人が関わり、町のみなさんに手を貸してもらって、私はスタートをきることができています。だから、私は町のみなさんへ恩返しをしたいと思っています。でも、お金で恩返しができるわけではありません。自分が今すぐ税金を納めて、町の発展に関われるわけでもありません。私が、今、できることは、町のみなさんの期待に、応援に精いっぱい応えることです。結果で、走りで恩返しをすることです。町のみなさんへの感謝、これからへの希望を与えられるようにすることです。これが、今、私にできる最大限のことです。これから、まだまだ私の部活動にはお金がかかります。練習をする場所も、大会を運営するための人も、たくさんのものが必要になります。多くの人々の手助けが必要になります。その時、町のみなさんには、大きな世話をかけることになります。それでも、町のみなさんは、私達をサポートし、応援してくれています。町のみなさんの税金、サポートによって、私は思う存分、部活動に打ち込むことができています。

税金によって、助けられている人が多くいます。私も、そのうちの一人です。税金には、多くの種類があって、一人あたりの負担も増えていっています。私は、今、消費税ぐらいにしか関わっていないから、まだ、負担の重さはわかりません。それでも、私がいつか、税金を納めることができたら、たくさん助けてもらった分、年配の方にも、未来ある少年、少女の方々の助けをしていきたいです。私は、税金という名の期待、応援に応えられるよう、今はたくさんサポートしてもらいながら、一生懸命練習に取り組み、町のみなさんへ恩返しをしていきたいです。

税金で支え合う

塩竈市立第一中学校１年　　岩崎　凌空

僕は、「成長ホルモン分泌不全性低身長症」という病気のため、幼少の頃から数ヶ月に一度通院し、身長を伸ばすための注射を毎晩自宅で打ち続けている。

しかし僕が小学生だったある時、病院でお会計をする際、周りの大人は診療代や薬代を支払っているのに、自分は支払っていないことに気づいた。僕は母になぜ払っていないのかをたずねると、「子ども医療費助成制度」や「高額療養費制度」を受けているからだと教えてくれた。続けて母は、こう話した。

「この注射の薬のお金は税金から支払われているから、税金を納めている多くの人のおかげであなたは注射を打つことができているの。だから、あなたはきちんと社会に貢献できる人になって、恩返しをしなさい。」

この言葉の意味を、当時の僕はまだ理解することができなかった。しかし去年の小学六年生のとき、「税の教室」という授業で税金について学ぶ機会ができ、このときのことを思い出すことができた。そしてあの時わからなかった話もわかり、はっとした。

これまで、僕は受診することが当たり前と思い、治療費や薬代のことを考えたことがなかった。しかも、注射の針を挿したときの痛みや、毎晩根気強く続けなければいけないことに耐えられなくなり、いっそのこと治療をやめようかと思ったことが何度もあった。しかし僕の約十年間は、たくさんの医療制度、税金によって助けられてきたのだ。調べてみると、毎晩僕が打ち続けているこの注射の薬は一本数万円もするため、それを毎日十年間と計算すると、なんと数千万円以上もかかっていた。僕はこの医療制度のおかげで、経済的な心配で治療を断念することなく、今も続けることができている。

また、買い物の際には、十パーセントの消費税を、なぜ子どもまで少ない小遣いの中から払わなければならないのかと、不満で仕方がなかった。しかし今では税金の使い道や税金を納めることの大切さを学び、税金があるからこそ、僕のように、救われている人がたくさんいると実感した。

税金は、僕たちの社会を、僕たちの生活を支えている。税金が無ければ警察や消防、救急などの公共サービスが機能しなくなる。学校で使う教科書だって、無償ではなくなる。僕たちの身の周りには、たくさんの税金が使われているのだ。一人が納める税金が少額でも、みんなが納税することで、必ず誰かの役に立ち、この日本を豊かにすることができる。

僕が大人になったとき、母が話してくれた「恩返し」という言葉を忘れずに、将来しっかり働き、少しでも多くの税金を納めたい。そして今までみんなの税金によって助けられていた僕が、今度は税金を払うことで、他の困っている人を支えていきたいと思う。

命の次に大切なお金を預かるということ

信州大学教育学部附属松本中学校３年　　望月　美里

私の父は税務署で働いています。父は少し変わっています。

疲れた疲れたと言って帰宅したにも関わらず、仕事中に気になったと税法について遅くまで調べたり、税法の句読点がここについているからこう解釈するべきか？などと夕食の準備をする母を相手にブツブツ言っていたり、休日に税金の専門紙をじっくりと読み込んだり、明日はこれをやってそれを調べてその前にあれをチェックして…と、ともかく税法と仕事について常に考えているような人です。休日前はウキウキとして休みを心待ちにしている様子なのに、いざ休日になると税法について調べ始める。父のそんな矛盾した行動は、私にはとても不思議で、そんなに税法と仕事が好きなのか。休みの日くらいゆっくりすればいいのに。と小さいころから思っていました。

私が小学生のころ、税金が何に使われているのか、授業で教わる機会がありました。救急車や消防車などの緊急車両を出動させるのに必要なお金。学校の机や椅子、黒板を買うお金。災害時に復旧のために使われるお金。生活に困窮した人を助けるためのお金。国のために働く人たちのお給料として使われるお金。そして、世界の人々を助けるためにつかわれるお金。人々が安心して、安全に快適に暮らすために必要なたくさんのお金は、国民から集めた税金で賄われていることを知りました。

では、父の仕事は？

父は、私たちの生活を支えるための税金を正しく、公平に集めるために頑張っているのだと思い、父が休みの日にまで税法に振り回されている理由が少しだけ分かった気がしました。

父も母もよく「税務署は命の次に大切なお金を預かる所だから。」と口にします。税金とは、少しでもみんなが暮らしやすくするために使われるべき大切なお金です。課税には公平と正確が求められます。一方で、少しでも不公平があったら税務署への信頼がなくなり、国民の税金を納めようという気持ちを奪いかねないと思い少し怖くもなりました。

父が、常に税法について考えている様子なのは、税金の窓口となる税務署の仕事に責任を持ち、誇りを持って仕事をしているからなのでしょう。

私は、中学校で生徒会の役員をしています。辛いことや大変なこともありますが、より良く楽しい学校生活のためにはなくてはならない仕事です。私も父のように、自分の仕事に責任と誇りを持ち、最後までやり抜きたいと思いました。

税金が創った私の夢

旭市立海上中学校３年　　井手本　麻央

私は、中学生になってアスリートを食事の面で支える職に就きたいという夢ができた。そのように思うようになったのには二つの理由がある。

一つ目に、学校給食だ。私は、毎朝、献立表を見てから学校へ登校する。私が住む旭市では物語に登場するメニューが給食で出るものがたり給食、豚レバーを使った鉄人給食、千産千消（地産地消）デー、ＷＡＳＨＯＫＵの日など毎日私を楽しませてくれる。そんなおいしくてバランスの良い学校給食が大好きだ。そして、私に食への興味を持たせてくれた。

二つ目に、家庭科の授業だ。栄養素や食についてたくさんのことを学んだ。バランスの良い食事を考えたり、食材に含まれている栄養素などが私たちの生命活動にどのように使われているかなどを学ぶのは陸上選手である私に大きな影響を与えた。授業を受けてから、家での食事が変化した。学んだ６つの基礎食品群をもとにバランスの良い食事を摂るようになった。これは競技力を向上させるうえでとても大切なことだ。バランスのとれた食事は強い体を作るとともにパフォーマンスの発揮につながる。しかし、私だけでできることではなく、母の支えもあった。私のために母も学び、毎日朝からバランスの良い献立を考えて私に食べさせてくれた。そのような母を見ているうちに、人を支えることの素晴らしさに気付いた。この二つのことが、おいしくてバランスの良い食事でアスリートを支えたいという私の夢につながった。

毎日、私を楽しませ、食への興味を持たせてくれた学校給食、これには税金による補助が賄われ、私たちは一食二七〇円という安さで食べることができている。私の夢につなげてくれた家庭科の授業、これは税金によって私たちの学校生活が支えられているから学ぶことができた。例えば教室にある机やいす、学ぶための教科書、調べるためのパソコン、先生がわかりやすく説明するための黒板など、学校には他にもたくさんの設備があり、それら全てに税金が使われている。調べてみると中学校では生徒一人当たり一年間で約一一二万円の税金が使われているそうだ。

このように税金に支えられて私の夢ができた。これから進学していくうえでも税金に助けられるだろう。もし、税金の支えがなかったら、お金がたくさんかかり諦めることも増えて多くの人の未来を変えてしまうだろう。しかし、税金の支えがあることで私の夢ができたように良い方向に未来が変わると思う。支えてくれている税金に日々感謝し、私は自分の夢を叶えたい。そして、社会人になったら納めるべき税金をしっかり納めて、次は私が支える立場になりたい。

私の暮らしと町を助けてくれた税

珠洲市立緑丘中学校３年　　奥佐　宗心

今年の５月５日に奥能登地震が発生しました。震度６強の大地震は、私の家も町も一瞬にして壊してしまいました。家の玄関の窓は全て目の前の道路に飛び出て割れてしまいました。屋根の瓦はゆがんで落ちました。柱が傾き家具が倒れ、家の中がぐちゃぐちゃになりました。木造と鉄骨の部分で、家は真二つに割れてしまいました。町の道路はひび割れ隆起と沈降で歩くのも怖くなりました。近所にはぺちゃんこに崩れてしまった家、大きく平行四辺形に歪んでしまった家が何軒もありました。私はその景色を見て戦場みたいだなと思いました。怖すぎて悲しすぎて何も考えられなくなりました。家族と一緒に家の中を片付けながらだんだんと、これからどうなっていくんだろうと不安な気持ちでいっぱいになりました。家は直るのか、壊して引っ越しをしなければいけなくなるのか、お金はどれくらいかかるのか、それまであたり前に過ごしていた私の生活や暮らし、大好きな町は元に戻るのだろうか、と考えてしまい苦しくなりました。

私はその不安な気持ちをお母さんに相談しました。すると、お母さんは税金で国や市が助けてくれる制度があるらしいよと教えてくれました。

まず、地震で出たたくさんの災害ゴミは、無料で受けとってくれました。崩れた屋根や窓を直すために緊急修理制度や応急修理制度によって市が修理費を払ってくれました。また、国の被災者生活再建支援金制度、市はそれに加え、独自に珠洲市被災者生活再建支援給付金事業により、建物を直したり生活を再建するためのお金をくれました。私の家は自営業をしていますが、珠洲市被災事業者再建支援事業費補助金によって壊れた機械やお店を直すためのお金がもらえることになりました。国が今回の地震を局地激甚災害の対象に指定したことにより、道路や学校などの公共施設を直すお金がもらえることになりました。大人たちが納めてくれている税金がたくさんの制度によって配られこんな形で自分の暮らしや町を助けてくれることを初めて知り、感謝の気持ちになりました。

そして、税金によるお金以外にも支えてくれたものがありました。それは、全国からかけつけてくれたボランティアさんの力です。家族だけじゃとても片付けられない状況を助けてくれました。

私はこれまで、何で税金が必要なのか、自分にどう関わっているのか、分からなかったし、大人になって納める意味も分かりませんでした。でも、今回私が災害にあって、自らの暮らしや生活が不安でいっぱいになって初めて助けられたと思える経験ができました。

だから、私も大人になったらしっかり仕事をして税金を納めて、誰かを助ける力になりたいです。

「税金のループ」

弥富市立弥富中学校３年　　渡辺　人富弥

税金とは大人が払うもの。中学生の僕が関係しているのは、お菓子や文房具を買ったり友達と遊ぶ時のチケット代に含まれる、消費税ぐらいだろう。あとは住民税、固定資産税、所得税、自動車税など父が家計をやりくりし時期が来たら支払っている。僕も大人になったら、いずれ支払うことになると認識しているが、今の僕には、どこか違う話だった。

先日、自宅前の歩道が、数十センチ程陥没していた。大きな穴ではない。しかし、気付かず自転車で通ったら、タイヤがはまって衝撃が走るだろう。もしかしたらハンドルを取られて転んでしまうかもしれない。穴に気付かなかった歩行者がつまずいたり、それがお年寄りなら杖が引っ掛かったり、幼い子だったら大ケガに。夜はどうだろう、事故やケガに繋がることが容易にたくさん想像できた。

母がちょうど税金を納めに、市役所を訪れた。ついでに「土木課」と言われる所へ、道路の陥没を伝えた。窓口では住宅地図で場所を確認してもらい、市役所を後にした。

その数時間後、市の職員さんが現場を見に来てくださり、危険を知らせる赤い三角コーンが置かれ、危険があると離れていても予測できるようになった。更に数日後、今度は工事担当の方が数名みえて、陥没していた穴は埋められ綺麗に修繕された。事故やケガの心配は数日でなくなり、安心して通行できるようになった。

母が納税に行き、道路の陥没について相談し、税金を使って工事がされた。このタイミングは偶然ではあるが、納税し、税金が使われている、ループを身近に感じた。

市役所で案内してくれた職員さん、窓口の方、工事の方々のおかげで安心して生活できるようになった。これらのループは、大切な税金で成り立っている。

歩道がきれいになって、事故やケガの心配はもうしなくても良い。納税は、僕らが安心して生活できることに繋がっているのだと思った。周りを見れば道路だけではない。信号や消えかかった横断歩道の整備、街灯や防犯カメラ、毎日通っている中学校や、ゴミ収集などの公共サービス。税金は、まだ納めていない僕にとっても身近な存在だった。

税金を納めなくてもよかったとしたら、家計を圧迫することはない。でも道路の修繕費は自腹になって家計を直撃するだろう。支払えなかったら放置され、横断歩道は消えていくだろう。

税金を納め、正しく使われる「ループ」があってこそ、僕らは安心して暮らせる。

目の前できれいになった道路を見て、遠い存在だった税金が、身近に感じるようになった。

税がつくる心の余裕

学校法人関西大倉学園関西大倉中学校２年　　松本　心思

ピカピカと信号機が点滅し、はあはあと息を切らしながら白線を横切って走る。毎日それが当たり前で、なんなら「信号機のせいで汗かいた」とさえ思っていました。

私は夏休みの初め頃、旅行である国を訪れました。行く前からその国はあまり発展していないと知っていましたが、いざ足を踏み入れてみるとそこに広がる世界に私は思わず息をのみました。舗装されていない、ゴミが散らばったガタガタの道には入る隙間もないほど沢山のバイクや車。強い下水のにおいがし、信号機も横断歩道もないその街には、クラクションが鳴り響いていました。活気があって良いのですが、短い距離を渡るだけでも命の危険を感じ、いつも日本で暮らしている私にとってその状態は恐怖でした。日本には信号機が多く設置してあり、クラクションを聞くことも滅多にありません。私は日本での「当たり前」が世界では珍しいということを改めて知ることになりました。

日本に帰ってから、道路の舗装や信号機がどのように設置されているのか調べてみました。道路の整備や信号機の設置には、「公共事業関連費」、「地方交付税交付金」という名目で税金からお金が出ていることを知りました。税金が私たちの暮らしをよりよくしてくれるのです。これらの税金は、年間の国の支出の多くを占めていて、ゴミの収集、下水道の整備などにも使われています。いつも消費税などで金額が細かくなりうっとうしいと思っていた税金は、人々の安心を築いているのだと考えるようになり、視点が大きく変わりました。空気がきれいでゴミがなく、整備された道路をみんなが安心して、利用することができるのです。税金は日本の安心、安全な暮らしを作ってくれていると実感しました。

そして私は、税金から日本の人たちの心の余裕ができていると思います。例えば信号機がなかったら、事故が増えたり、渋滞ができたり、ストレスを感じることも多くなるでしょう。ですが日本は交通がしっかりと整備されており、ストレスが少なく、安心して通学や通勤をすることができます。また、信号機がないところで、歩行者と車が譲り合う様子をよく見ます。それに譲るときに怒らずに、笑顔で接する。そういう状況ができているのも税のおかげなのかもしれないと思いました。疲れながらもたくさん働いて税金を納めてくれている大人のおかげで、私たちは安心して生活することができています。

私たち未成年は納税の機会が限られていますが、私たちのために働いてくれているたくさんの人たちに感謝の気持ちと笑顔を忘れないようにしていきたいです。ピカピカと信号機が点滅し、今日も横断歩道を走って渡る。でもこれまでにはなく、信号機が、街の人たちの安心安全を守るヒーローのように見えました。

税金は世界を救う

島根大学教育学部附属義務教育学校８年　　片岡　睦深

「ルーマニアにも東京駅があるんだよ。」笑いながら姉が教えてくれました。どういうことか分からず聞くと、日本の援助でできた駅に、感謝の証として、「ＴＯＫＹＯ」と名付けられたそうです。ルーマニアの日本に対する心遣いに、とてもうれしくなりました。

ルーマニアへの援助は「ＯＤＡ（政府開発援助）」と呼ばれるものです。これは、主に先進国が開発途上国に対して行う援助のことで、支援金には税金が使われています。国税庁のホームページによると、日本では税金の０．４％がＯＤＡに充てられ、金額は５千億円以上にものぼります。税金が私たち国民の生活を支えていることは知っていました。しかし、その他にも、助けが必要な他国の援助にも使われていることを知り、とても驚きました。

日本国民が納めた税金が、他国のために使われるのに、不満を感じる人もいるかもしれません。けれど、ＯＤＡについて調べると、多国への援助は日本のためでもあることが分かりました。ＯＤＡを通じて途上国を支援すれば、その地域の発展に繋がります。人々が安心して生活でき、経済的にも余裕が出れば、日本の製品を輸入する地域も出てくるはずです。また、日本は資源や食料の多くを海外から輸入しています。そのため輸入先の国が不安定だと、日本にもその影響が出てきてしまいます。世界をよりよくしていくことが、私たち日本の利益や安定に繋がるのです。

もちろん、損得ばかりを考えて、ＯＤＡが行われているわけではありません。途上国の環境問題などは、先進国が原因の場合もあります。例えば、先進国に輸出するために森林を伐採したり、先進国が化石燃料を使うことで、途上国の環境に問題が生じたりしているのです。これらの問題解決のために、日本がＯＤＡで協力することは、必要なことではないでしょうか。

日本もＯＤＡで助けられた国の一つです。戦後の復興や経済発展のために、アメリカや世界銀行をはじめとする国際社会から、支援や融資を受けていました。また、二〇一一年に発生した東日本大震災の時も、先進国だけではなく、途上国を含め世界１６３の国・地域から支援の申し入れがありました。日本も、海外の様々な国民が納めた税金で支えられ、今日まで来られたのです。そのことを噛みしめつつ、今は消費税だけですが、私自身も納税の義務を果たしていきたいと思いました。

「困っている人を助けるため」シンプルですが、税金が使われる理由はこの言葉にまとめられると思います。平等な世界にしていくためにも、税金で弱い立場にいる人を助けるべきです。それが日本国内であっても、海外であっても、私たちは手を取り合い、助け合わなければいけないのだと感じました。

ルーマニアにＴＯＫＹＯ駅ができたように、税金で助け合った証が世界各地に増えていって欲しいです。

学校生活と税

新居浜市立中萩中学校３年　　八ッ橋　明音

七月終わりの日曜日、私は人生で初めて大学に行った。高校三年生の姉が参加するオープンキャンパスに興味を持ち、連れて行ってもらったのだ。初めての大学のキャンパスは予想以上の規模で、ただただ圧倒された。学部の説明をする大学生はみな目的意識を持ち、将来の姿をしっかりと見据えて勉強している様子で、とても輝いて見えた。高校入学当初から、姉は同じ夢を追いかけている。それに比べて、なんとなく学校に通い、なんとなく高校受験に向かっている自分に、正直焦りが生まれた。

しかし、午後からの学校説明で、私はなんとなく学校生活を送っていることを更に後悔することになる。それは、学費の説明を何気なく聞いていた時だった。

「教科書代は、学科によって違いますが、年間で五万円ほどかかります。」

という言葉に驚愕したからだ。教科書なんて四月当初に配られ、書き込みや日々の勉強でボロボロになるまで使う物であり、お金を払った記憶はない。

「教科書なのに、高すぎない。」

と尋ねた私に、姉がさらりと言った。

「高校になると教科書はお金かかるよ。高校でも三万円くらい必要な時あるよ。小学校と中学校は義務教育だから無料だけどね。」

この当たり前の学校生活を支えているのが、税金である。調べてみると、教科書の無償配布は世界中で行われているわけではない。そして、教科書だけでなく、今当たり前のように使っている学校用のタブレットも全員同じものを貸与されているではないか。日本が、義務教育という平等に教育を提供する素晴らしい環境を税金で作ってくれているからこそ、私たちは当たり前のように高校を選び、進学することができているのだ。そして、たくさんの選択肢の中から将来を選ぶことができる。「当たり前」の学校生活は、社会に支えられたかけがえのないものであると知り、残りの学校生活をどのように有意義に過ごすかを考える良い機会となった。

この夏休みは、高校でも体験入学が行われている。高校によって特色が様々で、将来の自分をしっかり想像し、高校を選ばなければならないと感じている。そして、「当たり前」だと感じていた勉強できるということ、将来を選ぶことができるということに、より感謝の気持ちを持つことができるようになった。

私達が与えられてきた環境を、これからもずっと支えていくためには、税金は必須である。税金は無限ではない。私は、税金によって支えられている「当たり前」にもっと気付き、正しく理解することや、現状の課題を知ることが必要なのではないか。そして、この「当たり前」をこれからの子ども達にも「当たり前」にしていくためにどうすればよいかを考え、関心を持ち、支えていける大人になりたいと思う。

大河と共に生きるには

学校法人都築育英学園リンデンホールスクール中高学部３年
津田　実来

「あれ？きれいになってる！」

いつの間にか綺麗になっていた河川敷のサイクリングロードに私は目を見張った。

福岡県の筑後地区に住んでいる私は、よく筑後川沿いのサイクリングロードを利用する。太陽に照らされてキラキラ輝く水面を横目に、心地いい風に吹かれてサイクリングをするのは爽快だ。

普段は美しく穏やかな筑後川だが、大雨時になるとその表情を一変させる。筑後地区は近年、数十年に一度と言われるほどの大雨が頻発していて、梅雨の季節になると街や田んぼは浸水し、農作物にも甚大な被害をもたらしている。大雨の時期に市民が特に気にしているのは、一級河川、筑後川の氾濫だ。幸いにも、今のところ大きな氾濫は起きていないが、大雨が降るたびに河川敷は水没し、雨が上がった後は、草木や泥が流れ込みめちゃくちゃになってしまう。

つい先日もその大雨が降り、街中の人々は復旧作業に取り掛かっていた。私は河川敷の様子が気になっていたので、近くを通りかかった際に川の方へ寄り道をしてみた。河川敷に着いて周りを見ると、先日の大雨で流れ込んだ流木や土砂はすっかり片づけられていて、いつものサイクリングロードに戻っていた。驚きと同時に、私はあれほど荒れていた河川敷を毎回どのようにして片づけているのだろうと疑問に思った。

そこで、私の住んでいる地域で今年起こった大雨災害の被害総額について調べてみた。農業で約 23 億円、商工業で約 14 億円、総額 36 億５千万円もの被害があったそうだ。私は、大雨災害でこれほどの被害が出るとは想像も出来なかった。

次に、災害の復旧作業がどのようにして行われているかを調べた。すると、「税金」が災害被害の復旧に深く関わっていることが分かった。例えば、大雨のせいで陥没した道路があったら、その道路の復旧工事の費用は税金で賄う。その他にも、河川敷や街に流れて来た土砂の掃除費用などにも税金が使われている。

さらに、税金は災害対策にも使われているということが分かった。そのうちの一つが今、私が住んでいる街で行われている大規模な貯水槽建設工事だ。それだけではなく、筑後川の水位を確認できるライブカメラを設置して、市のホームページで配信なども行っている。市は市民の安全を守ってくれていたのだ。そのためには税金が必要で、私たちにとっては無くてはならない存在なのだと思った。

今までは、税金と言われるとどうしてもネガティブな印象になりがちだったが、様々な形で私達の身を守ってくれているという事を知って、私は税金へのありがたみを感じた。税金がどのように私達の暮らしを支えてくれているかを理解した上で納税することが、明るい日本の未来を築く第一歩だと思う。

誰かのために

学校法人宮崎日本大学学園宮崎日本大学中学校３年　　一万田　琴子

妹は先天性白内障で生まれてきた。生まれつき目の水晶体が白くにごっている病気だ。生後五ヵ月のときに病気がわかった。病院を受診した二週間後に手術を受けることになった。退院するとき、医療費がいくらかかるのだろうと、とても不安だったと母が話してくれた。病院の請求書には、手術や治療に約二百万円がかかったと書かれていたそうだ。しかし、実際に両親が払った入院費は、医療費千円と入院中の食事代の約三万円ほど。残りの百七十万円は税金だ。税金がなかったら、妹の手術費は支払えなかったかもしれないと言っていた。

実は両親は、それまで税金を払っても、役に立つことに使われていると感じられなかったそうだ。私たちが学校に行けたり、道路が整備されたり、安心して生活することに使われていると分かってはいても、税金を身近に感じる機会がなかったと教えてくれた。

しかし妹の手術の請求書を見たときに、たくさんの人達に支えてもらっているのだということを実感し、涙が出てきたと言っていた。

妹はその後も何度か手術を受け、そのたびに税金に助けてもらっている。重度心身障害児で、病院にもたくさん行くし、リハビリなども受けている。そのすべてが税金に支えられている。妹は今９歳で、毎日元気に特別支援学校に通っている。「この日常があるのも、みんなの税金のおかげだよ」と両親は教えてくれた。妹が特別支援学校に通って、先生達から手厚いサポートを受けられているのも、もちろん税金のおかげだ。

最初の手術の後、少しでも恩返しがしたいと、母は市のボランティアサークルに入った。市の広報誌やお知らせを音読してテープに録音し、目に障害がある方達へ届けるボランティアだ。私も母と一緒にボランティア活動をしている。録音したテープを持って行くと「いつもありがとう。とても助かるよ」と言ってくれる。私や母の小さな活動も、こうして誰かを支えているのだと感じる瞬間だ。

私も大人になったら、きっとたくさんの税金を納めるようになる。税金が教えてくれた支え合いの心をこれからも忘れず、「誰かのために」と思いながら納めていきたいと思う。

税金は国民からの奪取か

八重瀬町立東風平中学校３年　　比嘉　文香

「はぁー？また税金あがるん？収入は増えないくせに税金ばっか増えていって。政治家ってちゃんと国民のこと考えてくれてるんかなほんまに。」
と、尊大な態度でテレビに映る政治家たちを前に、母はふてくされた口調で言った。二〇一九年八月、財務省は同年十月から消費税率を十パーセントに引き上げると発表した。当時、国民の大多数の人間が、この増税に消極的な態度をとっていた記憶がある。私も母も、後ろ向きな気持ちをもっていた人間の一人だ。

しかし、それから四年後。私たちは思いもよらない形で税金のありがたみを知ることとなる。

今年の七月下旬、学校は夏休みとなり、いよいよ受験勉強に本腰を入れ始めた時期だった。あの日は朝早くから夜遅くまで勉強し、疲れてすぐに眠りについた。深夜三時頃だっただろうか。突然、激しい腹痛に襲われた。お腹の痛みは強くなる一方で、私と母はすぐに病院へ向かった。内科での診察のあと点滴と痛み止めを投与されたが、私には全く効果が無かったため医師にもっと詳しい検査をすることをすすめられた。そこで、ＣＴ検査、ＭＲＩ検査、腹部エコー、血液検査を行った。

一時間ほど経っただろうか。医師は私と母にこう告げた。
「卵巣出血の疑いがあります。かなり出血の量が多いため、明日当院の産婦人科を受診してください。」

母は顔色を失っていた。検査結果の詳しい説明をされた後、産婦人科受診の予約手続きを済ませ、私と母は会計へと向かった。だがそこでも度肝を抜くような言葉を聞いた。
「お会計、四万九千六百三十八円です。」
母が保険適用にはならないのかと聞くと、役場で医療費助成金受給資格の申請をすると、医療費免除になるとの情報を聞いた。この情報は私も母も聞いたことが無く、受付の方に言われるがまま、役場へ向かった。役場の受付の方に事情を説明すると児童家庭課という課に案内された。案内が児童家庭科の方に代わり、再び事情を説明した。係員さんは真摯に私たちの言葉を聞いてくれた。この時の係員さんの言葉がとても興味深いものだった為ここで紹介させて頂きたい。
「助成金受給って、入院している方だけではなく急患の方も利用できるんです。税金で賄われているんですから、もっとたくさんの人に知って頂きたいですね。」

この言葉は、明らかに私たちの税金に対する意識を変えた。さらに、増税されたことにより対象年齢が拡充したという。対象年齢が拡充したということは、その分、助けることのできる人も増えていくということだと身を持って知ることができた。幸い、私の卵巣は順調に回復しつつある。税金は、国民からの奪取などではなく、国民を守るためにあるものだと、この作文を通して世の中に伝えたい。

税金と医療の体制

江別市立野幌中学校２年　　北山　七海

私の祖父は、昨年七月、喉頭癌と診断された。病気が分かった時には食べることもできず、手術もできない状態だった。放射線治療を行っている間は、新型コロナウイルスの影響もあり、家族の面会はできず、病院の入口で窓ガラス越しに涙ながらに電話で会話をした。オンラインでやり取りをするのが精いっぱいだった。その後、十月から祖父は在宅ケアとなった。在宅ケアでは、ケアマネージャーという人が来てくれて、祖父に合わせてリビングやトイレに手すりをつけてくれた。また、訪問介護の人が来てくれたり、週一回、リハビリに通ったりしていた。少しずつ動けなくなる中でも、リハビリは祖父にやりがいを与えてくれた。二月にはわずかながらも一緒に食事をすることができるようになった。何を食べたいかと聞かれ、私は

「祖父と同じ物が食べたい。」

と答えた。最後に一緒に食べたすき焼きの味を私は今でも忘れない。その後、今年の三月下旬から入院となったが、五月下旬には看護師さんのすすめもあり、再び在宅ケアとなった。

祖父が亡くなる一週間前からは、毎日訪問看護の看護師さんが来てくれた。看護師さんが薬の説明をしてくれて、祖父も安心した様子だった。お医者さんも来てくれた。一緒に外国の話をして、祖父に楽しみを与えてくれた。亡くなる二日前に吐血した時には、夜中だったのにも関わらず、電話をしたらすぐに看護師さんがかけつけ、点滴で薬を入れてくれたそうだ。残念ながら祖父は亡くなってしまったが、最期の時を一番落ち着ける家で迎えられたことを祖母は喜んでいた。祖父もきっと喜んでいたに違いない。

こうした医療の体制は、社会保障関係から成り立っている。家庭で手すりをつけるとなると多大な負担になるが、社会保障制度のお陰で、安くレンタルできたのだそうだ。この制度がなければ、祖父は最期の時を家で迎えることはできなかったかもしれないと考えると、医療体制の充実には感謝しかない。

国税庁のホームページによると、社会保障関係費は、歳出の三割を超えている。また、二〇二三年、六十五歳以上の割合は過去最高の二十九パーセントを越えているという。今後も社会保障はますます充実しなければならなくなるのであろう。これまで税金というと「無駄づかいをされているもの」という印象しかなかった。しかし、今回の祖父への支援を通し、税金に対する印象が少し変わった。私達の生活を支えるためにも使われているということだ。税に対する考えをもつためには税への知識がなくてはならない。正しい知識をもった上で、改めて自分の考えをもち、五年後有権者として自分の考えを示すことができるようになりたい。

もしものときの支え

秋田市立泉中学校３年　　杉渕　和穂

夏休みに入る数日前、梅雨前線の北上に伴って北東北に線状降水帯が発生した。その影響で秋田県に記録的な大雨が降り、広い範囲で床上や床下浸水が起きるなど、大きな被害をもたらした。テレビでは常に避難情報が流れ、外ではバケツをひっくり返したような雨が降り、やむ気配はない。これからずっと雨が降り続けば、家が浸水したり流されたりしてしまうのではないかと恐ろしかった。

梅雨前線が秋田県を通り過ぎ、晴れの日が続くようになった。幸い、私の住んでいる地域では大きな被害は出なかったものの、街中では商業施設の濡れて使えなくなったイスやテーブル、売り物にならない食品や電化製品、本などの数え切れないほど多くの廃棄物が外に置いてあるのを見かけた。電気がついていない店の前には「臨時休業」と書かれた看板があり、被害の大きさを物語っていた。いつもとは百八十度違う景色に言葉を失った。テレビでも連日大雨の被害状況が報道され、私たちの平穏な生活は当たり前ではないことを思い知らされた。今回の大雨による被害額は、土木施設が県全体で百八十一億六百二十万円、農業関係は八十八億八千五百四十七万円だと報じられた。被害額を新聞で知った時、想像もできないほど大きな額だと感じた。この大雨は秋田県に深い爪痕を残し、大きな損害を与えたのだ。

そんな中、秋田県は被災した人たちに補助金を給付することを決めた。各家庭の被害状況に応じて、最大三百万円から百万円が支給されるらしい。これをテレビで見たとき、この補助金はどこから来るのか不思議に思った。気になって母に聞いてみると、「税金が使われているよ。」と教えたくれた。今まで、税金は学校や図書館などの公共施設の運営にしか使われていないと思っていたが、母が教えてくれたことで、災害時の給付金にも使われていると分かり、驚きと同時に、税金の使い道の多さにも気付かされた。給付金は、被災した人たちが生活再建をするための一助となるだろう。さらに調べてみると、災害廃棄物の回収や処理、被害調査のための職員の派遣にも税金が使われていることが分かった。税金は、被災した人たちを支えるためにも使われていて、税金を払うことで、いつ来るか分からない災害に備えている。そう思うと、税金があることが心強く感じた。

日本で暮らしている以上、地震や大雨などの災害を避けることはできないし、いつ自分が被災者になるか分からない。しかし、税金を払うことは、予期せぬ災害に見舞われたとき、自分や誰かが被災した際の助けとなるのだ。私も将来就職し、納税者となるだろう。社会を支える納税者になるために、税金がどのように使われるのかについて理解を深めていきたい。そして、税金は、もしものときに自分や誰かの支えになるということを心にとめておきたい。

五百円玉と曽祖母

五泉市立五泉中学校３年　　渡辺　結愛

ゴールデンウィーク初日一本の電話がなった。母が電話にでると母の祖母が心臓が痛いと言って倒れたという内容だった。かけつけるとすでに救急車が到着しており、曽祖母は心臓が止まり救急団員の方々にＡＥＤと心臓マッサージをされているところだった。いつも元気な曽祖母がぐったりしているのを見てもう死んでしまうのではないかと思い、涙がでてきた。救急団員の方が処置を続けていると曽祖母は息を吹き返した。そしてそのまま救急車で病院まで運ばれていった。迅速な対応のおかげで曽祖母は助かった。その後母から救急車は税金で動いていることを聞いた。税金の印象は百円の物を買ったら十円の消費税がつき、十円払わなくてはならない。そんなのもったいないなと思っていた。しかし命を救ってくれた救急車に税金が使われていると知って税金が身近に感じられるようになった。

そこで私は税金についてインターネットで調べてみようと思った。国や都道府県、市区町村では、私達が健康で文化的な生活を送るために、個人ではできないさまざまな仕事をしている。その費用は、国民みんなで出し合っている。これを「税金」という。税金には四十六種類もの種類があり、消費税や所得税、法人税など知らなかったことがたくさんあった。税金は警察署や消防署、市役所、公立病院、公園、ゴミ処理施設、道路や橋の整備など。毎日通っている学校でも、校舎や机、椅子、黒板、理科の実験道具、教科書などに使われている。もしも税金がなかったら、今は救急車を呼べば無料で病院に運んでもらえるが、お金を払わなければ運んでもらえなくなる。学校に行く時毎日通る道路の信号もついていないし、道もぼろぼろ。ゴミの収集者がこなく、街中ゴミだらけ。交通事故にあったり、地震や台風の被害にあっても助けてもらうサービスは全てお金がかかってしまう。あたりまえに利用している公共サービスがなくなってしまう。学校に行くのにもお金がかかってしまう。税金はみんなが互いに支え合いよりよい社会を作っていくために必要な物だ。

いつもにこにこしながら五百円玉をくれる曽祖母の命を救ってくれた税金に感謝をしたい。今は消費税しか払う機会しかないが、大人になって自分でお金を稼いだら税金を払う機会が増えていくだろう。自分も社会に貢献できる大人になりたいと思う。

“当たり前”への感謝

滑川市立滑川中学校２年　　北野　佑衣

四月。新学期。毎年新しく配られる教科書に新学年になったのだと実感が沸いて心が躍る。そんな新品の教科書を手に取り、裏に記名しようとすると、こんな文が書いてあるのをよく目にする。「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」と。私はこれを読んだ時、大切にしなければいけないな、そう思うだけだった。この作文を書くまでは。

日本では義務教育期間の九年間に一人当たり約八百四十五万円もの多額の税金が補助金として使われているそうだ。その他、教科書以外にも机や椅子などの備品、実験道具、給食などにも税金によって負担されている。学校の教育題材は税金で溢れ返っていたのである。知らないことばかりだった。当然のように通っている学校。それは、多くの国民が一生懸命働き、税金を納めてくれているからこそ私たちは様々なことを学ぶことができているのだと知り、とてもありがたみを感じた。

そんな時、ふと、小学六年生で学習したＳＤＧｓのことが思い浮かんだ。外国はどうなのだろうか。ＳＤＧｓには「四、質の高い教育をみんなに」という項目がある。しかし外国には発展途上国が多くあることも現状であり、勉強をやりたくてもできない人もいれば、まともな生活を送ることですらできない人も多くいる。今の暮らしがあるのは、税金があるからで決して当たり前ではない。そんな中で今、何不自由なく生活し学べる場所があるのは、とても幸せなことだと感じた。

中学生が今できる税の社会貢献は消費税を払うくらいだろう。私は今まで、何かを買うときには自分が所持しているお金を価格以上の金額で払わなければいけないと捉えてしまい、どちらかといえば税金にマイナスのイメージを抱いていた。しかし、一方で、税金は子供の未来を思って使われていることを知って、税に対してのイメージが百八十度変わった。そして税金は、生活を支えている必要不可欠なものだと今まで以上に気付かされた。国民にとって税金は欠かせない存在であり、そのお金を使って身近なところで私たちを救ってくれている。自分が払った税金が知らない誰かのためになっていると同時に、自分をも税金に助けてもらっていたのだ。だからこそ、毎日を当たり前に思わず税金に感謝するべきなのだと、私は思った。

また、納税は「納めるもの」であり、「取られるもの」ではない。そんなマイナスな意識を変え、年齢関係なく国民一人ひとりが税金の使い道や生活との結びつきを理解することができれば、税金を納める姿勢も変わって納税に関してもっと前向きになると思う。

私は、税金があるからこそ成り立っているこの社会に貢献するために、大人になって立派な納税者になれるよう日々学び続けていきたい。

税金のバトン

大月市立大月東中学校３年　　松浦　そら

所得税、法人税、消費税…。生活の中で次々と課される税金の必要性に、ずっと疑問を抱いていました。しかし私の生活は税金による様々な制度に支えられていることを知り、その役割の大きさとありがたさを実感しました。

私は今、入院しています。小学生の頃から手術や入退院を繰り返してきました。本来なら巨額の医療費がかかりますが、子ども医療費助成制度によりそのほとんどが税金によって助成されます。また私はひとり親家庭で、ひとり親医療費助成制度も受けています。もしこれらの制度が無かったら母の負担は計り知れません。日々の生活を営むことに精一杯で、今のように治療を受けることなどできなかったと思います。私の生活は税金のおかげで成り立っています。

この他にも、例えば病気になったらすぐに診察にかかれたり、緊急な処置が必要な時には救急車で運んでもらえたりするのも、税金によって医療費が援助されているおかげです。もし税金が無かったら医療費が出せずに失われてしまう命が多くあったと思います。普段の生活の中で税金の影響について意識することは少ないですが、税金による様々な援助やそれによって成り立っている生活が、あたり前として私達に浸透していることに改めて感謝したいと思います。

私は今、幸せです。家族や医師、看護師に支えられて日々生活しています。しかし、それだけではありません。この生活の裏には、顔も知らないたくさんの方による、税金という力があります。皆さんの大切なお金と温かな支援を無駄にすることがないよう、これからも一生懸命治療に励みたいと思います。そしていつか就職して社会の一員となった時には、ここにいるような病気と闘う子ども達や支えてくださった高齢者をはじめ、共に生きる誰かのために税金を納めたいです。そうして私達を支えてくれた税金のバトンを次に繋いでいくことが、私にできる恩返しだと思っています。

税金があるから日常がある

藤枝市立広幡中学校３年　　鈴木　光莉

先日、租税教室が学校で開かれ、今まで以上に税金について考えるようになった。

窓の外に目を移すと、公園から楽しそうな子どもの声やにぎやかな鳥たちの声が聞こえてくる。道路では、たくさんの車や自動車が通り、信号の色が赤から青へと変わろうとしている。近くには、道路のわきで、パトカーが交通違反をしていないか一日中見張っている姿が見える。などと、これら全て、私たちの変わらないいつもの日常は、税金を納める私たちが作り上げている。租税教室が開かれる前までは、こんなに、税金を納めることについて深く考えなかった。

この変わらないいつもの日常は、生まれたときから存在し、また税金を納めるという行為は人生の一部として、当たり前のように生活と密着している。そのため、税金を納める重要さ、大切さを忘れ、結果、この日常が当たり前と化してしまっていると私は考える。

私は、「この日常は決して、あたり前ではない」と強く主張したい。日常は私たちが、義務として税金を納めることで成り立っているのだ。だからこそ、私たちは、この日常の意味を理解し、決して忘れてはならないものだと思った。また、私たちの日常は私たちが作り上げているからこそ、私たちは自由に生きる権利や支え合う権利を持つのだと思う。

世の中は、支え合いの輪だ。税金を納めることで、私自身や、顔も名前も知らないあの子、あの人を救い、守ることができるかもしれない。人生に喜びを覚えることができるかもしれない。可能性は無限大だ。税理士の方が、言っていたように未来の私や人々に幸せが宿るかもしれない。税金は、運ぶことなく現在と未来どちらにも喜びの結果を残そうとしている。だから、今私たちにできることは感謝の意をもって税金を納めることだ。

今の時代、消費税が増税され、税金を納めることに不安を持つかもしれない。私もそうだった。けれど、租税教室を学び、考えが変わった。税金を納めることは、これからの人生の可能性の選択肢を増やすものであり、なにも損することではない。また、その可能性の選択肢を増やすのも、国民みんなで支え合い、負担し合うことができるため、一人だけではない。

けれど、近代の日本では、少子高齢化が問題視され、今後どのように費用を負担していくのか課題が上がっている。税金を納めることは、他人事などではない。国民一人一人が税金について考え、向き合っていく必要がある。

このように、税金を納めるということは、未来の私たちの生きる可能性の選択肢を増やし、支え合うことの重要さを実感するとともに、税金の問題に一人一人が向かい合おうとする意識を高められるものだと考えた。

私はこれから、日常の意味を忘れず、感謝の意をもって税金を納めていきたいと思う。

花火大会の裏で

学校法人関西学院関西学院中学部３年　　上田　悠貴

僕は先日久しぶりに友人たちと花火大会を見に行った。新型コロナウイルスによる制限がない開催は４年ぶりで、夜空に広がる幻想的な光と音を沢山の人が楽しんでいた。この素晴らしいイベントが、自治体の税金によって支えられていることを知り、新たな視点から税金の重要性を考えるきっかけとなった。

花火大会は、地域の文化やコミュニティを活性化させる貴重なイベントだ。美しい花火や賑やかな音楽の背後には、多くの準備や計画、費用が必要だ。その費用の一部は、自治体の税金から賄われていることが多い。税金は、僕たちの生活を豊かにするための基盤となるものであり、花火大会といったイベントを通じて、地域全体に幸福感や活力をもたらす役割を果たしている。

また、花火大会には大勢の人出があり、警備も大変だ。警察や消防、救急隊などが万全の態勢で待機し、安全を守るために活動してくれている。その警備活動にも税金が使われている。花火大会が安心して楽しめる環境を守るためにも税金がどれだけ重要な役割を果たしているかを実感した。

地域の文化や活気を育む場として重要な役割を果たしている花火大会だが、中には「税金を花火に使うのは本当に正しいのか？」という疑問や意見も存在する。花火大会に使われる税金が、他の社会的ニーズへの資金の供給を阻害しているのではないかという意見である。生活に困窮している人への支援や社会的課題への取り組みに税金を充てるべきだという意見は根強く、花火大会自体に疑問を抱く人もいる。このような視点から見ると、花火大会に税金を使うことに対する懸念や批判は避けて通れないだろう。こうした意見を無視せずに、花火大会にかけられる税金の妥当性を検討することも大切だ。

地域の花火大会は、僕たちの心を温かくするだけでなく、税金の使い方や地域への貢献の意識を育む場でもあった。税金と地域の結びつきを考えると、税金は単なる負担ではなく、地域社会を維持し発展させるための重要な支えであることが分かる。税金の使い方については様々な意見があることを無視せず、議論を行ったうえでバランスを取りながら決めていくことが大切なのだと感じた。花火大会を通じて、税金の使途についての意識を高め、地域社会の幸福度向上につなげていくことは今の僕たちにもできることだ。さらに僕たちの生活に密着した税金の使い方が、よりよい社会を築く一環として、大切な存在であることを再認識した。

未来への投資

国立広島大学附属東雲中学校３年　　福居　青空

「勉強は贅沢だ」そんな言葉を僕は幼い頃から知っている。小学生の頃までは何のことかさっぱりだった。何故なら、週五日で学校があるだけでなく、学校から毎日、沢山宿題を出されるため、当時は勉強なんてうんざりだと思っていた。やりたくもない勉強をやらされているだけで、勉強が贅沢だと感じる余地など、どこにもなかった。しかし、今なら分かる。なぜ勉強が贅沢なのか、それは小学校も中学校も税金のおかげで通えているからだ。公立の学校は税金で成り立っているし、教科書や資料集などの教材も税金が僕たちに買ってくれたものだった。勉強をするには「勉強をするための環境」、「勉強をするための道具」、「勉強を教える先生」と、なくてはならないものが沢山あり、それらは全て税金が用意してくれていた。「勉強は贅沢」、その通りだと思う。見えないだけで僕たち一人一人には、とても沢山のお金がかかっている。

なぜ国は僕たちに、そこまでお金をかけるのだろう。文部科学省のホームページには「義務教育は、国民が共通に身に付けるべき公教育の基礎的部分を、だれもが等しく享受し得るように制度的に保障するもの」と書いてあった。僕はその言葉の意味を、「義務教育は、次の未来を担う子供たちに正しい知識を身に付けてもらい、より豊かな日本を創っていくためだ」と捉えた。「僕もその一人」、そういう意識が芽生えると同事に、「そのお金を無駄にするまい」と、なんだか勉強に前向きになれた。そして僕が今、こうして整った環境で勉強ができるのは、今も日本中の人たちが正しく納税を続けているからだ。

考えてみれば簡単なことだった。世界には勉強がしたくてもできないような子供たちが沢山いる。その子たちに比べて、勉強の大切を忘れてしまうほど勉強をすることのできる環境にいる僕は贅沢だ。それに税金に支えられた生活は義務教育に限った事ではない、自分の住む街に住民の求める施設や公園ができるのは税金が使われているからだ。税金には本当にお世話になっているし、これからも税金に支えられていくことだろう。

普段は納めることが前に出てきて、あまり良いイメージのない税金だったが、納めた先にある税金の「使い道」を知ることができ、僕は税金を納めることで、まるで投資をしているように思えた。僕もこれから大人になり、今より多くの税金を納めることになるだろう。その時は今まで日本中の人たちがしてくれたような正しい納税で未来への投資をしていきたい。

より良い社会がきっと待っているから。

税に支えられている

今治市立玉川中学校１年　　松木　心優

税金は私たちの生活のためにはなくてはならないものである。私は聴覚障害を持っており、「障害者手帳」というものを持っている。これを持っておくと、生活する中でかかる税金が安くなり、生活が便利になる。

私が今、幸せに暮らせているのは税のおかげだと母から言われたのは先日のことだ。私は部活で卓球部に入っており、ときどき休日に友達と公共施設の体育館で卓球台を貸し切って練習をしている。ある日、受付で障害者手帳を見せると貸し切る時にかかるお金が無料になった。私はびっくりして母にどうして？と言ったら税のおかげだと言われた。この体験を通して税について興味を持ったので、インターネットで調べてみることにした。

私が持っている障害者手帳はたくさんのメリットがあることが分かった。私は人工内耳という機械をつけている。その機会を購入したり、修理する際に払われる税金が安くなったり交通費や医療費の割引などいろんな場面で障害者手帳が活躍していることを知った。障害者手帳をもし持っていなかったら、今はどうなっていたのだろうか。私が幼い時に装着していた補聴器の費用や人工内耳の手術代、機械の費用、病院のリハビリ代、修理代が全て自己負担であったら、私はこれらの医療を全て受けることは出来ていなかっただろう。なぜなら、例えば補聴器は両耳だと約十三万円もするし、人工内耳の手術だと入院費などの総費用を含めると約四百万円程と非常に高額だからだ。もし、これらの費用が全て両親の自己負担であったら、私は今のように生活できていないだろう。

手術なしでは家族や友達と十分にコミュニケーションが取れなかったり、勉強の内容が分からなかったりして、今ほど楽しく学校に通うことは出来ないと思う。私は幼い頃、補聴器では十分に音が聞き取れず、五歳の時に右耳の人工内耳の手術を受けた。人工内耳になったことで補聴器では聞き取れなかった様々な音が聞こえるようになり、私の世界は広がった。そして、小学校六年生の時、左耳の手術を受けた。中学生になり、勉強と部活の卓球に励んで、充実した生活を送ることができている。私はそれだけ障害者手帳に助けられているので、ありがたみを感じている。

しかし、その一方で、「障害者」と認定されることへの抵抗感や、家族や周囲からの理解が得られないことから、障害者手帳を持つ資格のある人が手帳を持たず十分な支援を受けることが出来ない事もあることを知った。私は家族や周囲の理解によって、幼い時から十分な支援を受けることが出来ているので、このような人がいるのは残念だと思う。少なくとも私は障害者であることを悪くは思っていないし、税金のおかげで今の私がいると考えている。大人になって、働くようになったら税金を払い、次世代の同じような子供達の助けになりたいと強く思う。

日本の文化は

佐賀大学教育学部附属中学校３年　　岩本　薫楠子

私は日本の文化が好きだ。そのきっかけとなったのが京都の写真だ。その絵には古くからの外観や、趣深い民宿。暗い夜に行燈の柔らかい光が照らす石畳。その上を下駄でコツコツと音を鳴らしながら歩く舞妓さん。この日本ならではの風景が好きだが、実際に京都に行ったことはなかった。だが今年の四月、私は修学旅行で訪れることになった。私はとても嬉しかった。修学旅行 2 日目、念願の京都を訪れた。しかし私は京都について「ここは京都なのか」と目を疑った。私が思い描いていた日本の文化の真髄「京都」の姿はどこにもなく、近代的なビル、過多なバスの数。ヒートアイランド現象のせいか四月の割には暑く、合服で京都を観光するのは想像以上にきつかった。京都駅から出発し、東大寺や清水寺などたくさんの寺、神社を訪れた。私は、「どうやって京都という都心で神社などの古くからの日本の文化を守っているのか」が気になった。

修学旅行後の社会の地理の授業で、京都では日本独自の文化・外観を守るために条例が定められていると知った。例えば電柱を地下に埋めたり、コンビニの鮮やかな色を和風の外景に合うようにくすんだ色にしたり、ビルの高さを制限している。しかし修学旅行で訪れた清水寺は私が写真で見た清水寺から修理されているようだった。いくら修理されているものとはいえ、そのものが今まで残っているものはほぼないと思う。その工事費はどこからきているのか気になって調べてみた。それは税金からだった。詳しく言うと国家予算には「文化予算」と呼ばれその国の文化や芸術を保護したり、復興したりする政策や事業につけられる予算がある。二〇二三年の総額は一三五〇億。二十二年度対比で二十．五％も増えたという。その税の使い道は「国宝・重要文化財美術工芸品保存修理抜本強化事業」など、さまざまな案・事業が考えられており、中には施行されているものもある。その一つの例として「国宝・文化重要文化財美術工芸品保存修理抜本強化事業」を紹介する。国宝重要文化財美術工芸品保存修理抜本強化事業とは国宝・重要文化財に指定されている美術工芸品で紙や木、絹、漆など我が国古来の繊細かつ脆弱な素材で造られているものを適切な保存修理等で施したり、文化財は火災・盗難等によりいったん滅失毀損すれば再び回復することが不可能であるため、防災・防犯対策などにより強化する事業だ。この事業のおかげで私の大好きな日本の文化は守られてきたのだ。この事実を知ったとき、今まで税金を払っていたことが誇らしく感じた。税金を活用することで日本の文化が守られている。それだけではなく、その文化を多くの外国人の方に伝えることで経済が潤って、また税金が増える。つまり、税金の良い循環が生まれると思った。この素晴らしい日本文化を継承するためにも税金を大切にしたい。

「納税は人助け」

大分大学教育学部附属中学校３年　　近藤　澄空

税金は何のためにあるのだろうか。私たちは何かを買うとき、物自体の値段に加え税金を同時に払う。私はこの「税金」をあまり良くは思っていなかった。

私には小学 2 年生の妹がいる。彼女は小さい頃に発達障害を持っていることが発覚した。身体に障害があるわけではなく、軽度の知的障害で、脳の発達が二、三歳分遅れている。学校では、支援学級で発達障害のある子と一緒に勉強をしている。毎日楽しそうに学校に行っている。

妹は学校が終わった後、障害のある子が行く放課後等デイサービスに行っている。友達もたくさんいて、そこにいる先生達も優しくて、「今日どうだった？」と聞くと、「楽しかった！」と言っている。私はそのような施設にどれくらいお金がかかっているのか気になった。両親に聞いてみると、毎日四千円ほど払っているそうだ。しかし、本当は一日あたり一万円、毎月二十万円もかかっている。税金により、その負担が賄われているらしい。また、妹は月に二回リハビリに通っている。そこではＯＴといった、日常生活に必要な動作の訓練や、ＳＴといった、先生とコミュニケーションをとる訓練を行っている。それにもお金がかかっている。一回につき、リハビリテーションと精神科専門療法、合わせて約二万円だ。しかし、驚くことにそれも税金により家庭の負担は０円だ。

私はこのことを知って驚いた。税金は誰がどこで払っているのかわかりにくいが、私の妹は自分が思っていたよりも多くの人に支えられている。もしこれが全額家庭の負担だったら、妹は放課後等デイサービスにもリハビリにも通えていなかったかもしれない。たくさんの人のおかげで、私たち家族の生活は成り立っているとわかった。

もし今、税金がなかったらどんな世界だっただろうか。私たちが当たり前のように毎日学校に通えていることも、十分な教育が受けられていることも、病気になったとき医療機関で治療を受けられることも、すべて税金があるからだ。私たちが日常生活で「当たり前」だと感じることは、税金がなかったら違っていたと思う。税金は人々の生活を豊かにしている。

税金によって人と人が繋がり、顔も名前も知らない人同士がお互いに支え合うことができる。私は今まで消費税によって少し高くなった料金を払うのが嫌だった。でも、私たちが日常的に納めている税金が、誰かを支え、誰かの命を救っているかもしれない。そう思うと、嬉しくなって、納税することにマイナスな気持ちは何も生まれてこなくなった。

私の将来の夢は医師だ。自分の手で患者の命を救いたい。でもそれだけじゃなくて、納税することで、お金のやりとりでは見えない、その奥の誰かを支えていきたい。納税は人助けだ。

税金払えば憂いなし

うるま市立あげな中学校３年　　平川　あお

今年の八月上旬、私の住む沖縄県に、けが人や死者もでるほどの大型の台風六号が通過しました。台風六号は、停電や断水、食料の不足など、日常生活にも大きな影響をもたらしました。毎日のようにスマホから警報音が鳴り響き、暑さや暗さに耐えながら過ごさなければならない人もたくさんいたと思います。

台風により多くの人々が抱えた不安は、台風が過ぎたあとも消えません。通る道には、落ち葉や折れた木が散乱し、とても危険な状態でした。

台風が過ぎ、しばらくしてから、家族で出かけたときのことです。車で移動していると、停電の影響で交差点の信号機が消えていました。運転していた母は

「通勤するときよく通る道だから」

と、平気そうに車を走らせていましたが、私はどこから車が出てくるのかもわからず、とても怖かったのを覚えています。また、もし歩行者が急に飛び出してきたらと考えると、思わず鳥肌が立ってしまいます。

そこで私は、壊れた信号機の修理代がどこからのお金で支払われているのか気になり、インターネットで調べてみました。初めは、その信号機のある地域からのお金だと思っていましたが、税金で支払われていることを知りました。たしかに、自分たちの住んでいる地域、県、国、地球だからこそ、誰かの命を守ることに繋がるのなら、その為に払う税金は必要だと思います。

台風などの自然災害は、いつ、どこで起こるのかわからず、無くすことはできません。でも、備えることはできます。食料や防災グッズなどの備えはもちろんですが、もしもの時の医療や消防、自衛隊などの備えも大切です。その医療や消防、自衛隊なども私たちが払っている税金によって成り立っているそうです。つまり、税金がなければ、私たちが当たり前のように送っている生活ができなくなり、大勢の人々が生命の危険にさらされてしまうのです。

今、税金を払う意味を理解せずに、ただ払わされていると感じている人も多くいると思います。私も今まで税金について、働いてせっかく得たお金をどうしてまた国に支払うのだろうと不思議に思うことがありました。しかし、今回の台風での経験から、税金は私たちを色々な危険から守り、これからの未来を豊かにするために、必要不可欠なものであることを実感しました。「払えばいい」ではなく、自分や家族を守るための税金なのだと理解した上で、払うことに意味があるのではないでしょうか。

税金払えば憂いなし。

『税』があるから

千歳市立富丘中学校３年　　時田　茜

夢を見た。それは、何気ない日常のごく一部だと思ったけど、いつもとは違う気がした。学校に向かう子どもの数が、いつもと比べて少なく感じた。家の近くの公園があった場所は、何もない空き地だった。この前の工事で綺麗になったはずの道路がガタガタで、川にかかった橋も、とても安心して渡れそうになかった。それに、当たり前のようにあったはずの公共施設が、どこにもなかった。

救急車の音。言い争う声。向かいの家には老夫婦とその娘夫婦が住んでいる。家の前の道路に誰かが倒れているように見えた。そういえば、さっき通りかかった若い夫婦がこんな話をしていた気がする。

「病院に行くのもお金がかかるし、学校に通うのだってお金が凄くかかる。救急車もお金がかかるから簡単には呼べないし。あの橋も危険で渡れない。いつになったら安心して暮らせるんだろう。」

「仕方ないよ。税金があった頃は、もっと不自由なく暮らせていたけど……。」

見知らぬ人の会話なのに妙に『税金』という言葉が、脳裏に焼きついて離れなかった。

夢を見ていた。あれはきっと、税金がない未来。この公園も、道路も、橋も、公共施設も、全部、ぜんぶ当たり前じゃない。風邪をひいただけで病院に行けるのも、小学校を卒業するのも、小学校を卒業したら中学生になるのも、全部、ぜんぶ当たり前じゃない。『税金』がなかったら、道路や橋の整備なんてされないし、小学校や中学校だってお金が凄くかかるから、お金に余裕のある家庭じゃないと通うことはできないと思う。救急車だって呼ぶのにお金がかかるから、助からない命だってあるかもしれない。本当にこれが、私たちが望んだ未来だったのか。

夢を見すぎていた。

「税金がなかったら良かったのに。」と何度も口に出したことがある。欲しいものを買ったときにかかる消費税が、少しうざったらしく思えたからだ。でもそれは、意味のないものでも必要のないものでもなく、私たちが安心して暮らすための大事なものだったのだ。言うならば、私たちは『税金』で『当たり前の安心と日常』を買っている。そう考えると、『税金』を払うだけで安心した暮らしができるなんて、得をしていると思う。

夢を見た。それは、何気ない日常のごく一部、公園から聞こえる子どもたちの笑い声。整備されたばかりで綺麗な道路と橋。幸せそうな若い夫婦とランドセルを背負った子どもたち。いつもと違うところなんてひとつもなくて、当たり前の普通の日常。

夢を見ている。これはきっと、税金がある未来。

夢がある。今を生きる私たちで『当たり前の安心と日常』を守っていきたい。

だから、私はこれからも、『税』と生きる。

嫌われ者のヒーロー

昨今の日本は、電気・ガスなどの光熱費や小麦・卵などの食品、そして最近では一部の新聞まで値上げラッシュである。そんな生活の中で税金を負担に感じる国民は多いだろう。どうしても「搾取されている」という思いは捨てきれない。だが僕は税金の大切さを学ぶきっかけがあった。

二〇一九年十一月、母方の祖父が脳梗塞で倒れたのだ。脳の血管が詰まる恐ろしい病気だ。しかも祖父の場合は、首の太い血管が詰まってしまい、血液の供給が断たれ右脳がほとんど機能しなくなってしまった、左半身は重度の麻痺が残る身体だ。急性期病院からリハビリテーション病棟のある病院へ転院し、入院生活は半年以上に及んだ。祖父の身体も心配だが、入院費も気になっていた僕は、祖母にそれとなく聞いてみた。すると祖母は、「限度額適用認定証」や「高額療養費制度」があるから助かったと言っていた。「限度額適用認定証」は病院窓口に予め提出しておくと、自己負担限度額までの請求で済む制度で、「高額療養費制度」は、月内の自己負担限度額を超えた分が払い戻される制度だ。これは健康保険税から賄われている。僕は祖母に聞くまでこの様な制度があることを知らなかった。現在は特別養護老人ホームに入居しているが、ここでも「高額介護サービス費」という制度を使い、医療費同様、介護負担限度額を超えた分が払い戻される。家族としては本当にありがたい制度だ。

税について調べてみると五十種類以上の税があり、僕が知らないだけで税は色々なところで国民の助けとなっていることが分かった。

日本は梅雨から夏は特に線状降水帯や台風による被害が多い。地球温暖化の影響で海水の温度が高くなり、台風も大型化している。そして今年も線状降水帯が各地で発生し、大きな被害が出ているのをテレビで見たばかりだ。その災害復興にも税金が使われている。その他にも救急車や消防車も税金だ。税金はまるで困っている人を助ける見えない影のヒーローだ。当たり前だと思っていた生活は実は決して当たり前なのではなく、恵まれた環境を維持できているのは税金のお陰なのだ。

税金を払うのは大変なことだが、税金の使われ方を知ると無くてはならない大切なものだということが分かる。納税は国民の義務だ。中には納税に批判的な人もいるだろう。そういう人は、税金がどの様に使われているか、何故必要なのか、きっと理解が足りないのではないか。「税」は確かに種類も多く難しい。用途も多岐に渡る。だが少子高齢化の今、次世代を担う僕達が今の内に税の仕組みや使われ方をきちんと学び理解しなくてはならない。そして今度は「守られる立場」から「支える立場」に、納税の義務を果たせる大人になりたい。

「もの」に敬意を

朝霞市立朝霞第三中学校３年　　佐々木　結愛

「バンッ。」
教室でよく聞く音。誰かが机を強く叩く音。その「誰か」は、しっかりと理解しているだろうか。その強く叩いた机は、自分のもので、自分のものではないことを。

私たちが学校で使っている多くのものは、税金で払われているものだ。このことを知っている人は、多いと思う。しかし、このことを理解して意識している人は、決して多いといえないと私は思う。教室を見回してみる。丸められた教科書、ネジが取れかかったイス、叩かれて痛そうにしている机、乱暴に置かれている図書室で借りた本。こういった光景が見られることを、私は当たり前にしたくない。実際、義務教育期間の九年間を合計すると、一人あたり約八百四十五万円もの税金が使われている、というデータもあるそうだ。私はこの事実を知って、こんなにも多くの税金が使われているのかと驚いた。それと同時に、学校で使っているもの、税金で払われているものを決して雑に使ってはいけないとも強く思った。新学期になれば、机やイス、たくさんの新しい教科書が一人一人に与えられる。これらのものは、先程言ったように、自分のもので自分のものではないと私は思う。自分のものだからといって、教科書や机を乱暴に使うのではなく、さまざまな税の過程があって私たちのもとに届いている。ということをしっかり理解するべきだと思うからだ。また、教科書や机など、学校で使われているものの多くが税金で払われていると知っているだけではなく、もっと、学校と税の関わりについて学ぶことが必要だと思う。そうすることで、身近なものと税のつながりを知れたり、税金についての知識や関心も高まっていくのではないだろうか。また、税金への意識が高まることで、教科書や机などの学校で使うものをはじめ、「もの」を大切にしようという意識も、共に高まっていくのではないかと考える。学校生活において、必要不可欠な教科書や机。他にも、体育で使われる道具、図書室にある本たちなど、学校を見回せば、税金で払われているものがたくさんある。私たち中学生が、税に対して直接できることは少ないかもしれない。でも、税のつながりが身近にあるからこそできることもあると思う。それは、「もの」を大切にすること。学校で、当たり前に使っているものを当たり前と思わず、丁寧に使うこと。こういったことを意識し、心がけると同時に、税について理解をし、さまざまなことを学んでいくことが大切になっていくのではないだろうか。私は、私たちは、「今」できることをするべきだと思う。だから、私はこの気持ちを大切にしていきたい。
「もの」に敬意を。

税金クイズ王

東京都立白鷗高等学校附属中学校１年　　太田　智教

「税の作文？」中学校に入学して初めての夏休み、僕の苦手な「作文」の課題が出た。「でたでた。まいったな～いいや、後回しにしよっと…。」と、案内の紙をヒョイっと机に置き、部屋を立ち去ろうとした瞬間、ふと壁に飾ってある「賞状」に目がいった。ちょうど一年前、小学校で行われた「税金について学ぶ講座」でいただいた賞状だ。

僕の住む荒川区の小学校では、荒川法人会青年部会が主宰する税金ジュニアスクールが行われる。第一部では税金についてのクイズ大会、第二部ではクラスで班ごとにタブレットを使用し、国にはどのような税金があるのか調べプレゼンを競い合う。最後に税理士会の方が丁寧に評価と講義をしてくれた。

第一部のクイズ大会の時の事だ。担任を含めたクラス全員が真剣な顔つきでスクリーンを見つめた。全問正解者は税金クイズ王の賞状がもらえる。お題は１０問、〇×方式、小学六年生でもきちんと答えられる内容になっている。しかしである。〇×ではないある難問が一問残された。それはまさしく算数ではなく数学の問題で僕らをパニックに陥いらせる。最後まで勝ち残ったのは僕と担任だ。センター（共通）試験「数Ⅰ」が得意だったと言いはる僕の担任は急に本気を出してきた。内心僕も焦り「なんだこの計算…暗算では無理だ。」と、鉛筆と紙をとり出し必死に計算した。その難問とはルートを使って概数を求める問題だ。回答した途端、主催者が真顔になった。「えっと、まいったな～。君、正解！」「ここ何年も全問正解者がいなかったから油断してたよ。この額縁、在庫がないんだよな…。」主催者の方は銀色に輝く立派な額縁と、クイズ王の賞状を手渡してくれた。拍手喝采だ。ちょうど公開授業できていた母を、担任は満面の笑みで褒め称えた。

あれから一年後、僕は台東区にある都立白鷗中学校に入学させていただき日々頑張っている。数学をはじめ全ての授業が本当に楽しい。どの先生方も全力投球だ。こんな風に学べるのも、根元には税金の力があると家族全員が理解し、感謝している。税のしくみを国民が完璧に理解するのは難しい。その理由の一つにややこしい数字が沢山隠されている事も考えられる。そして、しくみだけでなく、数学を知らないと不安や不満が生まれる。つまり僕たち国民も、受け身ではなく、常に学ぶ努力をしなければいけないということだ。「成人して僕が税金を納める年になっても、あの税金クイズ王の賞状はずっと壁にかけておこう。」税金ジュニアスクールの時のことを思い出しながら、今僕は、苦手な作文に向き合い、再び数学の勉強をはじめた。

父の想いを引き継ぎ、自分の行動へ

横浜市立中和田中学校３年　　小板橋　美久

私達の生活には、もしものための安全網が用意されており、その結果安心して暮らすことが出来ている。私は、両親のおかげで、何不自由なく生活してきたため、今まで安全網に、あまり関心が無かった。しかし、私の父が、父親を早くに亡くし、母子家庭になったことから、生活保護を受けながら、育英会の奨学金で大学を卒業したという話を以前してくれたことを思い出した。当時の私は、自分のことではなく、自分はそういう立場にないことから、深く考えることもなく、何も感じることは無かった。改めて父に、当時の心境や安全網について話を聞くことにした。

「高校受験前に父親を亡くした時は、将来がとても不安だった。母親と妹を自分で守っていかないといけないし、何より金銭面が不安だった。自分は、高校や大学に行かず、働いたほうがよいのではないかと思った。不安過ぎて勉強どころではなかった。」そう言って父は、当時の心境を話してくれた。「結局は高校も大学も行くことが出来た。生活保護や奨学金のおかげでね。本当に日本人でよかったし、感謝している。」と続けて話してくれた父から、私は、当時の父がとても不安であったことや安全網を知り安堵しただろうことが、自分の体験のように感じることが出来た。

父と話をした後に父と一緒に税金や安全網について一緒に調べることにした。税金があることで、所得のより多い人から、所得のより少ない人への再分配が行われていることがわかった。所得が多い人ほど多く税金を払う累進課税制度は、頑張った人が馬鹿を見る制度だと批判する人がいることも知った。父は、昔は支えられる側で、今は支える側となっている。累進課税制度上、高い割合で負担している。父は多く税金を払っていることは誇らしいことだと言った。どちらの立場も経験したからこその言葉なのだと感じた。父は税金のおかげで、高校も大学も行くことが出来たと本当に感謝しているようだ。累進課税制度を批判する人達は、私のように、苦労して税金に助けられた経験がないから、そのような発想になってしまうのだろうと理解した。

父のおかげで疑似体験できた私は、父が経験したように、自分もいつ支えられる立場になるかわからないため、納税は必要だと感じた。日本は、税金による安全網がきちんと整備されているから、安心して生活も出来るし、犯罪も少ない国なのだと思う。ひとりはみんなのためにみんなはひとりのためにという気持ちでみんなが納税したら、きっと今より幸福な国になると思う。自分だけでは大きな事は起こせないが、自分が継続して思い行動することで、自分の周りの人達を巻き込んでいきたい。ひとつひとつが小さな行動であったとしても周りの人達と合わせれば、大きな力となると思う。まずは自分から小さな一歩を踏み出していこうと思うし、この気持ちを大事にして社会人になっていきたいと思う。

税と共に生きていく

富山市立芝園中学校３年　　遠藤　珠羽

私は今まで税についての知識があまりなかった。物を買った時に付いてくる消費税で損をした気分になり税金について良いイメージを持っていなかった。しかしその税金で私は何度も助けられていることを知った。

私は生まれ付き病気を患っていて同い年の子達と比べて体が弱かった。日光に当たるのが駄目でよく学校を休んだり、学校に行っても毎日のように保健室に通っていた。中学校にあがってからは大分良くなり、激しい運動も出来るようになっていった。けれども完全に治ってはいないので学校を休む回数こそ減ったが、体調を崩すことが多々ある。そうすると決まって母に連れられて病院に行くのだが、私はこの時間が大嫌いだった。母の運転する車に乗って病院に行くまでの時間、医師の話を聞いている時間、診察が終わり薬を処方してもらうまでの待ち時間、どれをとっても良い思いをしなかった。なぜなら小さい頃は自分のことに精一杯で気にも留めていなかったが、小学校高学年頃から両親への申し訳なさで押し潰れそうだったからだ。精神面はもちろん、お金の面でも迷惑をかけてしまっているに違いないと思い込んでいた。ある日、その重圧に耐え切れなくなり、胸の内を母に晒け出しながら謝っていると、母は笑顔で子ども医療費受給制度を教えてくれた。それは中学三年生まで医療費の自己負担が無料になる制度なのだそうだ。私はこれを聞いてとてもびっくりした。そのような制度があることに驚いたし、何より自分が気付いていなかっただけで税というものはこんなにも身近に存在していたものなのだと痛快した。

このことがあってから私は日常生活において、視野を広げることを意識するようにしている。そのおかげで税について以前よりもくわしくなることが出来た。税はいわば未来への命をつなぐバトンなのだ。このバトンがどんどん増えていけば今より、よりよい社会へと変わっていくだろう。しかし現実的に考えて現状だと難しいと考えられる。私一人だけが行動を起こしてどうにかなるような簡単な問題ではない。けれども一人一人が意識を変え、行動を起こせばそれは大きな力になる。今日本は税金を巡って「年金問題」や「少子高齢化」などたくさんの問題を抱えている。これは決して他人事ではなく、未来の自分達におおいに関係してくる。これからも日本に住むならば今こそ税について学び直す時なのではないだろうか。

身近にある税金

静岡県立浜松西高等学校中等部１年　　柴田　貴衣

今まで私は税といっても、消費税、所得税、酒税くらいしか身近に知ることができていなかった。しかし、小学校六年生の時、学級文庫の隅に置いてあった「知っておきたいお金のこと」という本を読み、私が今まで知らなかったような税金のことをたくさん知ることができた。法人税や相続税、自動車税や住民税など、国に納める国税と都道府県や市町村に納める地方税を合わせると、約五〇種類の税金があると説明されていた。このたくさんの税金は、生活の中でどれくらい関わっているのかと思い、年に一回の旅行を例にして考えてみた。私は毎年、両親と祖父母の家族みんなで熱海に温泉旅行に行っている。まず、熱海で温泉に入ると、入湯税という一日一人当たり一五〇円の税金がかかり、一泊二日の五人家族での宿泊で七五〇円になる。昼食に和食屋さんで海鮮丼を食べる時には消費税がかかる。店内で食べれば一〇％、テイクアウトだと八％課税される。旅館に泊まるのにも宿泊税という税金がかかり、さらに車での行き来に使うガソリンにもガソリン税がかかる。今まで何気なく旅行に行っていたけれど、実際は多くの税金が支払われているのだと知ることができた。

国税である消費税やガソリン税は国に納められているので、使い道は様々だと思うけれど、地方税である入湯税は身近に感じたため、集められた後、どのように使われているのか調べてみた。旅行先である熱海市の入湯税収入額は全国二位だ。二〇二一年度の入湯税収入は約二億四三〇〇万円で、そのうち観光の振興に四三・八％、環境衛生施設の設備に四四・二％、消防施設等の設備に九・七％、鉱泉源の保護や管理施設の設備に二・三％使われているそうだ。このように、温泉で徴収された税金は、私たちが快適に熱海の旅行を楽しむために、またもう一度温泉に来てもらえるように使われているのだと分かった。

入湯税は集められた税金の使用目的が狭く、限られたものであるのに対し、消費税などの国税はより広く、多くの目的で使われている。主に、医療や福祉、介護などの社会保障や義務教育、道路整備に関わる費用などになっている。また、国家公務員の給与としても使われているそうだ。

集められた税金は、私たちの生活をよりよくするために使われている。税金の使い道は地方自治体によって違うけれど、私たちがより、安全で快適な生活が送れるように考えられ、使用されていることが分かった。普段、安心して気持ちの良い生活を送れるのは税金があるおかげであるということを忘れずに生活していきたいと思う。

安心で不安のない社会のために

鳥取市立桜ヶ丘中学校３年　　田中　玲人

「緊急！緊急！直ちに非難せよ！」大雨の中、防災無線が流れる。辺りにサイレンが響き、ただならぬ緊張感が走った。家族のスマートフォンからは、緊急速報の着信音が一斉に鳴り、大雨特別警報と緊急安全確保の発令を知らせた。

令和五年八月十五日、僕の住む鳥取市は台風七号に襲われた。ニュースでは、見たことがないほど増水した河川が映し出され、橋脚に激しくぶつかる濁流は、今にも町を飲み込みそうな勢いだった。アナウンサーは「命を守る行動を！」と呼びかけ、言いようのない恐怖が僕に押し寄せた。

そんな恐怖の中、県や市のホームページで被害状況や行政の対応状況、避難所の情報を家族と確認した。河川の監視や道路の冠水に備えたパトロールが行われ、多くの避難所が開設されていると知った。この非常事態で、県や市の人も家や家族が心配なのに、住民のために働いてくれてありがたいと僕が話すと、こうした行政サービスを支えているのは税金だと、母が教えてくれた。

翌日に台風は過ぎ去ったが、親戚の住む佐治町は大きな被害を受けた。大叔母から聞いたところでは、町内の橋や川沿いの道路が崩落したり、土砂崩れで道路が通れず、孤立状態となったり、水道管が破損して断水した地域があったそうだ。多くの住民が不便を強いられたが、迅速な復旧作業によって孤立状態は解消され、水道も一週間で復旧した。

これを聞き、僕は思った。もし、道路の復旧が行われなかったらどうだろう。学校にも仕事にも行けない。買い物にも行けず、食料に困る。体調が悪くなっても病院に行けないのは、命に関わる問題だ。また、炊事や洗濯、トイレや風呂など、水は僕たちの生活に不可欠だが、水道がなければ飲料水や生活用水を確保できない。これも命に関わる問題である。家を出れば道路があり、蛇口をひねれば水が出るのが当然だと思っていたが、そうした日常生活は行政が提供するサービスにより成り立っていると痛感した。そして、それを支えているのは税金だ。税金があるからこそ、僕たちは安心して日常生活を送ることができるのだ。

道路や水道以外にも、医療や年金、教育や福祉など、幅広い分野で税金は活用されている。僕たちが不安なく日常生活を送ることができ、安心して暮らせる社会となるためには税金という存在はとても大きい。僕一人の力は微々たるものだが、社会人になったら納税の義務を果たし、安心で不安のない社会のための手助けをしていきたいと思った。

「よろしくね」と「ありがとう」の気持ち

北島町立北島中学校３年　　新井　水稀

私にとって幼稚園は思い出の場所だ。優しい先生、楽しく遊んでくれる友達など、すてきな人達に恵まれた。みんなと過ごした日常は、今でもよく覚えている。

そんな忘れられないものとなった貴重な経験をした幼稚園が二〇一九年一〇月から、一部を除き制限付きで、利用費が無償化されていることを知った。そこでなぜ無償化することにしたのか、そして、そのお金はどこから支給されたもので賄われているのかということについて調べてみた。まず無償化された理由として最も大きなものは、少子高齢化対策だそうだ。そして無償化された分のお金は、増税された分の消費税で賄われているそうだ。この２つを知って特におどろいたのは、支払っていた消費税が、私より小さな子たちのためにも多く使われていたということだ。正直、増税され納めてはいたものの、「なぜ上げるんだろう」と思うだけで、使い所は知らなかった。中学生の私でもどこかで役に立てているというのが素直にうれしかった。

また、子どもに対し税金が使われているのは、保育園、幼稚園ばかりではない。小学校や中学校の義務教育中、さらにそれを終えた先にある高等学校にも税金があてられている。高校卒業時までに使われる税金が、一人あたりなんと一千万円をこえる都道府県もあるそうだ。いったいなぜ、みんなが納める大切なお金を、未成年の私たちに多く使ってもらえるのだろうか。それはきっと、学校に通っている、また今後通うことになる私たちは、自分だけでなく税金を納める大人の未来をも担っているからだと思う。学生のときは税金の助けを受け勉強をし、大人になったら過去の自分のような、未来を担う学生に期待と希望をこめて税を納める。こういった循環がつながっていることを考えて、暖かな気持ちで税を納め、あてられた分を使うことこそが、未来をつくっていくのではないだろうか。

よく大人が、

「学生時代の思い出は忘れられない。」

と言うのを耳にする。きっとその言葉は本当で、私も今までの幼稚園、小中学校での思い出も忘れず、これからの残りの中学校生活、そしてその先の学校でも、忘れられない思い出をたくさんつくることと思う。しかしそれは支えてくれる家族など周りの人、さらに国民が納める税金があって成り立つことだ。そのため、思い出をつくるだけでは終われない。思い出をつくると同時に、助けてくれるたくさんの人たちに恩返しをするような気持ちを持って授業を受け、勉強するようにしたい。

大人になる上で必要な経験をするために保育園、幼稚園、学校などはあり、だからこそそこに税金が使われる。これからは私が出した私なりの考えを胸に、学校に通うようにしたい。学校に行くのを助けてくれている多くの人たちに、ありがとうの思いを持ち続けよう。

理解を深めて

小竹町立小竹中学校３年　　青沼　和歩

小さい頃から、当たり前のように利用している図書館。買うと高い本だが借りるとタダだ。小さい頃から利用していたとはいえ、小学校低学年ぐらいまでは、本を読むのが好きではなかった。そんな私だが、読みたい本を見つけたことで、読書が好きになり、また図書館を利用するようになった。今は勉強で忙しいが、長期休暇の時は、母と何冊読めるか競争している。

今でこそ、誰もが無料で利用できる図書館だが、有料だった時代もある。戦前の公共図書館は、一八九九年の図書館令で閲覧料金を取ることが認められていた。一部無料で解放されていたらしいが、戦前のまだ裕福ではない時代、有料での閲覧は、本を読みたい子供達にとっては高嶺の花だっただろう。一九五〇年に決められた図書館法のお陰で、誰もが完全無料で利用できるようになった。税金のお陰で、本を買う余裕のない人達でも本を楽しむことができるようになった。

私にとって身近な存在の図書館。蔵書が税金によって購入されていることも、成長とともにいつの間にか知っていた。普段は借りて帰るだけだが、利用者が少ない時には図書館の雰囲気を楽しむため、その場で読むこともある。この様な素晴らしい空間が、税金で運営されているのだ。

最初は、本の購入費だけに税金を使っていると考えていた。だが調べてみると、図書館を維持するには、人件費や水道光熱費等にもお金がかかることがわかった。沢山の税金が使われることで、図書館が運営されると知り、税金のイメージが良い方へ変わってきた。

今までは税金という言葉に良いイメージがなかった。平等とはいえ、子供から消費税を取ることに不満があったからだ。先日、学校で行われた租税教室で、税金についてのアニメを見た。ゴミの収集や救急車を呼ぶことが、税金のお陰で成り立っている事実を改めて知ることができ、更に税金へのイメージが変わった。当たり前のようにあるこの生活が、税金を納めることで成り立っている。この生活を守るため、税金の仕組みはとても大切だと思うようになった。

世の中には、まだ税金を納めることに対し不満に思う人も多いだろう。税金の無駄遣いじゃないかと思うことも、多々あるのは事実だ。しかし、私のように税金の使い道がわかれば、不満が解消される人もきっといるだろう。そして、租税教室のような税金の使い道を知る機会を増やせば、もっと沢山の人に気持ちよく税金を納めてもらえるはずだ。私も税金をもっと知ることでさらに理解を深めていきたい。

今はまだ、消費税を支払うことしかできない。だが、将来は様々な税金を納めることで、社会を支える大人になりたい。

命を守る見えない優しさ

山鹿市立鹿本中学校３年　　城　佳澄

私には弟がいる。弟はいつも元気で明るいがよく高熱を出して苦しんでいる。私はその姿を見ると一年前、弟が熱痙攣による意識不明で救急車で運ばれ一週間入院したことを思い出す。その出来事は父にも母にもかなりの衝撃だったらしく、めったに口にしない。弟が退院をし、家に帰ってきた時父はボソッと母に言っていたことを私は聞いていた。

「少しでもたくさん働いて一円でも多く納めるんだ。助けてもらった恩返しとたくさんの人を助けてほしい思いを納めるんだ。」

私には父が何を言っているのかさっぱりわからなかった。半年が過ぎた弟の３歳の誕生日に、私は思いきってその意味をたずねた。

弟は緊急入院だったため検査や食事、薬などにお金がとてもかかったそうだ。その医療費を一度で退院と同時に支払おうとした父はその価格に愕然としていた。しかし、看護師さんが山鹿市子ども医療費助成制度や子どもの入院などを支援する制度などたくさんの保障を紹介してくださったそうだ。その制度を利用した結果、ほとんど無償ですんだと言う。「山鹿市子ども医療費助成制度」は山鹿市が０歳から１８歳までの子どもを対象に医療費の一部を助成する制度である。この制度のおかげで、私も、兄弟も薬をもらったり病院で受診を受けることができている。父は

「市の医療費助成も救急車をすぐに呼べるのも日本の人々が税金を納めてくれているからなんだ。その税によって沢山の命が助けられているし、公務員である父さんと母さんの給料もいただけるんだよ。」

と話してくれた。税金のおかげで助けられた命、生活するためのお金、健康でいられることなど色々な幸せや優しさが身の回りにあることを知ることができた。この時、私はやっと父が母に言っていた言葉を理解した。父は税金で優しさのバトンをつなごうとしているのだと感じ、今まで不満ばかり言っていた自分が少し恥ずかしくなった。

私の両親は小学校の教師だ。私は両親が忙しそうにしていない日を小さい頃から見たことがない。いつも仕事の電話が夕食の時にかかってくる。夜はパソコンを睨んでいる。休日の昼は丸つけ。私はそんな毎日を送る両親の背中をずっと見てきた。遊んでもらえることはほとんど無かったし、家の手伝いをさせられることも多く、愚痴を言うことも多かった。しかし、父と母の思いを知った今、私は

「ありがとう」

と毎日思うと同時にとても尊敬している。私は両親のように税金のありがたさを理解して優しさのバトンをつなげることのできる大人でありたい。自分自身の生活も、沢山の人の生活も幸せになるように願って納税をする大人になりたい。

税金が創る助け合いの連鎖

浦添市立仲西中学校２年　　佐藤　可歩

「税金を払わなくてもいい人がいるって知ってる？」

税の作文を書くことを伝えた時の母の言葉だった。私は「なぜ？」と思い調べることにした。その人達は、非課税という所得税や住民税を納付しなくてもいい条件に当てはまっていた。例えば、生活支援を受けていたり、障がい者などの人で前年の合計所得が百三十五万円以下だったりする。生活するのに苦労している人が対象者になっていた。

調べる前の私の税金に対するイメージは、税金を払うことは国民の義務で、払わなければいけないもの・年金のお金の為に払うもの程度にしか思っていなかった。しかし、私の両親が払っている所得税などが、このような生活に困っている人達を支えていると考えれば、家族を誇らしく思った。そして、私も多くの人を支えられるように将来、税金をたくさん納められるようになりたいなと思った。税金は、ただ払っているものではなく、人々を助け合っている架け橋のようだった。

私は税金に興味を持ち、税金の役割について調べてみた。税金は消費税しか知らなかったが、法人税やたばこ税などの様々な種類があった。私は、それは本当に必要なのかと疑問に思った。しかし、これらの税金は、警察署や消防署などの施設、道路や橋、上下水道の整備、学校で使う教科書や机など、私たちが生活する様々なところに税金は使われていた。税金がなければ、水は安全に飲めないし学校にも行けない。更には、街は犯罪だらけになってしまうかもしれない。税金は、この当たり前のようにある日々を形作っている大切なお金なのだ。

さらに調べてみると、少子高齢化が増税につながる原因になっていることを知った。年金や介護などの、税金が使われているお金が増えることになるが、高齢者の生活を支える若い人の数は減っているからだ。二千五十年では、高齢者一人を支える若い人は一・三パーセントになると予想されている。「増税する意味ない」などと否定的に捉える人も多いだろう。増税対策として、国の無駄な支出を減らしていくことも大事になってくると思う。しかし、まずは私達国民が、税金について深く知った上で政治を支えることが、国を動かす第一歩に繋がると私は思う。

税金は助け合いの連鎖だ。納税を通して社会を支えている人がいるから、私は学校に通え、勉強をすることができている。あと数年後には私も本格的に納税する立場になるが、ただ税金を納めるのではなく、目に見えない誰かを想って納めていきたい。そして、その連鎖がずっと繋がることを望む。誰もが安全に暮らせることを願って。